大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和五年八月一日發行（每月一回一日發行）　第七卷 第八號　川柳雜誌第八號

川柳雜誌

主幹・麻生路郎

八月特輯號

草薙金四郎先生著〔最新刊〕

川柳辞典

四六版二五〇頁●ボブリン裝幀●箱入全一册　定價一圓五十錢　送料十二錢

川柳用語を解してよく川柳の妙味を味はんとせばまづ本書によれ

●本書は、川柳初學入門者の爲めにその手引ともなり、師友ともならん事を目的とせるものなり。

●語彙は主として國語辭典にもれたものを集めたものであるが特に川柳に密接な關係のある語は之を採錄した。

●配列は五十音順により、引例の文辭語法については極めて原文通りに從ふ事とした。

●引用の柳句中に於いて、略解したものあるは、之を初學入門の參考に供せんとしたものである。

大阪市南區東清水町
駸々堂書店發行
振替大阪一〇三五番

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

精の椿島大 一唯產國

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい
全國有名化粧品藥店にあり

第八卷
第八號

川柳雜誌八月特輯號目次

築港のなぎさ……關本雅幽（二四）
松島から九條……岩本素人（二六）
何所へ行く心齋橋と戎橋……安井ひろし（二八）
天滿まで出稼……福田山雨樓（三二）
芝居から出て……高橋かほる（三四）
船塲は囁く……松丘町二（三五）
涼風馬堤曲……松盛琴人（三七）
松の住吉……竹内多聞（三七）
飛田細見……橋本綠雨（四二）
城影暗し……朝田新水（四三）
日の出通り……伊藤愚陀（四三）
NAKNOSHIMA……住田亂耽（四四）
濁つた千日前……麻生路郎（四五）

夜の大阪

柳の絮……長野吉高（五〇）
振幅……松丘町二（五一）
湧くユーモア柳味を探る（三）……福田山雨樓（一三）
川柳辭典走り讀……蛭子生（二四）
難解史句について……木村半文錢（二九）
よい句を作りたい會話……阿部閑生（三〇）
私信に毛の生へたもの……川村花菱（三三）
海士の事……惠比須生（二八）

創作

近作……麻生路郎（四）
川柳塔……（八）
雅幽 山雨樓 愚陀 柳路 かほる 鐵洲 琴人 町二
亂耽 新水 綠雨

◇

綠之助 明珠 靈壺 閑生 夏曉 裸人 艸樂 梨夢 雪峰
鶴峰 桂枝 多郎 一杉 濁水 鮎美 豆秋 晃卓 春秋
丹路 華水 奈緒美 觀月 計加 錦水 奇可愛

粒々集……長崎柳秀、大島濤明（二六）
近作柳樽……路郎選（一七）
同……ひろし選（四八）
光耀抄……葭乃選（三）
……蛭子省二選（五五）
埃飛石……橋本綠雨選（五六）
都會……山本雨迷 井汀柳 共選（五八）

一路集

各地柳壇……（六一）
本社七月例會……（六一）……松丘町二記
火華……（六〇）
川柳書架……（一七）
杭全町メモ……（五七）……橋本綠雨
續川柳家戸籍調……（五五）……福田山雨樓
編輯の窓……（一六）……路郎生
表紙……槍ヶ嶽
匿字……麻生路郎

近作

麻生路郎

文學を輕んじ馬で裾野ゆく

新町にて

生きこし生けるものの中に妓あり

翠夢君に

夏の夜を何處まで君は行くのです

米の値に換算すればおじけづき

虐待へただにんまりこ笑つこけ

古本屋でもやりますこ歸りゆく

振幅

松丘町　二

この世はあるがまゝにある。その外に在りやうがない。この世があるがまゝにあるといふことに驚かぬ精神は貧困した精神を示す。これが辨證法的唯物論の最も積極的な表現であるときいたが、これでみると近世唯物論もつまりは人間常識に他ならない。たゞこれを人間常識と確信して謬らぬためには、少々しつかりした勇氣と洞見とが必要であるだけだ。この世はあるがまゝにあつて、その他にありやうがない、と眺め悟つて、さてこの世があるがまゝにあるといふことに驚く精神とは少くとも詩人のものである。

白秋だつたかの詩に

薔薇の木に
バラの花咲く
何ごとの不思議なけれど

といふのがあつた。

君見たまへ波稜草が伸びてゐる

とは路郎先生の創作の歴史過程に一轉機を劃した記念すべき作品であつて、我が川柳雜誌派の川柳の礎をなしてゐると云ふことが出來る。白秋のバラの詩にしても、先生のほうれん草の句にしても、在るがまゝにある自然の生命力に、驚異の眼を瞠つてゐる詩人の姿である。バラの木にバラの花が咲き、畑のほうれん草が伸びたといふまことに當り前すぎるほど當り前な自然界の一現象に、驚いてゐるのである。

あらゆる對象へ生な眼を向ける。そしてあるがまゝに觀察する、といふことは川柳に限らずあらゆる詩の創作の正しい基底をなすものではあるが、その結果を在りのまゝに、生のまゝに作品として表すといふことを意味するものではないので、ここに川柳のやうに最短の詩では特にその表現に注意せねばならぬことは申すまでもないが、前掲二種の詩は、私が云はうとする意味の説明しやすい例として擧げたものであつて、一見如何にもあるがまゝに表現されてゐるやうだが、而もこれらの表現か

ら受取る内容は、決して淺いものではなく、複雜な作者の心が生動してゐるので、かゝる大膽な直情的な表現の成功は、嘘や遊びや、單なる技術の追つく所ではないのだ。この世があるが儘にあり、その他にありやうはない。この世があるがまゝにあるといふことに驚かぬ精神は貧困した精神である。といふことは、川柳家にとつては川柳常識であつて、あらゆる創作の發生は、この世があるがまゝにあるといふことに驚く精神に原因する。この原因から生れた川柳作品といふ結果が、ごんな色合をもち ごんな色合に眺められ樣とも、その根蔕は些かも搖がぬ。

そんなことは解りきつたことだと人々はそつぽを向く。仲々以て解つてはゐないのである。この世があるがまゝにあるといふことに驚くといふことは、生やさしいことではない。ましてこれを明確に認識するといふことは、作家にとつて何を意味するかを考へなくてはならぬ。由來眞理こそは平凡なものであり、平凡な事實を語るのは、複雜な理論を語るより遙かに難かしいことである。（たとへば平凡明白な定理を應用して、複雜な幾何の問題を解くのはやさしいが、定理そのものを理解するのは頗る厄介なのと同じ理屈である）この世をあるがまゝに眺めるといふことは、自分に都合のいゝやうに歪めたり弄つたりして眺めるより、遙かに多くの勇氣と洞見が要る。だがこの世があるがまゝにあると眺め得たゞけでは何の變哲もない。この世があるがまゝにあるといふことに驚くといふ精神に至つては、一種の悟達の精神であつて、貧困を知らぬ。この精神は初めて詩を生む。生れた詩がごんな形を採り、ごんな色合を持つかは、作家の技術の問題であつて、正當な詩人の精神は常にこの世はあるがまゝにあるといふことに驚いてゐるのである。何千年の昔からあらゆる時代、あらゆる人々に眺められてきた月が、空が、海が、緑愛が等々常にその時代その詩人にとつて新しいのはこれがためだ。

驚くといふことは感動することである。情熱を呼び起すことである。我々は屢空々しい川柳を讀まされる。表現の技術は練磨のお蔭で夫々川柳らしい巧さで出來てゐる。だが一向驚いて居らぬのである。しんこ細工のやうに洒々としてひねくり廻したものである。一體對象をあるがまゝに眺める。といふことは一見いかにも容易なことのやうに思へる。ちやうど人は自分の知らぬことが一番難かしいものだと思ひ込んでゐるが、その實知つてることが一番難かしいものだ。たとへば我々にとつては川柳が恐らく一番難かしい。といふ意味合で、あるがまゝに眺めるといふことは大變困難なことである。ありのまゝに眺めるといふことは、結局は眺められたものゝ眞實を眺めることである（こゝで人々は眞實と事實とを混同してはいけない。）眺められた眞實が『驚き』によつて捉へられて、作者の腦中を濾

過された結果、どんな衣裳をまとつて現れやうと、その眞實は眞實である限りに於て人の心をうつ。我々は子供の叫びに屢心をうたれる。子供は凡そこの世で一番正確な現實主義精神を持つものだが、この精神の發露である言葉が、いつも眞實を叫ぶからだ。いや眞實中の眞實であるからだ。言葉の持つあらゆる暗默の合意性を捨てゝ、言葉の裸形を示すからだ。

我々は川柳作家として先づ日常茶飯の歌から始めてきた。素朴な實在論者として、心を歌ひ花を歌ふことから始めてきた。そして年期を入れてるうちに、技巧の修練によつて兎に角作家たる宿命の理論は獲得してきたのだが、たつた十七音字の表現記號を握らされた川柳作家の川柳作品が、恒及的の生命を以て歌はれるためには、結局は彼の幼兒たちが無自覺になしとけてゐる言葉の裸形の洞見といふことに歸するのではあるまいか。あらゆる嘘や偏見や合意性から解脫した言葉の裸形——それは正しい意味での『無技巧の技巧』を意味する。川柳の如き最短詩の作家が表現の生命とするのは素より技巧である。技巧を離れて十七音字が詩であり得る理由はない。技巧が辿りついた極致、そこに言葉の裸形があり、無技巧の技巧は完成される。

さて、この世はあるがまゝにあり、その外にありやうがない。この世があるがまゝにあるといふことに驚かぬ精神は貧困した精神である。若し現實主義に定義を與へるならばこの言葉の外にない。だが現實主義位現柳壇の一隅で誤られ歪められて、悲慘な姿で振廻されてゐるものはない。現實主義はその宿命に從つて寫實の道を捨てるわけにゆかぬ。寫實とは對象から眞實を探り出すことである。だからこの世はあるがまゝにあると眺める眼は、眞實中の眞實を見出し得る眼でなければならぬ。ヂャン・コクトウが別の言葉で云つてゐる。『眞の現實主義は僕らが毎日觸れてゐるために、最早機械的にしか見なくなつてゐる事物を、それを初めて見るかのやうな新しい角度をもつて示すことにある。それらの作品は一見すると全く見知らぬものゝ如く異樣に見えるかも知れない。がすぐそれが僕らの日常生活の一部分に過ぎないことを發見するに遑ひないのだ。そしてそれのみが詩人に許されるところの唯一の創造だ』

以上私は行をづらして同じことを繰返したに過ぎない。私は次のやうに云ひたかつたのである。

情熱を以て眞實を歌へ。眼は倘るまでも冷徹に。技巧を磨くことは心を磨くことである。——所詮川柳とは我々の身から出た愛すべき錆である。と。

川柳塔

○　　關本雅幽

踏み倒す一手へ歳暮屆けられ
例により例の如くに醉ふ師弟
守錢奴の腰の邊から牛に似て
芋虫に聞けば主義なごいらぬよし

○　　福田山雨樓

貧相な顔か美人の眼に入らず
金を握れば生意氣な顔をする
抽斗に隱して彼は死にました
大都會女給金切聲をあげ
ついロに出る親の借金
ざんさつの現場のやうに熟睡し
大檢校の裏店に住む
掌で叩けば蚊にも丸味あり
風呂屋の前の人間的にほひ
吸殼へ女は無駄がないのなり
夜店の荷布團と子供積んで着き

子の病氣（三句）

醫者の云ふまゝに舌なご出す兒なり
子の病氣蚊は特別にうなるなり
子の病氣訪ねてくれていらくし

妻（三句）

老妻へ雨は素ッ氣もなく續き
金を出す妻とつくりと呑み込めず
意見がましき妻とはなりぬ

○　　伊藤愚陀

闇に紛れて絹靴下を脱いだらし
死ねば好いと思ひ乍ら電車道越えた
まじめなここも笑ひほぐした心が淋しい
猫が窓へ來て女の顔してた
ヴアルガーな鼻へ女給のマッチの灯
くちびるがなめくぢのやうなめらかにひかる

○　岩崎柳路

レビューの列がさつと變つて手と手と手
ねむり草の様な女に恭はれて
はげ隱し等鏡臺の中にあり

○　高橋かほる

やゝあつて女給青やぎ歌ふなり
新聞がきてゐますかと女房聞き
臺所へ起きて來た子をほめてやり
それぐに朝顔を出す島の内

○　中島鐵洲

旅なればこそ女房の手もひかん

源太夫湖山と京に遊ぶ（三句）

いもぼうで長いへんじを聞いて出る
商賣は上手音羽の瀧三筋
タクシーはこず五條阪雨にぬれ

○　松盛琴人

人間が機械に暇を出されてゐ
子規をよみ槐多を讀みて天井と寢
出過ぎた奴だ俺よ引込め

二度目の減給

減給は頭を撫でゝ云ひ渡し

○　松丘町二

颱風やリボンの如く女來る
線の暗い顔して路次に子が育つ
鴉はスマート雀は朗らか哀れわれ
油のごとく滲む自嘲ぞ顔拭かん

○　住田亂耽

トラックがひよろ〳〵と行く剩餘價値

タンク問題

資本家の貌したタンク聳え立ち

○　朝田新水

戀の勝利者銀婚式を擧げ
庶務係退屈しての胸を張り
板の間の子の危なきに郵便夫
文化病とも云ひたさの夫婦なる
試みて通がるこゝよ鮎料理
寒さにもめげず斷髪振りを見せ

○　橋本綠雨

坐りなほしてビールをもてなされ

斷りも言へず金持にもなれず
正直の子に冷汗をかいて詫び
説教の中にもエロがまじるなり
紹介所へ行くそれだけの金もなし

伊藤絲之助

◇ ある演奏會にて

琴三味線浮世の風は知らせまじ
木の葉の青さ團結せよといふ
四十の情痴を見てゐる煙草
さびしきことぞ泳ぎが上手とか

西村明珠

◇

一日の汗が二圓で安過ぎる
社長と闘士へ煙突そびえてゐ
田舍へ歸るより女ビラをまき
下女の身の手持無沙汰がつらいなり
職のない人へ麻雀負けてやり
エプロンをかけて奥様何もせず

片桐靈雷

◇

砂に描き砂にまろびし戀もがな
だらりんと別れともない手をまかせ
さくらんぼくはへて惚れにかるゝなり
葬儀もう氷柱運ぶだけの用

阿部閑生

◇

病院の廊下に子ども遊び慣れ
おのがじゝ履物もつて見舞客
疳癪の詫もさせられ減茶々々さ
簾うち灯火提げてあちこちす

三輪夏曉

◇

角帽へまだあこがれが持てる歳
あゝも成ることも成ることは死ぬるまで

中野裸人

◇

新聞を見る間も二號坐らされ
妻もまたカン〳〵帽を輕くうけ
弟と暑い二階で將棋さし

西田艸樂

◇

庖丁を持つた手へ鷄商はれ
種がよいの悪いのと兎知らぬ事
博士を出したクラスに俺もゐる

生田翠夢

◇

眼を閉せば彼の女の脚がまた踊り
放浪の瞳へ港の灯は明し

◇　池田雪峰

アパアトの狹さへ夏が迫るなり
夕涼みカン〳〵蟲が聞いてゐる

姉又產む

貯金とは反比例して兒が生れ

◇　福田鶴峰

順々に叱られるのも制度なり
氣安さは客が商法敎へてゐる

歸省

齒刷子を暫く止めて河鹿聞く

◇　岡崎桂枝

麥茶なと召され娘も戻る頃
南瓜を喰はぬ娘のピアノの音
百圓札惚れた女給へ見せに來る
弟の角力へ渾々めてやり
減俸の話女將は鼻で聞き

◇　松田多郎

食卓のトマト二人がわけてゐる

◇　阿形一杉

身を細くするに都合のよい袂
事勿れ主義とはうまく逃げおほせ
ぞんざいな口とは云へず情があり
謀めぐらす細きうなじより

◇　中澤濁水

高知城日にモダン振る市に呆れ
空車乘つたなと馬心づき
奢るなら廻りませうと言ふ別れ
檢望へうつかり鯨汐を吹き
それ以上見解の差で猪口を換へ

◇　水谷鮎美

三十二戀は女にまかしきり

勝美さんの靈にさゝぐ

一周忌その眼その眉子をおもひ

中山寺參詣

線香の匂ひはらおび授けらる

◇　須崎豆秋

檢束を遠卷きにして鳴く蛙
寫眞班もめて來るのを待つてゐる
骨立てた儘二次會へついて行く

◇　木村晃卓

醫者何も云はずに歸るたよりなさ
煩はし心營にさそはれし

母何處へ植えるつもりか茄子の苗
博士今日すきなら飲めと云うて呉れ
死場所に此處もよいなり海地獄

◇　喜多春秋

ものいはぬ人だつさかいなと困り
女の今昔喜多川歌麿
愛人へ女盛りの立姿
人妻へ飛行機がくる露地の空
バスガールあぶない子供のけてゆき

◇　山本丹路

わめく子を抱いてお辭儀のながくし
夫妻いさかふ上をヒコーキ
可愛い妖婦そんな技巧を教はつて
脚々々新聞を折る手が忙し

◇　日野華水

貸主が來て張板がよく乾き
やせてゐる女に好きな風呂がわき
物思ひ急に動いたうちわあり

◇　茨木奈緒美

石なげし波へみづすましもゆれる
戀は知りませぬ人道主義をとき
逢うた夜のバットが袂で折れてゐた
おもちや握つて子が死んでゐる

◇　川村觀月

神さまのレントゲンにも似たるなり
目をとぢて耳をふさいで首を切り
温順しき者道草のそれに似て

◇　三好計加

なめくじの十匹許りのらくらし
蛙めが頭を出して見てゐるよ

◇　上野錦水

いつ覺えたのか妹髪が結へ
馬を射たらしく昇進異數なり
諦めて坐り直した夜のしゞま

◇　岩垣奇可愛

ごの影も皆やはらかし月一つ
父の臭ひ母の匂ひのするタオル
不景氣へ突きの一手を知らなんだ
苦しさへ落付いて居る聽診器
街へ來て牛は尿りをながめられ
お土産はごの子ごの子と差別あり

湧くユーモア

柳味を探る（三）

福田山雨樓

笑ふ婢がゐる。笑はぬ隱居がゐる。笑はぬ妾がおり、笑ふ泥棒がおる。所詮笑ひこはものゝ動機であり、片寄つた空氣であり、まち〳〵な健康の喇叭である。

川柳は笑ひを捉へた。しかしこれまでの多くの作られた川柳は笑ひに捉へられてゐた。笑はせう可笑からしやうこあせつた古句が示した哄笑、嘲笑、苦笑、微笑の數々は笑はしさえすればいゝ池の椽でしきりに踊り廻つてゐたのだ。さう云ふものが多かつた。

あとの噓を待つて居る變な面
唐紙の下地のやうに下女は塗り
騷ぐまいものか研屋の氣が狂ひ
用心に晝寢してゐる土用干
糸卷の向ふに亭主踊つてる
筏乘り馬鹿々々しくも野を戻り
鷄が欠伸をしたと聾言ひ

毘沙門は辛子の利いた顏ッつき
車力梶が刎れるとぶら下り
糠袋餘つ程顏を長くする
誂へたやうに姑頓死する
神主は人のあたまの蠅を追ひ
釣れぬ奴ビクを覗くと隱すなり
名物を食ふが無筆の道中記
怖い顏したとて高が女房なり
探し出す度伸び上る猿轡
猿轡和尙を始め奉り
筍は盜まれてから番がつき
約束の首とりに行く大晦日
二階から墜ちた最期の賑やかさ
胸倉の外に女房手を知らず
武士の喧嘩に後家が二人出來
蚤一つ娘盛りを裸身にし
嬉しい日母は襁でかしこまり
父親が拾へば文も靜かなり

寢かす子を亭主あやして叱られる
子をあやす中は本氣の沙汰でなし
隣りから張合もなく聟を取り

こんな笑ひはいくらでもある。何んぼでも笑はしてくれる。しかしこれ等の句がもつ可笑味は既に常識化されてしまつた感がある。古い流行唄を蓄音器で聞くやうである。これ等の句から叙法のうまさ、着想の剽逸さを除くと、あとは滓ばかりだ。即ちそこに生活がなく、思想がなく、苦惱がないからである。尤も此頃とても以上列記したやうな句を本格的なりと稱して隨喜する連中もあるのだし、一概にこれを否定することもどうかと思ふが、これに似通つた最近の句が柳壇市場で生産過剰に陷つてゐることは見逃がせない。

それではわれ等の創作陣にどんなユーモアを展開して來たか手ッ取り早く句について語らう。

妻君があるばつかりに馬鹿な面　光路

生凸の下敷きになつて喘ぐ亭主の姿、サイノロジーのあはれなる面貌が『馬鹿』と云ふ一語に要約されたとき、澁い笑ひが釀される。しかしこの句は『雜誌へは亭主が馬鹿のやうに書き』『兒を抱いた女房に腮で使はれる』のやうに男のみじめさを直譯したものではない。おかさを踏みつけて其の上に突つ立つた、川柳家の人生觀がひらめいてゐる點が深い。

大丈夫何んぼ呑んでも父だ父だ　朝陽

父の酒は氣になるものである。そこを先手に打つており乍ら足元がふら付いてゐる酩酊振りは、たまらなく親しい。『父さんへ來た人今日も酒を呑み』『タクシーで歸る親父は醉つてゐる、なぞの低調に對して如何にこの句のリズムが強いことか。口の先の笑ひでなくして腹からの笑ひだ。句評に亘るやうだが上五に『大丈夫』ともつて來てあるところは『いゝえ夫婦と迄は思つておりませぬ』のいゝえのやうに表現効果滿點である。

さあ酒だ動脈瘤も醉つぱらへ　素人

愛飲家素人氏の面目躍如たるものがある。下戸から見た上戸の姿は面白い、上戸の前にゐる上戸の姿は更に嬉しい、『暴れやう酒ばつかりと思はれず』『綻びを縫つてる傍で醉ひ潰れ』なぞになると一寸手がつけられぬが。

幸福を裏切る樣に皺が出來　孿人

皺はユーモラスな彫刻である。しかも人生のコースに於ける必然的な蓄財であつて、苦勞と或程度まで並行線をなすのが特徴である。幸福は愛である、美である、若さである。しかもこの若さを蝕むものに件の彫刻は決定的な役割を演じる。『羊羹のことでもめてる老夫婦』のやうになつては、格別問題ではないが『ごうかした時女房に皺が見え』『一年上の女房必死の糠袋』にはそゞろ人生の悲哀を嚙みしめるべきだ。しかしさて嚙みしめて見ても餘り甘くもなからう。筆を取つた浦島太郎は地團

太踏んでももう追付かない。この句は人類の總てに手招きをしてゐるやうだ。

兩頰をすぼめて老妓煙草吸ひ　豆秋

よく見る圖だ。正しく其の通りだ。だが家に歸つて靜かにその顏を思ひ浮べて見、その働き振りを回想して見ると、凄慘な色をしたユーモアが湧いて來るではないか。殊に『賴母しい禿方ですこ婆藝者』なぞ云はれた日には苦笑の限りだ。しかし他人の頭痛を疝氣に病まぬことも必要で『本名で貯金をして婆藝者は決して尠くない。息子を大學にやつてゐるのがあつたらごうする。

惡口を云ひ〳〵蒲團にとぢをする　かほる

かほるさんが選句の披講をされるこ必ず一度はごつこ笑ひが湧く。この句などもその口である。性格的に面白味のあるかほるさんの口から讀まれるこどんな句でもおかしくなつてくる。かほるさんは川柳を地で行く人、何んでもユーモラスに感じ得る人である。巧まずして川柳味を吐き出すこの出來る人。かほるさんはい〻人である。蒲團で思ひ出した句『貸蒲團こは知らずして里の親』

のろけてゐれば鼻のすゞしき　鮎美

『片頰にばかり接吻されてゐる』する鮎美さんである。『まがりたる鼻のあるじはブルジョアよ』『上役へ鈍な眼で見て笑はせる』『嚙みきれぬものに乞食の齒を見せる』『戸樋の雀親も子どもも口あいて』顏に敏感なこの川柳家も亦地からのユーモリストである。鼻の句で鋭い感覺を表したものに鹵耽君の『養父の顏に威壓されてる』がある。かほるさんこ鮎美さんはわれ〳〵のこても眞似の出來ぬユーモラスな素質を豐かに惠まれてゐる嬉しい存在である。

陽にやけて涅槃の顏にちかづけり　緣雨

陽に燒けた顏は健康美を象徵する。誰かが曾て『健康な句を作れ』こ云ふやうなことを云つてゐたが少くこもユーモラスな句は健康な境地から生れる場合が多い。反對に皮肉こか諷刺こか云ふ見方は概ね不健康な視野に育つ。兎に角緣雨氏は今すばらしく健康である。激務の餘暇殆んご寢食を忘れて川柳の爲めに働いてゐられるが倦むことを知らない。この句が佛性に近付いたこ云ふ主人公の、正しき投影であるところに襟を正さしめるやうな嚴肅感こ、無限のユーモアを齎らしてゐる。しかもそのユーモアは緣雨氏の身體から發散してゐる鹹味がある。『苦虫を潰した顏が善後策』こ云ふやうな表面的な滑稽色でなしに眞面目な中に眞面目なるが故に、覆ひ切れぬ笑ひを包んでゐる喜劇で云へば、蝶六の身體全體から流れてゐる滑稽感こ云ふやうなものが迫る。曾我廼家五郎は曰く『私の芝居は最後は笑ひである。朗かな笑ひである。しかしたゞ笑ひそのものではない

笑ひには意味がなければならぬ。笑ひに至るまでには涙もあるそして笑ひの底には『何かが』ある。そこが私の芝居の異なつた持ち味なんです』川柳は喜劇とは違ふから、そんな大がかりな藝術効果を望むことは出來ぬにしても、川柳の笑ひには少くとも句主一人位はしつかりとした登場振りを示してほしいと思ふ。

喜劇役者の不機嫌な空だ　春夫
催促の鼻をかむまをホツトする　多聞
夜逃げとも知らず子供のれぶたがり　清路
貨車の牛神戸をさして急ぐなり　新水
文鎮に押えられてる履歴書　緣之助
新妻の大丸髷へ蚊が止まり　里十九
丙種合格
司令官へゆつくりお辭儀して下り　亂耽
朝の濱歩けば逃げる蟹がゐる　佐保園

西瓜より輕い男の子が生れ　雪峰
大おでこ小おでこならべ天瓜粉　閑生

これ等の句は何れも曾て本誌の月評で評し盡されてゐるから蛇足を避けるが皆それ〴〵特異なユーモアを香はしてゐる。特異なと云ふのも只目先きが變つてゐると云ふ意味ではなくて、作者の個性がのつと顔を出してゐる點である。われ〳〵は川柳に於ける滑稽味について放棄的な態度を執るべきではない。川柳の中核をなしその發祥的本質を形成するものとして、あくまで詩的活眼の開放を計らねばならぬ。持つてる限りの詩囊をゆさぶつて自己のユーモアを汲み出さねばならぬ。それは延いて自分の川柳を培ふことであるのみならず、川柳の藝術的向上と進展とに對して、閑却することの出來ない重要な役割を果すものである。（續く）

粒々集

御影　長崎柳秀

云ひ分はこちらにも有り里の母
不甲斐ない兒です丁稚にやりませう
唯命にこれ隨うて首が無事
行末を案じられてる口答へ
秀才と才媛にする披露宴
あゝ云へばこう云ふ女房子澤山
散髪屋ねむつた顔へ手間を抜き

結婚を父と金とが決めて呉れ
まだ先きに有ると土産を買ひそびれ

大連　大島壽明

あまりにも消して仕舞つた足の跡
證文で縛りおゝせた心算なり
薄暗い底に鋭き眼が二つ
神様と暮す教徒に慘ばかり
責任を背負つても瓶は破れてゐる

近作柳樽

路郎選

あやまりに行けば失策ならべられ　松山　青帆
齒の抜けたまゝで女房の二三年　同　同
花の散る窓をこざして咳つゞけ　同　同
遠緣と言ふのへ無理な椅子をあけ　同　同
お母さんこゝが赤玉美人座よ　姫島　夕鐘
落籍されて網の中なる白孔雀　同　同
朝霧へお粥の湯氣が吸込まれ　同　同
因果ふくめて家計を子に頼り　大阪　卯三
阿呆らしや濡れて戻つた後へ月　同　同
諦めて孝の一字を守るこし　同　同
斷髮に細いズボンを見下ろされ　神戸　卯生
パーテンは心憎くゝも好い男　同　同

川柳書架（四三）

川柳　水無月祓

藤里好古

▼本書のはしがきを左に德川期の宗教世粧を知らむとせば「洒落本」と「川柳」の檢討を等閑に附しては其完璧を期することは至難である。是等には何の虛飾もなく町人大衆の眞裸の姿が躍動してゐるからである。然るに宗教史を檢討する學徒が過去の業績に於てかゝる方面を等閑に附してゐる傾があつた。

吾人は一兩年前より、此方面に興味を有し鷄林の地に居らるゝ斯道の先覺、蛭子省二先生當地の厩生路郎先生を煩して古柳句に現はれたる信仰生活を檢討して來た。本シリースの第三篇として、世の清雅の士の叱正を仰がんとする。「水無月祓」はその業績中の最短篇である。本篇は曾つて「川柳雜誌」（六卷六號）紙上に於て、其概要を發表したがこゝには其

紀州街道孝子を歩きて

妙中の足をさすつた石に見え　泉南　黒天子
廻り道してるは戀の姿なり　同　同
目が濁つてるぞ逢はずに歸らうか　大阪　山茶花
神佛を信ぜねばこそ闘ふに　同　同
大金庫妖怪じみて更けわたり　長野　有爲郎
專務ふと煙草の額を考へる　同　同
有るとこへ流れ込んだる四萬圓　尼崎　義郎
この身體あくたの價値もあらばこそ　同　同
進物の卵をバスであぶながら　大阪　苦茶坊
少うしは娘手傳ふ洗張り　同　同
たまさかに女を連れて見附けられ　愛媛　英賀夫
蟻ほどに働いてゐて借が出來　同　同
妻の願いの哀れにも小さし　金澤　今雨
二階から隣りの梅のなりをほめ　同　同
家風ちと笑はれ貯めることばかり　長野　柳兒
藝者また唄ひ返して負けて居ず　同　同
叱られる筈でなかつた電話なり　大阪　利生
諦めてゐるが口惜しい椅子であり　同　同

等の全部に渉つて補訂し、脚註を附して出典を明示する事に勉めた。

眞ン丸な晦日の月は茅の輪なり
—柳樽　一二〇—

神の國茅の輪の月が晦日に出
—同上　一二一—

右二句は行文の都合と省略した。更に省二先生から「其夜はねれる水無月の神樂堂」の出典として、

不二の根にふりおく雪はみなつきの
もちにけぬればその夜ふりけり

の一首、並に「猿猴は茅の輪の月に手を附けず」の句解に茅の輪の月と、猿猴水中の月を取るてふ傳説と相通の思想を保有せる等御啓示を賜つたが、同一理由のもとに割愛した。諒とせられ度い。

本篇刊行に當つて序文御惠送くださつた省二先生に欽んで謝意を表す。

昭和六年六月六日　　好古生

▼目次としては祓の二大思想、水無月祓の意義、閏月に當る際　茅の輪　雲上茅輪作法、茅の輪の呪歌、月事と茅の輪、庶民茅輪行法、茅の輪を潜る土俗、思想

くり返す言葉に人の好さも見へ　朝鮮　如空
面影は壁の中より呼び起し　同　同
待合で出來た社則が通るなり　宮津　水郎
茶室ありぶぜんと髯をしごく人　同　同
自愛せよと言ひ〳〵仕事いひつける　大阪　無鬼
休んで居れば蟻が來て嚙み　同　同

父をうたふ

飲みに行く父だまされに行く父だ　松山　民郎
女形笑へば妻もある顏ぞ　同　同
一概にしみつたれとはいふまいぞ　金澤　白雨
宵の河原にマッチ擦つてる　同　同
出勤のあとは子守りにかゝり呆て　龍田　翠峯
こゝかいて妻に不埒のあるものか　同　同
地獄への道をせつせと貯めてるる　盆ヶ池　沙門

減俸案

蜂の巣をつゝいてしもた若槻さん　同　同

友人Kを弔む

今年こそ君に置かせて打てるのに　大阪　進一郎
地獄極樂を見せてデバート儲らず　同　同

人形、水無月祓と俗信、鴨社水無月祓、夏神樂、立秋　初秋の佛事、七夕、盂蘭盆、盆節季、結語等である。

▼昭和六年六月二十五日發行、和紙二二頁の氣持よい小冊子、定價五拾錢、發行所、大阪市北區南森町五四、星嶺文庫

▼著者藤里好古君は川柳雜誌社同人中稀に見る古書通で古川柳の研究にも造詣が深い。特に神社に關する句に就ての研究は君の獨壇上と云つてもいゝ。

川柳辭典

草薙金四郎著

左にその自序を掲げる。

（前略）自分が川柳辭典の編纂に着手して早くも五年の月日が流れた。整理したカード、未整理のカード、それから未だ不可解で五里霧中の數百の語句を眺めた時幾度かこの仕事が自分に倦怠と焦慮とをもたらす事に氣づいた。こても五年や七年で完成されるものでもなく、又一人や二人の細腕で出來上るべき筈のものでもない事を熟々と知つた。それで自分

諦めてゐるのに悪い智慧を付け　京都　丁路
雨蛙二日降つたがまだ鳴くか　螢ヶ池　喜久兒
月がありステッキ振つて何處へゆく　島根　紫光
形式の前に形式だけのこゝ　螢ヶ池　百萬石
まゝならぬ愛を誓うてやせが見え　大阪　めぐみ
ガサ〳〵と騒しくゐる桶の蟹　同　素萠
ゴミためへ菜の花一つ咲いてゐる　石川　吉丸
風邪をひいても易が氣になる　島根　聽松
親類のはしくれ國にゐる新茶　大阪　勝二
豆腐屋を呼ぶ白羊がぬれてゐる　神戸　芙城
まぶかつた夕陽へジット飲み暮し　兵庫　千帆
終電車酔ふた眼鏡がゆるんでる　神戸　竹風
バルコニ！爭議のやうに晝を居る　高知　春水
戒律をやつて喰つてる身に聞かせ　石川　白花子
驛馬車ののろい足取りさへも夏　金澤　木偶人
集金人善人らしく笑ふなり　京都　一正
別れたも逢ふたも月は知つてゐる　石川　溪鶯
馘首されて煙の街へ唾を吐く　明石　啞聲
欺されていつしか欺す身ではなり　大阪　泉流
逢ひにゆく夕よ雲も早かりき　同　白柳子

は整理濟のカードから先づ、この方面の初學入門者にとつて必要な初段の知識と

川柳　**青明忌**

日時　八月二日（日）午後七時
場所　八宮神社内　楠町事務所
神戸市電大倉山停留所下車東（半丁南側）
講演　「青明の事ども」　本社主幹　麻生路郎氏
同　「青明の不思議」　ふあうすと社主幹　椙元紋太氏
兼題　「青」（三句）　麻生路郎選
同　「夏帽」（三句）　椙元紋太選
會費　三十錢
（兼題三光呈賞但出席ニ限ル）
主催　神戸市中山手通七丁目一六ノ七　日野華水方　川柳雜誌社　**神戸支部**
後援　川柳雜誌社

して、このささやかな小著をものした。
（以下略）

西瓜畑言申したい月が出る　犬山　練屋丁
看板の手前空箱なぞ置かう　紀州　光哉
ひざまくら本當の事聞かされる　廣島　露斗
學童の望みの絶えた雨になり　石川　一寛
留守番へ淋しさの湧く金魚鉢　大阪　夜王
衝動をじつとこらへて振向かず　石川　醉羊
この暑さ母は男になりたがり　大阪　柳次
言はぬ日を鸚鵡の白さながめられ　京都　相界
苦面した金とは知らぬ遠足よ　螢ヶ池　愚寵
地下鐵が此所ら通ると踏むで見る　大阪　青兒
病院になれて寫眞が增えてゐる　螢ヶ池　狂兒
本人はこうに死んでる洗濯屋　同　藏六
鯉ぢやなしめしの合圖に手をたゝき　同　可章
掌の筋がぢうのと笑はせる　同　美玉
久し振り掃除をすれば胃散出る　同　六華
勤務とはいへ眞夜中の長廊下　同　禮二
色白く鼻高く肺を病むでる　姫島　方眠
事毎に折れる氣弱き母となり　神戸　不然
先生と泣いて別れて雨が降り　吳　吳柳
バスにでも乘れぬ身だらう濡れて行く　愛知　美郡路

昭和六年一月　著者識

▼昭和六年三月五日發行、四六版二三五頁、定價壹圓五拾錢、發行所、大阪市南區東清水町二九駸々堂書店

▼本書は五十音索引の頁を附し、意義廣汎で多種多樣なる語は普通一般の解義を

馬鹿なればこそ辛抱もして居ます　大阪　菊路

名月に池の様な酒を汲み　京都　禾山

三びきの金魚嫉妬もなき姿　大阪　哲郎

今宵をば君に捧げんウエトレス　同　みつる

縁談がきまり娘に伴がつき　同　憲坊

借金は借金晝寢出來るもの　愛知　巧笑

子の數と家賃を聞いて呉れただけ　神戸　志郎

小倉でもセーラズボンの欲しい頃　石川　しをし

ふた親はすこやか仕事おもしろし　大阪　卜居

岡寺にて

人妻の參拜姿おがんで來　同　あや美

敗けぬ氣は今日も平常の御召を着　大連　薫

訴へるやうに大きく「貸家あり」　螢ヶ池　鬼子

淋しさに髪を延ばしてなぐさまん　同　舟路

寢て居れること幸福ときかされた　同　水畔

宵番の看護婦罪な化粧で來　同　梨鳳

浪花節好かぬ男とうとまれる　同　五百吉

風下に鮮人がゐた土埃　京都　數斷

儲からぬ手を八卦見の前に出し　大阪　沒食子

一坪の庭煙突の蔭になり　同　日々城

省略して、川柳界特殊の意義に就いて解説してゐる。

▼この方面の著書としては曩に外骨氏の「川柳語彙」並びに「アリンス國辭彙」があり、又西原柳雨氏の雜誌に發表したる「川柳辭典」があるが、本書も又古川柳研究の指針としての好著であり、著者の勞を多とするものである。

校正室より

雨が續いたお蔭でか、土用といふに案外の涼しさだが校正室は原稿と校正刷との睨めつこで、相當に暑い。始めのうちは、愚陀、綠雨・町二といつた連中が一人乃至二人來てゐたが、最後の日は旅行から歸つた山雨樓と鶴峰が顏を揃へて賑やかだ。

「そこの所は二人で二度みたから大丈夫だ」と云つてる口の下から「そらこゝに一字抜けてるよ」といつた工合で、校正の難かしさを嘆ずる。だが相手が川柳に關する文字だからこそ……校正の仕事も有難い譯。(C)

光耀抄

葭乃選

大阪　壽枝女

超特價朔早うから待たされる
朝風が涼しう蚊帳の裾を吹き
目の先きへふいに蚊蜻蛉遊びに來

島根　量子

アンテナも雀の戀ゆきいてゐる
虫がすきませぬと無言なり
家出迄して無理を通す氣か

神戸　茂もよ

それぐ〳〵の聲で出て行く朝七時
私事ばかりに女かまびすし
土産物しで紐ほどくのが待てず

大阪　機見女

居眠つてゐたに乘替すくと立ち

螢ヶ池　かず子

單調に過す病床つゝがなく

螢ヶ池　紅蔦

看護婦の聲に破れし今朝の夢
アルバムの一枚目には父と母
現代の女性は等と負けて居ず

螢ヶ池　伊勢子

伸びと行くつもりのわらび手折られて

螢ヶ池　あざみ

うたゝ寢の夢にも蟬のやかましい

体重と反比例してカルテ增え
梅雨の入り待つてた樣に雨は降り

大阪　不路子

丸髷がガラスにうつりはつとする
ほゞきものやれ張物と妻らしい

大阪　富美子

押賣か二人になつて買はされる
好く似合ひますと云はれてやつと決め

奉天　松代

思出の蝶々に結うて冷やかされ
つくぐ〳〵と見れば金齒の光る人

大阪　武子

空席が有つてもかけぬ女學生
夕やけへ紅茶の香りねまたしく

夜の大阪

柳人漫筆で夜の大阪の涼味を空輸することにした。メ、ン、ド、ク、サ、イ人はこのところをカツ飛ばしてもいゝ。それも涼味の一つには違ひない。人人人の大阪、雨雨雨の近ごろの大阪、柳人柳人柳人の來るべき大阪のプロフィール。（編輯局）

築港のなげき

關本雅幽

梅雨空に包まれた大阪の裏玄關　築港方面何んと云つて憂鬱である。

棧橋の灯はまたたかず星もなし
氣まぐれな涼み蝙蝠傘を持ち
まだ時間ある水兵の肩組んで
今着いた棧橋青いバナナ提げ

ぢの灯かわからない　時々吹いて來る風は寒く青いバナナを持つた人々の上陸が濟むとぢの船からかハモニカの音が流れて來て時々本船に通ふ端舟がポポポと　淋しさを傳へ廻つてゐるやうである。

氣遣つた空には星が一つ二つ見え出した。引き返えして名物潮湯の方へと足を向けた。もう五六年にもなるか千舟橋で　路郎主幹と遇然にも出會ひ　紹介された金澤の久流美さん路郎さん。先日は失禮しました。度々大阪へ行きましたが、お世辭でなく五月二日の句會に出られた事は全く最近にない大きなよろこびであり收穫であつたと思ひます。翌日、東ゞから芝居の用で私を訪ねて來た人に會ふと、昨夜宿屋を訪ねると、「お寺にいてはります」と答へたので、此の私がお寺に何の爲に行つたのかと、たづね〳〵怪しみながら端の坊の前まで來て、幾度も門を押して見たがとう〳〵這入れなかつたと云ひました。

俗人には這入れないんだよ！。

と私は笑ひました。

○

川柳雜誌を拜見して

「今出た海士（あま）の荒い鼻息」

と云ふ句についての疑義がありました。私は海女（あま）と、女に考へ、筆者は海士が、水面に泳ぎ出て大きな鼻いきをついたと云ふ風に御考へになつて居ます。海士と云ふ字で特に男と御考へになつた方が正しいのか　私の方がまちがいか、いづれとも私には申

私信に

毛の生へたもの

川村花菱

を案内して汐湯に來たことがあるが、斯うして再び汐湯へ來るなどとは夢にも思つてゐなかつた。其の時は非常に混雜して居たので二人は逃げ出すやうに飛び出した事があつた。後で

萬と言ふ人の中にて君と會ひ

といふ句に添えて濟洲島行きの白衣の鮮人がたまらぬ印象であつたと禮狀が今も僕の手許にあるが今日の湯は實に靜かだ。大プールの片隅に子供が二人パチヤ〳〵やつてゐるだけで大瀧も噴水程しか落ちぬ。

トルコ風呂まだ日給の身なりけり

香水溫泉にキヤシヤな男が二人きり

浴漕のほほづえの髯のまだ黑し

僕には蒸氣の音(湯を湧かす)が頭に響いて落ちついて居れぬ。二階の餘興場へ行つて見たが此處もガランド、彼方此方に足を伸ばしたり大の字になつて居るのもある。

ガーケストラ時々外のドラが鳴り

この稿が明日までと言ふ約束が氣が氣でない天保山へと走つた。紀州行きは此方へと乘船客と間違へられた。此處こそは裏玄關の賑ひだ。今しも別府行きの綠丸が眞黑な沖さして煌々たる光りの一線を引いて出て行く、入れかわつて紀州行きの牟婁丸が棧橋へ横付けされた。

妹がよく「兄さん牟婁丸でお歸鄉なさいよ乘り心地良いわ」と言ふて吳れた事が成る程と今思ひ出した。

懷しや紀州訛りが乘り始め

「秋の祭にはのしみんなつれもてお趣しよ」

されませんが、男にすれば何でもない句で、女と見るこいゝ句になるやうに思へますが猶考へて見ませう。ごうぞあなたからよろしく願ひます。

○

昔の「金ちうかる法」と云ふ本のはなしをしたら、それを書けとあなたは云はれました。書かうとして見ましたが、興が乘らないのでやめました。只それは、オランダの國に、「カネモウカル」と云ふ藥と「カネナフナル」と云ふ藥とを賣る店が、二軒並んで居たところが、「ナフナル」の方は日毎に繁昌するのに「モウカル」の方は日に日にさびれて行く。それを見たある先生が不思議に思つて聞いて見ると「モウカル」の良藥は、家業出精正直知足實義の六味を大にして、柔和謙遜氣量發明の四味を加へ慈悲一片を入れて、煎じやうは、常の如く、人の人たる道を守り、のんで腹にをさめるのですが、「ナフナル」の方は美食色欲遊藝遊所 偖潛上名聞我慢、諸勝負諸相場殺生好き、喧嘩口論不忠不孝、家内不和合、諫言ぎらひ、氣隨身勝手、不實、りんしよく、無慈悲奸佞邪曲不敬、殘虐嘘言諂諛の廿四味を常に酒に浸し、「本性がなき」を一片入れ 無分別と不養生、短氣無法惰弱無算用の六味を加へ、煎じやうは、常に朝寢と家業不精を一ぱいにして用ゆる時は、一とせめにて、氣をはらし、おもしろく前後を忘れて體が樂なやうに應へる——と云ふ處方と聞いて、驚いた先生は、早速日本へかへつて、初代孫六先生の看板を上げて諸人に教へると云ふのが、此の本の發端です。物語りもいろ〳〵ありますが、ごうも氣がのりませんから、いづれ落ついて御傳授致します。

○

先日、犬の豫防注射が警察裏の廣場で行はれました。私は子供と二人で犬を連れて行きました。あばれる犬、泣く犬、いろ〳〵あつて素直に注射を受けるものは一つもありません。耳の根をぐつとつかんで……と獸醫は犬のをさへ方を教へますが、なか〳〵その通りには行きません。

と郷の母らしいのが 娘夫婦に見送られて居る。

郷心のせて牟婁丸出てしまひ

松島から九條

岩本素人

水の都大大阪の其の夜のエロ風景は 到る所にネオンの灯に映寫されてゐます。とりわけ西大阪、松島から九條邊のそれは一種獨特の色彩を放つてゐるのであり、南の如く華美でなく北の樣に暗くない。その中にも松島と九條とは細い河一つしか 隔つてゐないにもかゝわらず、よほど趣きが異つてゐます。松島の雰圍氣は「エロ」と言ふ感じではなく、どこまでも「色」と言つた匂ひが強い樣であります。千代崎橋いろはの前から櫻筋へ抜ける小路には 一九三一年の今日尙薄暗い昔ながらの講釋の常席のあるのには驚きました。南山、一山と筆太の看板が揚げてあつて中から鍵嗄れた講釋師の聲が漏れて來るなどは、とても現代離れのした空氣が漂ふてゐます。夜になると 用事のない女郎屋の親父達が常連なのでありませう。その路を抜けて松島の仲之町と言はれる 櫻筋へ出て見ても昔に較べて街が明るく成つたと言ふ外に 現代的なエロと言ふ氣分は少しもありません。關西第一の不夜城松島もカフエーや、ダンスホールにエロを吸ひ取られて 純粹の色丈けが底の方に沈澱してゐると言つた有樣であります。昔は女郎衆が赤紫青とりぐゝの 衿め掛つた

「仕方がないな、犬のをさへ方を知らないのか！

「知りません！

恁う答へるのが、一番正直な答へなのでせうか、誰れも誰れも「すみません」と云つたやうな表情をして居るのが、私には妙にさびしくなりました。

「駄目だ、それぢや駄目だ、恁云ふ風に

と押へやうとすると、いきなり、ソンとその獸醫の胸に犬が飛びつきました。

「ウワー

と醫者は立ち上りました。白い手術着の胸は泥だらけになりました。「をぢかすつてな恁するんだ！」とその犬が笑つて居ました。

近所の華族さんの下男が、ごうでせう實にみにくい犬を連れて、古い古い紋つきのうす羽織を着てよそ行きの姿で來ました。

○犬の 注 射 に 門 番 が 羽 織 で 來

こんな句をいろ〳〵に考へて見ました。私の番になると、犬は恁つかまへるのだと思ひながら素直に耳を押へて居ました。

「よしッ！

獸醫はすぐ注射をしてくれました。

○

三太郎の句會に、講演に行きました。その席題を作つて見ました。

○物置きに行けばかくれんぼの匂ひ

○琵琶師の子はかなく中學校に通ひ

○洋裝の見るもつめたいひつかゞみ

○さけのみのたばこ喫はないまんま消え

物をぢがして、一つもよう出しませんでした。句は盛んに作らなければ駄目だとしみ〴〵思ひました。川柳のお友達ほどほしいものはありません。

揃ひの派出な襠襠姿で店先へづらりと並んでゐたものです。そこへいゝ喉を聞かせようと言ふので、突掛け草履に尻の先で三尺を結んだイナセな阿兄が群をなして「お職さんより二番衆が可愛、可愛二番にやまぶがある」とか何とか唄ひながら素見に歩く、其聲が夜が白々明けかけるまで絶へないと言ふまことに殷賑を極めたものでありました。それが今夜目の前に見る松島の有樣青樓の店先は女流浪花節大會の樣に女の寫眞が二列或は三列に掛け並べてあります。本物の女郎衆はどこかへ引込めて「はりみせ」が寫眞に變つてゐます。實以て野暮な松島と成り果てたものであります。これでは素見人種にとつては甚だあつけない次第であらうと同情に堪へません。「なぜに寫眞はもの言はぬ」とも唄つてゐられない次第であります。斯くして「廓の一の客」と謠はれた素見の姿は再び此の松島に見る事が出來ないのでありませう。少し雨のぽろついてゐた加減もありますが、づつぶり暮れた夏の夜の櫻筋に男と言へば記者只一人の人通りです。向からも右からも左からも「チョット〳〵洋服の旦那」「大將おはいりやす」「マア一服して行きなはれ」「エヽ御相談しまんがな」など心切にも口口に呼んで吳れるが、うつかり寄り付かうものなら金輪際離して吳れそうにない桑原々々。櫻筋を北へ行くと電車道、それを横切ると「松の鼻？」と言ふ別の一廓があります。此中は娼家斗りで他の店は一軒もないので此所へ入るのは非常な勇氣が必要であります。細

○

脚本を書く時、人間の本當の言葉をごうかして云つて見やうと努めますが書いても書いてもみんなうそになります。一人位だれか本當の言葉をしやべれるものがあつてもいゝと、いつも思います。

谷崎潤一郎さんの「まんじ」と云ふ小說の大阪言葉は、大阪言葉以上の大阪言葉だと心から頭が下ります。そこへ行くと、ほかの人のはみんなヨタです。にくらしい程よたです。

○

六月十七日の夜、大きな地震があつて、家中庭へ出ました。庭に居ても恐ろしくゆれて居ます。

「實に大きいなア

私が云いました。又ゆれ出しました。

「大きいぞ、大きいぞ、外野さがれ！

と十四になる男の子がごなつて居ました。こわいとも何とも思はずにふざけて居る子供の氣持がいゝなアと思はれました。

○

ラヂオが琵琶をはじめました。男の子は琵琶歌が大好きなので

「をい〳〵額（ひろし）、琵琶だよ、ビワだよ！」

とごなつて教へてやりますと

「ようしッ……（と飛んで來て）何處だ、何處だ冷藏庫かお父さん

とさがして居ます。これを見た七ツになる女の子が、思はずふき出して

「お兄ちやん馬鹿だなア、三味線のビワぢやないか

○

「三味線のビワ」と云ふ言葉が、私はとてもおかしく聞こえました。

い道には赤煉瓦が敷き詰めてあつて それが昨日からの大雨で美しく洗はれてゐて 足跡一つないと言ふ靜かさであります。茲でも通行人は矢張記者ガンリー一人。引返して高砂町を南へ八千代座の左手を南へ。天神前とか言つてここも一廓の遊女町、松島での三流どころであるそうな。

花園橋を西へ渡ると九條新道茨住吉です。ここはまた西の千日前と言はれる 九條新道を中に挾んで五ツ六ツの活動館、カフエー、小料理、おでんや、すしや、細い横丁には露天の一錢洋食牛肉の土手燒、こんなのが雜然と入り交つてゐるところはさながら 新開地氣分であります。そこへ夜は住吉樣の緣日と見へて空模樣を氣使ひながら チラホラと露店が出てます。その店がどれもこれも一錢銅貨を入れて パチンとやると球の轉げる所謂「パチン」斗りであるのも九條らしいぢやありませんか。花園倶樂部の横を右へ細い道を又左へ曲ると「御下宿」と暗い角行燈の掛つた怪しい家が七八軒並んでゐる。これは常の下宿屋でない事位ひは一目見れば解ります。この御下宿に就ての記者の探訪談も 書きたいのですが どうやら與へられた紙數も少し超過した樣でありますから 殘念ながらタクシイを五十錢に値切つて家へ歸る事に致します。さよなら。

何處へ行く

心齋橋ミ橋 助—二人三脚—

安井ひろし

おていちやんは御池橋で生れたんだが、毎

海士の事

—六月號の加納山茶花さんへ答ふ

惠比須生

七月號の森東魚さんの「海士に就て」をよむで、六月號の御異見ミは、ごんな内容のものであつたであらうかミ繰つてみたら、計らずも拙稿に若干關聯するものでかつたのに驚き、何んの御挨拶もしなかつたのは申譯ない。實は耄碌したからでもあるが、いたく視力を減じ、六號活字は氣分のすぐれた折りでないミ讀みにくいので、折角の加納さんの一文も素通りしてしまつたのであつた。

海士を海女ミ書く例が古書にありましようか。私は未だ見た事がない。古人は潛女ミはかいた。これは加豆岐米ミよませ、「夕されはかぢおミすなりかづきひめ(潛姫)沖 藻刈に出づるなるべし」(夫木)で、契沖の圓珠庵雜記にも

あまは總名にて、かづきめは、あまの中の別名なり、歌には、かづきめミよめるこミはなくて、かづきするあまなご萬葉集によめり。【頭書】眞淵云、紀を見るに、たゞ海邊つきて住人をあまミいひて、いやしきもののみの名にはあらざりしを、後には漁なごするものをのみあまミいへり。【頭書】延喜式大嘗祭式に潛女をかづきめミよめり。なご出て居る。海士は海人(アマ)で、アマビトの略であるから、謠曲の「海士」には、「さん候此浦の海士にて候ふ。またあれなる里をば、あまの里ミ申してかの海士人の住み給ひ在所」ミ用ひて居る。蜑の字もあつて、海にての漁業者をいふ、女のみにあてたのは特用なのであつた。倭字古今通例全書に、「伊勢男海人……本朝式に伊勢國潛女ミあり、凡て

晩心齋橋を歩かぬと寢られなかつたといふ。少し位ひ頭が痛くても、大丸にはいつて、人混みにもまれて居ると、いつのまにやら頭痛が癒ると云ふのである。おていちやんにとつては心齋橋の人通りや、大丸の人混みはアスピリンなんである。

ところが、僕はあの輝くばかりの明るさとあのゴミ〳〵した人間といふものが、まことにうるさい存在なのである、だから僕は心齋橋のあの人通りがなくなり、草原になつたら面白いなあなどと考へる。

こんな事を考へながら、革郎君と二人で心齋橋をぶらついてみた。

南久寶寺町の元の澁谷自由堂の時代物の時計臺が、錦水堂と塗り替へられラヂオが鼻たれ聲で、ルプリ機の不時着陸を告げて居る革郎君が「ヒシヤ」の隣りが「カシヤ」だと空家の數をかぞへて居たが、橋までに六七軒もあつた。心齋橋の空家は不景氣のシンボルだどうしても沒落して行かればならぬ運命にある小賣商人よお前は何處へ行くである。

船場にゐましたのんやが二階借

可愛いゝ小娘が、手提籠から大事そうにさもいゝものを與へて居るようだ。後戻りして貰つてみた。マッチと懐中香水「ツダソーダフアンテン」洋服屋さんの副業だ。「香水がなくなつても包んだ廣告紙は香紙となります」と書いてある。では「金をぬいたポチ袋もチツプになります」か……

廣告のマッチ秋で邪魔になり

僕は心齋橋の明るさを好まない。だからネ

アマの字、蜑夫又海士、皆未詳、書物には漁夫とも海人ともあり、順倭には白水郎の三字」。和名鈔には「辨色立成云、白水郎—和名阿禹—今按云、日本紀云、用漁人二字、一云、用海人二字」と。

アマに男女のあつた事は、「因其土地、有男海士、有女海人」とみえ、日本山海名物圖會卷ノ五には、「海士とも蜑とも書也、世には蜑といへば女に限りたるやうに思へども、男あまも有也、海人と書は男女の通稱なり」で、後世アマと云へば女の如く思はるるのは、呼吸關係上、女に適當な職業であつたからで、近く某博士により世界的研究問題として、わが女海人が興味百パーアセントの報告が成されると云ふ。であるから

今出た海士の荒い鼻息　（武玉川）

を海士だから男だらうとのお說には、私には意味が通じない。謠曲にも

いかに是なる女、おことは此浦の海士にてあるか、さん候ふ、此浦のかつきの海士にて候ふ、かつきの海士ならば　あの水底のみるめを刈りて參せ候へ。

とか

大臣御身をやつし、此浦に下り給ひ、
いやしき海士少女と契りを求め
是こそ御身の母海士人の幽靈よ

などとある。と同時に武玉川の作は女海士とした方が、句に妙趣がわく。

然らば私が先年かいた土作の俚謠

お月樣桃色、誰が言ふた、海女が言ふた、海女の口引きさけ

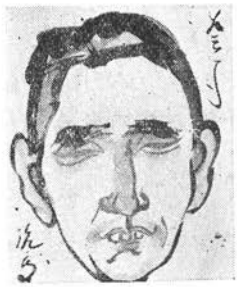
に海女の字を用ひたのは、なぜかと問ひつめられたなら、「土佐句テ集」の其儘を轉記した過ぎぬ。「土佐出身畵伯在鄕中の島内松南氏の靈腕を乞ふて、土佐風の俗挿畵數葉を篇中に加へた」（桐島像一先生緒言）とある。松南畵伯の自筆になつてゐたものであるからだ　其の挿畵の說明が印刷されて

珊瑚は本邦中土佐を唯一の名產地とす殊に桃色珊瑚は、世界に誇るに足る、江戸時代は他より誅求を恐れ一切嚴秘に付したり、童謠に‖（蛭子曰、童謠は前記の通りゆゑ略す）‖御月樣とは珊瑚の名、產地は幡多郡御月灘をいふ

カンライトにもだまされない。だから橋際のブルトーゼの光りの文字も、屋上のスカイサインもみないで、南詰の柳の下蔭にシヨンボリと古ぼけて居る交番と忘れられたようにちよこなんとうづくまつて居る二臺の人力車に、俥よお前は何處へ行くときいてみた。

私は醫者の玄關へ行くわいな……。

角の南海食堂が問題の板圍いになつて居る。次の角が店内廿錢均一の本屋、革耶君がつか〳〵はいつて行つて「猥談奇考」「食養新道」「女性の肉体美化上下」を買ふ。これを燒き直して原稿料にせうといふのだから、正に金八十錢也の投資である。さすが經濟記者は勘定高い、最少の價値から最大の價値を生まうとするのである。



大丸も一部分增築で板圍ひだ。その板圍ひに大大阪中心標がもたれかゝつて居る。大阪はいまこの中心標のように疲れて居るのだ。

軒並の大安賣、大値下、只でもくれかれない勢いだが、お客はまるつきりない。買ふために心齋橋を歩いてゐるのではない、たま〳〵の霽れを幸ひ、汗をかきに、歩き疲れるために出て居る人なのだ。

どんよりと街も疲れ人も疲れてるここに桃色の珊瑚が出來る、誰れがそのことをいふか、海に潛水する海女がいふ。それは怪しからぬ。海女の口を引裂けといふ義にて、童謠にほのめかして、國内に傳ふ。當時國禁の嚴なりしを知るに足る。

こと。してみると女海士の方が、傳說としては生きるようにも考へ、爲めに蒲伯が殊更に海女の字を用ひられたのであらうと推知したのであつた。加納さんのお說も亦御尤である。だから好機があつたならば、テニハ集の關係者にお尋ねして明瞭にしよう。拙稿にも記した如く、私は土佐に親友をもたぬため、こんな折りには不便を感ずる。‖（私は常に海士とかく、例へば六月號の「川柳玉むし」誌の今ぬれる身に海士の簑笠の輪講を御覽ん下さつてもわかるであらう）

海士に就ては允恭天皇の御代の男狹白（をさしと）の話もしたい。又白水郎の事も詳細陳べねばならぬが、今はやめる。海士の古川柳も省略しよう。

地方の特異な風俗風習を教えられるのは嬉れしい。加納さんの倦まざる御執筆をも希望して置く次第である。（六月二十八日七月號の到着と同時に忽卒認めてお含へに代ゆる。）

よい句

を作りたい會話

阿部閑生

卒爾として町二と閑生と、ある工場入口際の一坪の應接室にて、

閑「隨分達者に書きますな、腕が鳴つてゐるやうな筆で」

町「幾らでも書けるのです、二三ケ月先の分まで出來てゐます」

閑「意餘りありて筆及び過ぎると云つた調子ですね、あゝした筆法で盛んに書き捲く

僕は心齋橋の明るさと、人通りを無視して居るのだから、どうしても暗い心齋橋ばかり眼につく。この心齋橋に四ッ目屋黒あんどのような店が一つあつてもいゝなどと話す。革耶君は經濟人らしく屋上の看板が皆暗すぎる、もつと明るくせにやいかんと大いに心齋橋繁榮策を説く。

小大丸が昔ながらに大戸を下して居る。この店も改築からウインドウを作つたが、よれ迄は夜は戸締でこゝだけほの暗く○大の大提灯の下でお女中の柔道繪をローソクも消々に賣つてるなんぞは、まことにエロ好みだつたものだ。

おぐらやののれんを戀しなど思ひこの邊りで盛んにマッチ、ビラをくれる。「斷然ウーピー、花嫁サービス、結婚カンパレート」と來ると、ひとり者の僕などしめ〳〵と思ふと、カフヒー日輪の宣傳だ。

福助足袋の時計臺が八時半を指して居る。松竹座前の「ぼんち」でポークカツを食ふ。こゝは客を待たすのが自慢である。秘藏の畫帳には南北氏の筆もみえた。僕も以前筆を染めた事がある。

戎橋あふ約束の女來ず

丸萬の大鐵戸の處で無名の漫畫家が西洋

つてゐるこ、その餘勢こいふもので、句が下手くならないこも限りませんね」

町「句はさつぱり出來ません、が批評も亦別の意味で難しいものですね、樂屋讃めだこ云はれました」

閑「よい句、好きな句を賞めるのに氣兼はいらぬでせう、併し賞める筆は賞め過ぎになり、貶す筆は貶し過ぎになり、兎角正しい句評は得難いやうですな」

町「結局は我を語るこいふ事になるのでせうか」

閑「それこは別ですが、ずつこ前の雀郎氏の十七字の何こかいふ一文はよかつたこ思ひます。

路郎先生を別にして、誰々が句は巧いのですか」

町「誰も皆疲れてゐます、讀む方の人の好き嫌ひもありませうが、巧い人もそう澤山はありませんよ。

出來た直ぐは、何の句も皆よいこ思ふのですが一

閑「感激性こいふ奴が、時が經つにつれ永の樣に解け減つてゆくのですね、夏は殊更」

× × ×

別の日、同じ室にて

町「何か書いて欲しいのですが、僕も無論書きます、他の人も書きますが、變つたのがあつた方が宜しいから」

閑「文字がスケートの樣に上滑りをして、深みこ新しみを缺くので、自分の書いたものを後で讀むこ何時もがつかりします」

町「自己の缺陷が氣になる間は進歩があるのでせう、惱みの消える時は進歩の止まる時ぢやないですか」

閑「進歩も後ろ向きではね、その意味では私なぞずつこ進歩の爲續けですが、斯うし

人をモデルにカリカチユアをやつて居る。二人も大枚四十錢を奮發した。僕はいくら醉ふて居てもこんな睡い眼をして居なかつた筈だ。革鄙君のは鼻のあたりがよく似て居るから妙である。(挿畫がそれだ) 戎橋筋(八公の「はつすじ」である)はもうしんどうなつて醉ふて來た。橋筋が醉ふたのではない、僕が醉ふてるのだが、たしかに橋筋は心齋橋より醉ふて居て元氣がいゝ。精華小學校の前の暗いところで修業者が殘時滯在といふ大幟をたてゝ易をみて居た。易者よそれから何處へ行く。

それから南海に突きあたつた、驛の傳言板を通り眺めたが、女文字で「×ダンスホールへ」とか「×ホテル×號室のダブルベットで待つ」なんていふ氣のきいたのは見當らなかつた。

さて僕はこれから何處へ行く。

—六・七・一四—

天滿まで出稼

福田山雨樓

架換工事中の天神橋のすぐ下流に板橋が架けてある。仲々長いその板橋の上流側には全部目隠し板で塀をしてあるので川の景色は半分しか見られない。夏らしくない板塀ではある。

川下には涼みのボートが孰れも赤い提灯をつけて、岸に近いところを行つたり來たりはるか難波橋の上は明るい電灯の光を泳いで遥か後方に蠢いてゐます。

あなたは句も隨分鋭いものがあるが、同時に少し灰汁が強いやうぢやないですか

川柳には灰汁抜き工程は不必要ですか知ら」

町「そう云ふ所があるでせうね」

閑「それにしても川柳を今少し文壇の中央へ押し進める事は出來ないのでせうか」

町「川柳の社會進出を妨げるものゝ一つは慥かに川柳の名にあると思ひます、ふゝん

川柳かと云つたふうに、

そして一般社會よりも却つて和歌や俳句をやつてゐる人達に理解を缺く樣です」

閑「實質の所爲でせう、澤山のうちに稀に佳い句が埋れてゐるのでは、局外者には惡句の方がさきに目に映りますし、優秀な選者によつて選ばれた、一人の、亦は年刊的のよい句ばかり集めた句集も少いか、無いかの狀態ですしね、

よい句さへ連續的にできれば」

× × ×

營業所の奥にて

閑「第一に選者を苦しめぬ事だけでも餘程違ひますね、

一應目を通しても抜く句がない、何度も讀み直すうちに一句二句といや〳〵ながら抜くと云ふのと、何の句も別な面白味を以て選者の眼を迎へるのとは、選者の勞に非常な差があると思ふ」

町「今の十倍位の嚴選をせられるとして、投句全數を採られるだけの自信の句を皆が出せばよいのでせう」

閑「帽子脱げは顔の埃の落つるなり、表現の技と眞實性に於いて、あの位の句が揃へばいゝでせう、そして貴君方のうちから三四人すば抜けて巧い人が出るといふ事が必要です」

で目まぐるしいほど人や車が行き通うてゐる。それに引き換えこちらの板橋の上は薄暗いので戀を語るにはいゝかも知れぬが、ある淋しさが漂うてゐる。川風は何と云つても涼しい。九時と云ふのに宵の口の感じがする。

劍先で呼ばれて下りる聲になり
板橋で肩をならべた宵の口

明るい天神橋筋を北へ天滿宮に詣る。石門の白さが夜目にも眼立つ。境内に這入るとすぐ右側の御手洗の前で、天神祭の太鼓の稽古をやつてゐる。それを浴衣がぎつしり取り卷いて見物してゐる。稽古のことだから何度も同じことを繰返してゐるのだがその勢ひのすさまじさにつひつり込まれる。

「三つ叩くなり腰をあげてしまふのやで」

兄貴が手を執つて敎へる。ドドンと響くその音は決して生まやさしいものではない。心得のわるい自分は神前に額付くのを後にしてこれに見惚れてしまつた。

一方西の方の空地では獅子舞、踊の稽古眞最中である。笛や太鼓、鉦に合はして舞ひ狂ふ獅子のきら〳〵光る黃金色が明るいアークの眞下で鑢て來る大祭を謳歌してゐる。苦い衆が赤い日傘をさした踊りの手振り足振りはまことに鮮かなもので、兩手にもつたカチ〳〵に合はしてぐる〳〵練り歩く。しかしそれ等の人々の顏の汗は尊く光つてゐた。これを取卷く觀衆はまた大變なもので、そこに立つたら最後人垣を離れない熱心さ、踊るものも見てるものも皆一樣に微笑を漂はしてゐるのは、平素市場なんかで氣の荒い商賣

町「いや、皆疲れてゐますからね、先生の以前の句に、君見給へほうれん草がのびてゐる と云ふ句があります、妻よ子よばらばらになれば淨土ない、といふ句があります」

閑「思ひ詰め、突き詰め、煎じ詰めた句には垂直に壓倒されます、併し思ひ詰る突き詰るといふ狀態は、ひどく健康を害ふでせう」

町「君見給へ、です、巧い句を作りたいものですね」

閑「ひろしと云ふ人は餘り作つて、見せて呉れませんね、山雨樓、素人の二人がもつと活躍されると誌面が賑かになるでせう」

町「ちよつと、中たるみと云ふ所ですか」

閑「かほるといふ人の句も好いし、杏三氏もずん〳〵佳句を發表されるし、川柳雜誌の四天王といふ者が出來て、大いに跳梁されると面白いでせうな、それに先生の尖鋭な句評が附けば緊張するでせう。

その時は私はずつと退つて見物席に控へます」

× × ×

營業所で川柳雜誌を見てゐる人に

閑「それ等の句を通じての川柳觀は うですか」

雜誌を見てゐる人「記事は何れも眞面目のやうですね、

輕い句も、單純な句もあをやうですが、川柳には最近發達した、川柳特有の語句とか、措辭とか、効果的な樣式とかゞ有りますか、一回の雜誌では然ういふ事がちよつと判り兼ねますが」

閑「それは右に左川柳はそれ程行詰つてゐない事は慥かです」

をしてゐる天滿の人々に得も云はれぬなごやかさを覺えしめる。日本三大祭の一つであるこの神事はまだ十日もある先きからこうして磨きに磨いて錬へられるのだ 神樣も定めしにつこり遊ばしてゐられること〻恐察する。月のない晩ではあつたがそこら中は〻ても明るい。

境内をぐるりと廻れば 靈氣自ら肌に感じて邪念を去るの心持がする。裏へ抜けるとすぐ寄席とキネマとの歡樂境、仲々以つてやかましい賑かさである。神樣のお耳にもチト俗つぽい雜音でかなあらう。

夏祭待ち兼れてゐる水を打ち
獅子舞は親子で足の揃ふこと

再び天神橋筋に出た刹那、ふいに僕の手を括むものがある。吃驚して振り向くと大きな口をあけて笑つてゐる杏三君である。

「コラ泥棒見付けたぞ！」

全くド膽を抜かれてしまつた。杏三君は天滿附近の記者として縄張りを 濶歩してゐたのであつた。僕は天王寺境内の記者だつたが毎日雨ばかり降つて、百鬼夜行のやうな有樣では何も書くことがないので、態々天滿迄出稼ぎに參つたところである。

芝居から出て

高橋かほる

芝居が果てたらまつすぐに家へ歸る私ですが、特輯號に夜の道頓堀と二ツ井戸の句と文章を書けと云ふ私にはむつかしひ註文……

川柳辭典走り讀

蛭子生

六月に入つて、森東魚さんから三度御文信を頂いた。それは隨分久振りなので嬉れしかつた。愈々「川柳江戸砂子」の下卷が出づる手配濟みである通報から

「……校正には經驗は乏しいが、かなり自信は持つてゐたのです；……ごうも校正の事を誰かにいはないと氣になつてしやうがないのです。すべらな樣でひごく其方は神經質なのでしてね。貴君が大變誤植の事を氣にして居られたやうに聞きましたので、一寸おことわりしないと……」

其の御苦心の程を知つて、ただ感謝ある外に言葉はない。

上卷 九三頁　圓通寺舊路は跡
同　一〇七頁十三行　幟り來上りは出來上り
同　四五五頁五行　るるから　はある
同　四九頁六行　崇りを　は崇

若し誤植をお見出しのお方は、御一報をお願ひ致して置く。東魚さんから、川柳辭典のお噂さも承はつて＝七月號のそれである＝其後私も同書を購求した處から「鯱鉾」誌上に一寸意見を寄せて置いた。尤もそれは内容に亘るものではない。今砂子の下卷を始め、至急一讀せねばならぬ新書が、机上に堆積して居るので、兎も角川柳辭典を走り讀みして、東魚さんの文章に續き 卑見を陳ぶる事は、著者に直に敬意を拂ふ所以ともなる。實は筆名の草薙氏の實体を知るべく、友人に出狀したのであるが、本稿を草する迄に回答がないから、直接著者に御伺ひが出來ず、やむなく本誌上を借りるのである。其點は御寛恕あり度い。追ては熟讀して著者の御苦心の存する處も、江湖に傳えよう。暫らく忽卒なる卑見に耳をかされよ。

意義の廣汎にして多樣に亘るものは專

しかし嬉しい事には道頓堀やさかい……早速角座の井上正夫を見にはいりますと夜の部の「最後の審判」の大詰法廷の場が開いてゐましたので惜しく思ひました……第二の「突破先生」も「新婚道中記」も見物して左の二句が出來ました。

詰襟の井上正夫上手なり
井上の藝に時計の音を聞き

角座を出たのが十時四十分。芝居が果てゝ辯天座から東へ行くのは今夜が初めて……夜の二ツ井戸とはチョットグロなな……と思ひながら二ツ井戸の舊跡の立石のある津の清の岩おこし屋の表へ行きましたが戸が閉つてゐて堀抜きからは水が出てゐませんでした……。

右の手にあると云はれる二ツ井戸まだ早いからぶら〳〵と又道頓堀へ向ふときょつ橋の上で三十前後の怪しき目付の男が時計を私に賣らうと云ふんです(あの口です)……無論相手になりませんでしたが私を甘く見たのも無理がありません、私は飴屋の子ですもの。

船場は囁く

松丘町二

細い雨が靜かに煤煙を溶かして降つてゐた。大大阪の心臓、船場の家々は、ごつしりと重く、灰色のたゝずまひをみせて、灯が暗い。私の脳裡に郷里の土蔵が浮んだ。土蔵に格子をはめ、支關をつけて、白壁は幾百年の傳統

ら川柳用語としての特殊のものゝみを解說したとあるから、例へば

◎二合半——半人扶持の奴の稱

犬の戀路を取持は二合半

のみを採用され、地方の名即ち武藏北葛飾郡の二合半（二郷半ともかく）今日でも有名な日本一の早稻産地たるの句

石數は地名に似たる二合半
三合にたらぬ新米はやく出來
日本一の初物は二合半
中元の頃に早稻出る二合半

等を除外されても、他から彼れこれ申出づるは、無理な事になるかもしれぬ。若し斯る點を一々論じさせて頂くならば、此の辭典は決して完全なものだとは言へなくなる。私が小辭典なりと主張した一理由である。從て以下お尋ねして御高示も仰ぎ、お互に親しく研究しようとするものは、本書に記してある範圍外には觸れないつもりである。著者は須く虛心坦懷に卑說を容れて頂きたい。私も今後辭典を利用的に繙くたびに氣付いた箇所をお問する事にする。

◎ざいご（在郷）

田舍の意、在郷武士、在郷下女等と使ふ。又在五中爲在原業平のこと。

とあるが「在郷」の項へ「在五」を含めるはいかがなものか、讀み方は等しくても全然無關係である。これは編纂上の注意ではある。在五とは在原の在と、阿保親王第五子の五とをとつたもの、寧ろ「ざいごちゆうじやう」（在五中將）の一項を加え

在五中將のはれ着は唐衣

と區別すべきである。若し此の區別をせずして可なりと申さるるならば

◎かうしんまち（庚申待）
◎かのえさる（庚申）

をわけて双方に

新世帶七庚申もする氣なり

の例句を擧げて居らるるは拙劣だと云ふ事にもなる。

◎おはぐろ（鐵漿）
◎かね（鐵漿）

の各項目を設けて、双方に

むだをいひ〳〵お齒黑をまたぐなり

の同一例句を示して居らるるも亦然りだ斯る記載は他にもある。それが幾分目

に寂び、瓦は、そのかみの浪花の殘り香を吐いた。

今日の都會は、既に性格をもつてゐない。だが、この取潯ました家々の、恐らく中へ入るほど廣いであらう奥まつた座敷の、壁には振袖が妍めいて、春宵ならば、琴の上へ落した一ことさならられど、落ちて鳴つた花簪に、儚なき夢を夢みるいとはんの、時代的な浮世繪姿もあらうか。潤一郎ものせる「卍」のヒロインが、ひよつとしたら、このあたりのこの家に、微醺の体を蛇のやうにくねらせてゐるかも知れぬ。

私は立止つた。ラヂオが鳴つてゐる。ほのかな白粉の香が、傘を掠めて鼻へきた。後ろ姿の、頭脚ばかり目にしみた。氣をかへてそのまゝ辻を折れて暫く、私は靴に泌む水を知つた。

厚ぼつたい感じの船場よ。押默つた船場よだん〳〵私は憂鬱になる。若し純粹な大阪言葉を、洗練された會話にきくことが出來たなら……だが、それだけの願ひに、この土藏まがひの、奥深く住む、見も知らぬ若く美しき御寮さんへ、いきなり、面會の乞へる私だらうか。私は再び歩き出した。

夜の船場、私は夜の船場を書かればならぬのだが、立止つて、四辻の眞ん中から、東西南北と眺めたが、灯は依然として暗く、家々は兵隊のやうに同じ横顔をみせて、或は重く戸を鎖し、並んで雨に濡れてゐる。まことに夜の船場と、晝の船場との相違は、如實に夜と晝との相違である。

觸りだといふ事は、無理な意見ではなくなる。換言すれば、區別したいもの、區別しなくてもすむものが、吟味に多少意見の相違ある事は認められる。尤も

◎う　ま（馬）

の如きは四區分されてある。川柳大辭典としては、しかく一切を網羅したい爲めに、容易なる業でないから、今日まで古川柳研究グループから、辭典が單行本として生れないのである。一代にして成らざれば二代三代と繼承するは　學者の事業として餘りにも當然だ。草薙氏の川柳辭典（私は敢て小辭典といふ）は洵に有難い。然し私共の希望は大辭典に存する事をも主唱して置きたい。

◎けん

けん樣、遊里にて僧侶の事をいふ。

——正説である。

尤も醫者の事もゲンといつた例はある。僧侶や醫者の名に玄の字を冠けたものが多かつたからの起りである。「玄」と括弧内に記して頂いた方が

うら門は情がうすいとげんがいひ

が、はつきりしよう。

◎しあんばし（思案橋）

元吉原近傍にかゝりし橋、吉原に行かんか芳町へ行かんかと——

芳町ではなく、さかい町説が有力だ「霜月は思案のいらぬ橋になり」でもわかるように

◎ときは（常盤）

常盤御前のこと。「義經記」に……

ヨシツネキに非らず、ギケイキ也—（誤植だとは察する）—八卷もの、著書は不詳。

◎まちん（馬錢）

犬に咬まれた時服む妙藥

ちんばひきながら馬錢を買ひにくる

そういふ折りにマチンはのむ藥ではないと心得て居た。鼠や犬猫を殺すに用ふるもの、今日なら「猫いらず」に比し得られよう。和漢三才圖會にも、能毒狗至死とあり又、本草必讀云、用番木鼈、細切搗碎、和飯毒鼠、鼠食之卽死、愼勿令猫狗食之。凡殺禽獸以鐵屑、少加之、和飯則毒烈、但不仁者所爲耳とある。此の意味に於て例句が解せらるると思ふ。

◎まつのうち（松の内）

傘の手が重くなつた。私は疲れたのだ。川柳は一句も出來ない。若し川柳を通じて船場がみたいなら、あなたたちよ、船場が生んだ作家、かほるさんの珠玉の句にきゝたまへ。

一晩中雨の中をうろついて、船場がさゝやいてくれた無言の囁きは、本當に都會人の心をもつた人だけが、今日の都會に生きることのつらさを、一番よく知つてゐます。つらさを知つてゐる人だけが秘密を見てゐます。大阪の感情と共に生きてきた船場の、生理的悲劇は、青い灯赤い灯を見物して驚いてゐる人間の眼に、決してその眞實を明しはしないのです。と

凉風馬堤曲

松盛琴人

自から買つて出た馬堤行　其所には淀川の凉風を追ふて、エロ、グロ、のナンセンスが、夜の帷を透して展開せられる事を、豫想において、御苦勞にもカメラを擔ぎ出して助手一人を伴ひ、大道具大仕掛で毛馬をさして、出かけたまではよかつたが、何んと言つても怪しい腕前、いくら夜寫しだからとて、鳥羽玉寫眞ですとも云へず、內心臆病が丸木橋を渡る心地で、大きな寫眞器、雜多の七ッ道具を擔いだ主從二人は、どう見ても和製ドンキホーテだ。同人であればこそ、斯んな仕事もせにやならぬと、毛馬の堤に着いたのが、蝙蝠が鼻先きを掠めて飛ぶ時分、流石に堤の風は凉しい。

閘門を出て大淀へ帆を上げる

正月松飾中のこと、三日間をいふ。三日間ではなからう。元日から七日まで上方では十五日迄の風習もある。（シメノ內なる言葉もある）七日松を除いて松過といふ。——「朝寢坊六日に松をとりはじめ」

◎まはしべや　（廻部屋）

一定した遊女自身の部屋でなく廣間を幾つもに屏風で仕切つた部屋

この說明に因るから二一九頁の「わりごこ」の項に「廻部屋に同じ」となつてしまふ。屏風で仕切つたような部屋もあつたかも知れぬが、廻しをとる爲め、自己專屬の部屋の外に、共同部屋を用ひたのである。一に名代部屋などともいつた。

◎みつぶとん　（三つ布團）

三つ布團は下二、上一とのみ思つてゐたに最近當時の繪草紙の挿畫により下三、上夜着たる事を確め得た。お說通りである。一代男に「床とるにも三つ蒲團替へ夜着」とあり、大震災の年の春、女連を吉原素見に案內した折り、角海老に三つ布團の展觀があつて、夜着と三枚が積み重ねてあつた。私は登樓した經驗をもたぬが、草雍氏も亦等しくあらせらるるのであらう。現代の三つ布團が傳統をもつて居るを御承知ないとすれば、

二割引の布團にれるけちな晩
布團が二つ少いていざをいひ

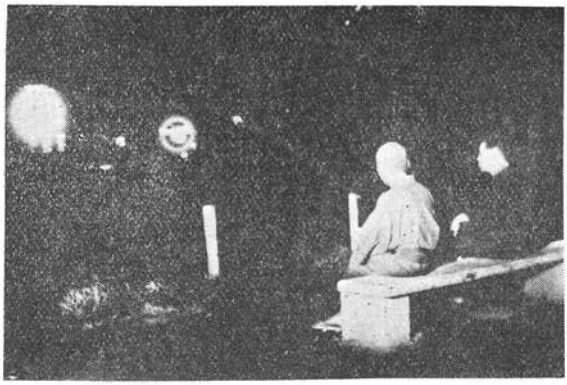
名代などは一つ布團であつた。洒落本に元旦の庭のたき火より大三十日の蛤賣來る頃迄月雪花の三つ蒲團の上に座し。

◎みなるきん　（巳成金）

巳成金どころか伊勢屋うなる金

東魚さんが「ミナルガネ」ではなかろうかと申されたのが正しい。例句の註に柳雨翁は「巳成と唸ると語呂對稱」（川柳年中行事）とのみであるが、私は幼少（在名古屋）の折から母に伊勢の諺として、「みなるかねより、うなるかね」と敎へられてゐる。してみると例句の古川柳は俚諺應用なのでなからうか、此の一事は添えて置きたい。辭典に、ミナルカネとは、陰曆にて「巳」と「成る」と「金」との重なる日を、俗に實の成る金の義にとりなし、その日、金銀錢木を紙に包み

淀川は此間からの降雨で水は奔流してゐる。鮎釣りは頻りに流れを睨め付けてゐる。灯點し頃の光景少し無理だとは思つたが、讀者へ報告寫眞を一葉寫して、是から蕪村の馬堤曲の向を張る。鮎の茶屋迄はまだ宵の口の



爲かエロにもグロにも出會ず唯だ私達の足音に驚いて蛇か蛙か「ガサ〳〵ッ」と草叢へ走り込んだ草擦れの音ばかり、

涼しいわだけが聞へて闇へ入り

兎角して閘門の附近を逍遙したが、朝鮮の女や船頭人夫と言つた人達ばかりで物になて封じておき、斯くすれば富むといふこと、こある。

◎とうしん（燈心）

燈心を飲むと孕まぬとの俗說

に對し東魚さんのお說は、私には初耳で面白くもある。何れが是なるやは今判定がつかぬ。葩雪氏の花街風俗志には「妓が月經の期中に客に接する際は、床に入る前に燈心か又は灰を少許、水にうかべて服用（のむ）と、一時は經水の出るを防ぐことが出來るとのことである」と記されてある話は、私も聞いて居る。參考の一つとして添ゆるに止める。

◎たぼ

女の事をたぼと云ふ。

正しからうが、も少し詳かに言つたなら若いが條件附けらるゝと知るが如何。

◎しやうきさん

墮胎藥？

東魚さんは「確か正氣散の字が當ててあつて、風邪藥である」と。私もそう思つてゐた。「手先を揃へて、ぢつと肩を正氣散、腰を据えては、はい〳〵排毒散の風藥、是ぞ汗かき乘物舁ぎ」（源氏冷泉節）處が川柳江戸名物には、鐘馗散となつてゐて盜汗止の藥、鐘馗散の包袋には鐘馗大臣の繪が描いてある。と。尙ほ文獻を探出してみよう。

◎わちゆうさん（和中散）

今の仁丹の如きものか……

そうではない。詳しくは「玉虫」誌の輪講で說く事になつて居るから略すが、處方は、當歸、白求、陳皮、茯苓、干姜、肉桂、益母、甘草、（嘉良喜隨筆）。今日大森の和中散をお求めになつてもわかる

◎ちんぴ（陳皮）

蜜柑の皮のこと、蘭語

蘭語といふ事は知らなかつた、本綱草目にも出て居り、橘柚の皮を用ひたもの、陳といふは、古るくして貴い意味で、外來語ではないと思つてゐた。

◎まめおとこ（豆男）

箸豆な男の意にて在原業平のこと

まめ男衣冠正しく不埒をし

伊勢物語の初に「ひとりのみにもあらざりけらし。それをかのまめ男うち物かたらひて、かへり來ていかゞ思ひけん」の、マメ男で、此の場合は親切な人、忠

らず、鮎の茶屋ばかりは堂々たる三層樓、其又上に物干場然たる納涼臺を冠つて、文字通り屋上屋上屋を重れてゐる。無數の電燈あか〳〵と淀の水に映じて、間毎〳〵は明け放たれて見るも涼しさうな光景、其筈お客は一人も無かつた。寫眞を撮るならこゝらだと狙らいを付けて柳の蔭に用意して待てど、エロは來ずしで縞蚊が獲物御座んなれと雲集する。痒ゆい事夥だしい、毛馬の蚊は痛痒いと思つた。

毛馬荒堰の向ふ側の草原は、夏向エロ展開の獨占場だと土地の人から聞き早速蕪村も渡つたであらう處の、毛馬橋から大迂廻して、大同電力會社と京阪發電所の側を拔け、て目的の草原へ出に。

枚方と島羽の船頭衆涼んでゐ

茲でちよつと註を入れたいのは、發電所と言ふちか轟々たる音響を立てゝゐるものと誰れも考へるが、實はコトリとも音はしてゐない、魔の如き大煙突は夜目にも空に聳えてゐるが煙を吐く事を忘れたかの樣ボカンと立つてゐる。それは火力發電が水力發電に職を奪はれた爲めだとの話。此二三の大工場だけでも數萬人の勞働者が失業させられてゐると思ふと、此寂んとした建物が亡靈然と薄氣味惡く眺められて、グロ的涼味は百パーセントだが、目指すエロには何ふしても突當らぬ。其内夕方から絶間なく天の一角を引裂く如く狂つてゐる電光と雷が、私達を威嚇する樣に頭の上へのしかゝつて來た。間誤付いてはゐられなくなつたので、周章て闇い木蔭に涼を取つてゐる二ツの影へ、パチツと閃光器に割安に求めて頂いたが、今走りよみするに際して、著者及發行所の恩惠は忘れられぬ。諸書を引用して興味的にも讀者をあかしめず、知識を與へられる御親切は、私が夕食後一氣に通讀して、本稿を認めた事實が證明する。氣やすく本にとりつかして貰ふ事の出來るのが、著書の御手腕であると敬服する。此種の小辭典が出るのは、川柳壇の景氣復活にもなる。二版三版と重なる噂を心待する。

—(六月三十日夜稿)—

實な男の謂。故に括弧内には「忠實男」とした方が適切ではなからうか。尤も著豆男=好色漢=とはいふ。「お國の御用あら玉の、こゝに年ごるまめ男」(夕霧阿波鳴渡)まめ男を年男に解する例は多い。(在原の中將なりけるまめ男、戀ゆえ旅を」(川中島)、好色の趣味にマメな男なのではある。新やまと言葉の部に、まめ男とはしんじつな男なりとあるそうだ。

他は次回に讓る。私は此本を大阪で非常

難解史句について

木村半文錢

後選集の檜垣よりも、玉葉集の初君ならんか。

むかし越後國寺泊に、初君と號するうかれ女あり、かゝる邊鄙に育ちぬれど志は優美にして和歌の道をさへ好みけり、一年大納言爲兼卿、佐渡へ左遷せられしとき、こゝに風待しておはしけるが、旅泊の徒然に初君をめしてはか

□

三鳥の一羽はここにすみだ川
沖の鷗では傳授にならぬなり

本朝和歌の秘事、古今傳授の「三鳥」のこと。三鳥は、呼子鳥、稻負鳥、都鳥。この句は都鳥なるべし。

□

遊女のほまれ勅選に名が殘り

が發火せられた、闇が一瞬斷ち割られると同時に「馬鹿ッ」と罵聲を浴びた。確かにエロと見たのは寫眞の樣な勞働者二人だった。

閃光紛エロでもなかった怒りやう

ホウ〳〵の態で引上げ赤川の田甫中迄來ると篠突く大雨となった。二三丁驅け出して漸く一軒のカフエーを見付て飛び込んだ。其時の哀れなる樣は、ドンキホーテが滅茶苦茶に打のめされた姿、袂を絞れば瀧の樣に水が出る、助手は一圓五十錢の新らしい夏帽が最う冠れぬと、可愛い兒の死顏を撫でる樣に悲しんでゐる。三四の女給を獨占してビールの滿を引き二時間ばかり經つたが、まだ豪雨はすさまじい音を立てゝ降つてゐる、女給が唱ふ傍にはしほれた自分達の浴衣が濡れたまゝ首縊りの樣に、ぶら下つてゐる。それを見ると現滅の悲哀を感じる。それでもアルコールは醉を誘ふ、惡戯に唐瓜の樣な女給をカメラに納めたりなどして時間をつぶす內停電の闇黑並界となる。蠟燭はないかと騷ぎ廻つてゐる處へ、町內の人らしいのが蠟燭を雨の中を一本宛つ戶毎に配つて歩く、新開町の相互扶助だと、聊か氣持よく感じた。時計を見ると早や十二時近い。こんな田甫中の街には自動車なぞはない。

松の住吉

竹內多聞

十一日雨の夜の住吉公園は怖いもの見たかのやうにヒッリリと宵寢をしてゐます。松なく慰み給ひけるに其の後、風なほりて船にめし、出立せんとせられしおり初君この日來の情にかんじ、別れを惜しみ奉りて一首の歌をなし捧げる

ものおもひ越路のちゐのしら波も
たちかへる日のありとこそきけ

亞相つくゞ〳〵御覽じて、かかる巴土の遊女にはめづらしきかなと心の裡にいと〳〵稱美せられしが幾程もなく赦免ありて歸洛なし給ひつゝ、折にふれてこの歌を奏聞なし給ひけるに、叡感殊に淺からずして玉葉集勅選のとき、これを加へ入られけり。（積翠閑話）

故に「遊女のほまれ藤原の太夫號」も此の物語の關聯かとも覺ゆ

□

盜賊の住み家も古歌の德で知れ
白浪の行衛を古歌で御捌き

「難波江」二の卷白波の條に左のことあり、恐らくは是なるべし。

後漢靈帝記（中平五年二月）、黃巾餘賊郭大等起二於西河白波谷一。冠下大原河上。同九月南單子于叛。與二白波賊一冠二河東一。同獻帝紀（中平六年）白波冠二河東一。【割註】章懷注、薛瑩書曰。黃巾郭泰等起二於西河白波谷一。時謂二之白波賊一（中略）

新古今（釋教不偸盜戒）寂然法師

うき草の一葉なりともいそがくれ
おもひなかけそおきつしらなみ

【割註】寂然集に此歌なし、塙氏は新古今より鈔從寺に補入したり」名寄横田山、鴨長明

はやすぎよ人のこころもよこた山
みどりの林かげにかくれて

【割註】鴨長明の海道記と云もの刊、にありて此歌を載せたり」右あづまのかたへまかりける時、あふみの横田山をこえける時よめるとぞ。

孝云、古今集におきつしら波たつた山とつづけたるは、たつた山といはんの料にて冠辭なり、顯昭の注、定家の密勘、契沖の餘材、巴子の打聽、宣長の遠鏡、みなおなじ。されど盜人の事に解きたる說もふるきことにて、いづれの註にも、又袖中抄卷一、おきつしら波たつた山の條にもみえたり、拾遺雜下に、旅人のぬす人にあひたるかたか

からの雨雫は大きな粒となつて傘を叩く。

「種やん」とこで章魚の足をしやぶりながら一パイやつて暖簾を出ると梅雨の夜風が頬べたにヒンヤリとして心よい。助六みたいに番傘を高く差上げて公園の方にやつて來た。長雨で公園の砂はスツカリフカ〳〵になつて高下駄の歯がともすればくれつてこけかゝりそうだ。

住吉の松はてんでに舞ふゐる

松ばつかりの住吉公園は、雨に大分更けお茶屋の灯は叱られてゐるやうに灯つてゐる公園事務所前の紫陽花はフツトボール位の玉を夜目にも白ふ浮かして地べたスレスレにつらなつてゐるのは好きだ。吃驚したのは猫の奴め先刻から佇んでゐたらしい、だしぬけに家の方に駈けた、恰も紫陽の玉がころこんだかのやうに。

住吉は矢ッ張り松だなと思ふ。

松のどれもが住吉らしい格構をしてくれつてゐるのがたまらなくしたしみがある、何かしら極彩の土佐繪でも見るがやうに落付く。

住吉の公園は何といつても神社に押されてゐる、豊國神社を押してゐる中の島公園とはテンデ違ふ、高燈籠の方へ眞直ぐに大きな道路が巾をとつてゐるのも公園としては鬱陶しいもの一つ。

斯んなこと考へてボカンとしてゐるに濡れた松の木肌を艶やかな電灯の光りが嫌な感じで目を射る。

老ひさらばひしものは汝の名、住吉公園よ傘をとつて戻らうとすると、やゝこしい屋臺

ける畫を、藤原爲頼がよめる

ぬす人の立たの山に入りにけり
同じかざしの名にやげがれん

と有る歌などを引て證こする也けり。

（下略）

□

勅免も又なか〳〵の名歌なり。柳原紀光卿の「閑窓自語」に

烏丸入道前大納言光胤卿、久しく勅勘を蒙ふり籠居のうち、月をみて

さらしなやおばすて山もよそならず
都の月になぐさまぬ身は

この後、程へて勅免ありて院より仰事ありて、ふたゝび和歌の指南なゞせし

（下略）

とあり、傍證こすべきか。

□

聲のこす片岡山の沓手鳥

「聖德太子、片岡山にて飢人にあひ給ひし是れ達磨大師といふ說に付て其日十二月朔日なれば本朝の達磨忌は其月にすべし

【閑田次筆】

「太子と達磨との片岡山にての贈答の和歌は書記はいふもさらなり、法王帝說にも見えず、其ものに見えたるは一心戒文より古きはなし、また片岡山の飢人を文殊菩薩なりといへるは俊秘秘、奥義鈔等に見えたりかの贈答の歌は妄誕無稽なること辯ずるに及ばず、殊に異說あるは妄中の妄にて夢中に夢を說の類とはいふべし。【世事百談】

貧生の書齋に「一心戒文」を知る由なし。特志家に御調査をこふ。

神明の祭に東里出ればいゝ

東里は山東京傳の門人。句意は猿田彦の洒落。

「九陽亭こ號し又鼻山人こ號す。麻布三軒家に住す。公の典事なり、通稱を細川浪次郎こいふ。如斯印象あり俗に京傳鼻こいふ（中略）○活東子云吾師無物老人話に浪次郎晩年漂泊して芝の切通しにて傳授屋こいひて奇文妙術なご小さき紙にしるして賣れり、予も流離して曝書僧こなり、倶に相隣りて活計せしが、後に江戸橋四日市の小店に移りてよく聲聞せざれば、其淵瀬をらず云々。【戲作者略傳】（但し浮世繪類考に收載す）

□

店の骨がラをベンチの横にもたせてあるのに氣がつく。さては明日があ天氣ならキャラメルやグリコを賣るんであらうとこうの老婆の姿が目の奥にうつる。

藝者いま使ひのやうに急いて抜け

飛田細見

橋本綠雨

公園南口から大門筋を南へ入ると飲食店喫茶店、カフエー、射的場、上かんや等々がぎつしり並んだエロ發散街と天下茶屋、萩の茶屋方面に通ふ人々で街路が人混みのする事が甚しく二丁餘にして左側にコンクリートの大門がそびえこゝから一般の住み家と面積約三萬坪の遊廓とが高さ三間餘鐵筋コンクリートの高塀で外廓をとりまき周圍に十ケ所の非常口を設け大門並びに東、南、北の四方が開放されて遊客を待つてる、當遊廓は創立開業は大正七年十二月で、町名は住吉區山王町四丁目の位置であるが大門の入口正面に築山に櫻や松を植込み大燈籠が中にあり、左には大柳を植えられた下には巡査派出所が設置されて表玄關となつてゐる、もう一歩踏み込むと南から若菜町、彌生町、大門通山吹町、櫻木町とに別れ、妓樓二三〇軒内藝妓置屋一軒娼妓は三一〇〇名内藝妓は一〇名で大門通はもつとも廣く妓樓もまた大きのは間口十數間と云ふ堂々たる構えの都樓、御園樓、日光樓、世界樓などは群を抜いてる。妓どもは少い樓で八九名多いので三十三名ヴ、シーン……。公時を發見したのは保昌といふ俗説あり。從て

保昌の門戸に暫く紙のぼり

も、恐らくは公時の金太郎時代卽ち保昌に伴れられて入洛し保昌の家に寄寓した事を寓意せしものならん。

佛畫師の名譽を殘す繪貝谷

一つ地に豊國山や繪貝谷

繪貝谷は難解。但し得知翁は

天自然羅漢のそばに似顔出

の略解に「豊國」とあり、初代豊國に關する句かと思ふ。「羅漢臺」に對する繪貝谷かとも故事つけてみたが適解ではあらざるべし。因に初代豊國は粹菩提の口繪に遊女を描て、一枚の紙を上るとき骸骨になるといふ趣向のものを出してゐる。參考とすべきか。

□

曇なく九里を手に取る御寶藏

此の句は

西行が番をしさうな御寶藏

と同巧異曲か。卽ち「富士見西行」と「富士見御寶藏」との關係ならん。從て「九里山をおつ挾んでる越后勢」は此の句と少こし仕立方が異なるやうに感ずる

□

保昌は炬燵の側に大あぐら

保昌は炬燵の側に小鍋立

史實ではなく、恐らくは川柳子の想像句ならん。足柄山の山姥とからませたラ

納涼 **川柳動物句會**

お馴染の天王寺の動物園で涼みながら衆やライオンに名句を聞かせてやらうといふ計劃です。

日時 八月八日午後六時半(雨天順延)

場所 天王寺公園市立動物園内

講演 動物漫談 園長 林 佐市氏

講演 塔の下より 主幹 麻生 路郎

兼題 「狸・猿」 各三句 路郎選

兼題は八月五日までに着するやう事務所宛に願ます。

會費 金參拾錢

▼本社特製の記念團扇並びに入場券贈呈

御注意(鉛筆持參のこと)

主催 **川柳雜誌社**

曳子ばあさんが二三名位宛に入口に立つて客を引き入れることに努力してゐる。

ひやかしは傘をとられてあがるなり

内部では昔の樣な「てらし」は創業以來廢止されて引伸しの寫眞を掲げ寫眞に依つて曳子と交渉が始められるのである。

洋さんの連れを曳子は見逃さず

中には洋館もあり内部だけ洋室に改造されてダブルベットになつた樓もある。またこんな妓樓では娼妓は女給風、洋裝風に變つて階下の一室でレーコードのジャズ流行歌をきゝながらコーヒを呑んで娼妓を定めて階上の娼妓室のベットへ消えるそうで。この洋室に漸次改造されつゝ今では約三十軒位ある。娼妓の指導や趣味として遊事務所で精神講話、茶、生花、裁縫等の催しがあるが家庭の人となることを考へないのか、裁縫が一番少く生花が尤も多いそうです。娼妓の勤め年間は五ヶ年以内で賣られて來る、最高は此頃で五千圓位で、原籍は二道三府四十一縣に亘つて大阪生れは第一位、次で九洲四國が順位、年齢は十九才から二十一才位が多いそうです。娼妓花代は一時間十本で一本は十五錢だそうですが、この頃の不景氣で實にさびれ方が甚しいと聞く。

城影暗らし

朝田新水

夜の大阪城からその附近を歩いて見る。人通の稀な京橋口、京橋門の奥に歩哨の銃劍は輝いた。水銀はのぼり本格的な酷暑襲來に、星一つ見えぬ暗黑な空、たゞ遠くの稻妻とヘツトライトに、白壁の城壁高く濠の上に聳え森閑とした夜の大阪城、その宏大な昔の樣が伺はれる、偕行社の前の身投の多かつた蛙石も今は除かれて、遊覽バスの停留場となつて居り、此處より近來公園として公開されてるが餘りかんばしくない。アーチの光にやゝ息付いて來た。

濠見れば散歩は急に引き返し

不良性の一群ルンペンの宵寢、ランニングの稽古、店員のスケート●ハモニカ獨奏、辯士の物眞似が展開されて來るが、中之島公園の如き戀のボートは一組も見當らず、たまに二人連があれば妻君の要求を容れて一度位散歩に出たらしく、無言で歩くのを見れば綺麗でない妻君だつた。

いかめしい服裝で猫の子捨てに來る

土佐犬に引きづられ行く大手前

公園内行商禁止の制札に、大手門前も美しく紙屑一つ落ちてないのが、せめてもの嬉しい感がする。城址沿革を記したものが公園を飾るにふはしく、立派なものが新らしく建てられ、拜觀者の參考にせられてる。そも蓮如上人の石山本願寺を建てゝより、豊太閤が天下の覇權を握り、ここに城を築き錦城と名付け天下に號令した所だけに今尙名が殘り錦城おはぎ、錦城もなかも名物となつてるを思へば急に喰べたくなつた。

ルンペンの口にきたなく草履取

府廳が眞下に見る大阪市の最高地、城内天守臺へ市が四十數萬圓を投じ、再建の天守閣も竣工に近く、四師團のモダン射的場の西北隅のテント張が今日大阪の祭のトップを切る生國魂神社祭禮に、昨年よりこゝを假旅所とした渡御のあつた事に氣づき、BK建築用地前に夜泣きうどん、上かん屋、氷水、コーヒ屋の露店が數軒並んで居り、馬場町停留所だけに相當客を呼んでゐる。何等の收穫もなく一向まとつた句も浮かばず、忘れられてる玉造門を左に見て、大阪工廠の塀に沿ひ練兵場に出た。約大阪城を一週した樣な氣がして、涼しい風に吹かれるのも寸時ザアーと一ト雨雷鳴までともなつて、雨宿りする所とてない練兵場、幸にして方向構はず市バスに飛び乘つたが終點野田阪神前で下車さゝれ、雨が止むまでビールの泡にやつと一息入れた。

晩飯を附き合へといふ不良組

石垣も巨石で壘む櫻門

城を背に府廳と知れる御紋章

日の出通

伊藤愚陀

大都會の流行は波紋の樣に、その輪を擴げて外部へ外部へと流れ出してゆく。

GREATOSAKAの東一角玉造——ここには過去の流行と現在の流行が混亂して渦を卷く。

夜の太陽——それは玉造の視覺と聽覺と、そして食慾を集めた「日の出通」である。

午後八時——ひろのたいようがその務を濟

ませて、夜の太陽が輝き出す頃——その光を求める人達によつて、そこ「日の出通」の雑音は複數を増す。軒を並べた商店の看板は袴をはいて靴下に靴と云つた小學生の姿を思はせるに充分なものだ。投賣屋の濁聲は無意味な音ハ繰返すロボットの樣だ。アツパツパにエロが解放された風景がある。野性のエロ、それはその間を縫ふ鮮人の白い上衣に黑い袴、そして揺れ動く乳房。そうしたものをかき亂す樣に、或ひは煽り立てる樣にカフエ△△、喫茶と酒場××——飴湯の如きコーヒと生溫い氣の抜けたビールを思はせられる——と活動寫眞館から、もう忘れられたであらう所の主題歌や流行歌が喚き出してゐる。こんなものよりもジンダの音樂が望ましいものだ。

午後十時——活動寫眞の辯士に滿足した人達、寄席の壓縮された笑ひを笑つた人達が泳ぐ頃、軒並の商店は色めく。ロボットは必死の濁聲を張上げる。しかしそれも一と時、一杯一錢の「ひやし飴」に滿足した人達は早や引き上げる。享樂は決して生活とは離れてゐない彼等であるがために。

午後十二時——もの靜かに夜の太陽は沈まふとする頃は、たゞカフエの蓄音機の音が淋しさをます。でもこの頃には都會の流行に泳いでゐた彼女達職業婦人達——女給、仲居バスガールと云つた種類でもある——がこのアスフアルトと云ふもカナシイ、アスフアルトの上に現在と過去の流行を撒き散らし乍ら呑まれてゆく。

鈴蘭燈の一つ二つが消えてゐるのも馬鹿に淋しい風景だ。

NAKANOSHIMA

住田亂耿

水の都の大阪、エロの都會大阪を代表する、水の公ハでありエロのそれである中之島へ、一通のレターが或夜私を赴かしめたのである。だが之は決して色氣のある、レターではなく、以下私に文字を羅列さすべき一片の社からの命令書であつた事を諸氏と共に悲しむのである。

公園パブリックガーデンーは、その名の示す如く、多分に大衆性を包有してゐる。公園は小市民達に與へられた街のオアシスだ。彼等はこゝを時に惡用しては、赤新聞にネタを揑ち上げさせるのである。

機械体操を自慢でやつてゐる幾人かのロボットの見事な放れ業子供は滑り臺で衣服の耐久性をしきりに減少して嬉々と遊ぶ。

テニスコートでボールにもてあそばれてゐる男達。白い噴水。こゝろ〳〵とゐる街のルンペン。そして涼みに氣の早い老、若、男、女、女、女……之はくれゆく夏のNAKANOSHIMAのまことにお粗末なデッサンである。

夜のひらいた公園の双頰は紅いポートの灯で濃厚に彩られる。そして植込は公ハの鼻毛だ。その鼻毛に潜むで喋々喃々と男女愛慾闘爭の前哨戰が開始せられるのである。

こゝの舞臺へあらはれる女人群像は凡て一脈の共通貌を持つ。即ち、それが彼等に與へられた天成の武器であるとでもいはうかヴアルガーなどこかに獣性をむき出したやうな貌をそなへてゐる。

中之島は或る意味での戀愛清算所である。商品化された戀がこゝでどん〳〵暗に清算されてゆきつゝある事は屢々我々に赤新聞が報道して呉れる所である。

大阪行進曲に……戀の繪日傘……あの中之島ダムにせかれて逢へやせぬといふ一節があるが、逢へやせぬ所か却々どうして逢ふてゐるのである。見よ多數の男女が、こゝでこのランデーブを……

街の灯がエロを蒸散さして、黑い河面にウインクを投げかけ、鈍い笛を吹いて時々川蒸氣が通つてゆく。さうした雰圍氣に包まれて親しき彼と彼女の群があちこちに古風な墨繪を描く。僕はこの古風な墨繪を視線に包容しきれずに、河べりへ何か惡酔ひしたやうな頭を冷さうと歩み運んだ。と僕の後方をしく〳〵と女の泣き聲が通りすぎるのである。でふりかへると中年男が小聲に制して女の二三歩先を行くのが見える。好奇心にかられてそれが丁度歸り途でもあつたので彼等の後をついてゐつたのであるが、とある交番の前へ來ると、此の二つの影は吸はれてしまつたのである。

私は中之島のプロフキールを食傷したやうな氣持で眺めながらビルディングの有る風景の川風に頰をなぶらせながら溜息に似た大きな息を一つほうつとしたのであつた。

濁つた千日

麻生路郎

道頓堀から來ると法善寺、南海通から來ると、萬歳の南陽館、電車で來ると樂天地が千日前を千日前らしくしてゐたが、電車のないころに比べて電車が出來てからは千日前が殺風景になつて、千日前を探がさねばならぬほどその味を失つてしまつた。最近樂天地が板園になつてからは全く千日前を見失ひそうである。僅にその餘塵をとゞめてゐるのが法善寺の一角と、南陽館から南へ曲つた彌生座あたりであらう。

こんなことを書くと、いかにも千日前が寂びれきつて、人ッ子一人歩いてゐないやうに聞えるかも知れぬが、どうして〳〵、人出は相變らず盛んなもので、何處に何を求めてゐる人々なのかは知らぬが、うよ〳〵そろ〳〵とうごめいてゐる。

僕のいふのは千日前の味がなくなつたことを力説してゐるのである。別にそんなことを力説する必要もないんだが、ネオン燈下でビールの一杯もひつかけると、何か云はればおさまらないのだ。道頓堀に華やかな鯛の味があるなら千日前には泥鰌のそれに似た、どろ臭い濃厚な味があつたのが、その味が電車の横斷と樂天地の板園ですつかり消えうせてしまつた。

千日詰をあと戻りする懷手

といふやうな以前の千日前でなくなつたことはたしかだ。

洋館？の公設便所が行人を遮ぎり、叩きは相變らず聲を張上げてゐる。氣前よく買うてサクラにされてゐる。軒並の活動寫眞館や飲食店には大した變化がない。

云ひ殘したが樂天地の向ひ角には朝日ビールの宣傳店がジョッキ黨を喜ばしてゐる。花月の寄席も菊さんの春團治だけでは客が呼べなくなつて、萬歳のアチャコやエンタツでお茶を濁してゐる。敷島倶樂部は映畫劇、彌生座は名古屋出の大澤萬兩が現代喜劇でアクラスの御機嫌を伺つてゐる。南陽館の萬歳が勞働者階級から サラリーマン階級へ移つたのも時代の推移を語るものと云つていゝだらう。

雨の中を、こんなことを考へながら、歩いてゐる、自分も雜然たる千日前の一分子であるに違ひない。

十錢と呼ばれ萬歳振りかへり

酒四題

酒の一

醉ふと無性に嬉しくなつて、げら〳〵と笑ふ癖がある。或る通夜の振舞酒に醉つ拂つて 涙の乾かぬ新しい未亡人へ、甚だ穿ち過ぎた祝辭を呈して、げら〳〵と多愛なく笑つたものだ、この男、醉が醒めるや、未亡人及びその親類一統へ平身低頭して廻つたが、恥ぢて實家へ逃げ歸つた女房だけは頑として彼を許さなかつた。爾來彼は斷然笑はなくなつて仕舞つた。

酒の二

村の小寄合などで、酒の醉が廻ると、きまつたやうに「一寸歸つてくる」と座を外して四五町ばかりの我家へ歸り、二三十分の後、何喰はぬ顏でいとも朗らかに再びやつてきて、酒を續ける。醉ふと必ず女房に逢ひたくなるのが此の男の癖であつた。

酒の三

酒を量る柄のついた四角な一升桝、に並々と冷酒をたゝえて、桝の一隅へ口をあて、一息に、決して途中で息をつぐことなしに、一息に呑みほすことを唯一の自慢としてゐる男があつた。誠に鮮やかなものではあつたが之を二回立てつゞけに演じた時は、流石に苦しさうだつた。

酒の四

醉ふと代數の二數の和の自乘及三乘の公式を、頗る早口に舌頭に轉ばしながら、客の頭を一人々々叩いて廻る男。（町）

近作柳樽

ひろし選

われらの煙突男へ

黑煙り出せるものなら出してみろ　大阪　雨町

第三次×××に因む

今の世に秦の始皇が笑へるか　同　同
失職へ誰が娘をくれようぞ　同　同
割烹着もセルも妹によく似合ひ　螢ヶ池　一流

施療院にて（二句）

思ひ出は哀し遙るか灯が見える　同　同
鐵柵に束縛られてるのでないのなり　同　同
こがりゆく頰骨悲し猿に似て　同　銀花
快復こ書けど悲しきうその文　同　同
生き伸びた胸に淋しく鐘の音　同　同
借金が生涯抜けぬ男醉ひ　香川　三汀
湯あがりの風冷んやりこ八ッ手搖れ　同　同
追從の笑ひかさあれ施療の身　螢ヶ池　晴夫

選後感想

▽本號で「近作柳樽第二部」欄はなくなる。丁度滿一ヶ年諸君の作品を選評したのである▽私の忌憚ない評言を寛容にお許し下さつた事を感謝して居る。

▽九月號には再び新生の近作柳樽欄で町二氏と交替諸君の句をみせて頂く事を樂しんで居よう。

▽雨町君——久しく同人だつた君の句をこゝにみる。川柳をはじめて作られたときから其後熱心に數百句をつくつてをつた君の句をみて來て、今日の句をみると、君の句は異常な變化と進歩をみせて居る。マルクスボーイとしての雨町君の句は風斗の點からも思想的にもいれられぬ點からもほんとにしつくり適合した境地である。「煙突男」力强い叫びの句である「今の世に」は諷刺句、「失職へ」は君の僞らぬ告白であらう。

▽一流君の「妹」の句には優しい妹思ひの氣持が出てゐる。「施療院」の二句内思ひ出はセンチメンタル、鐵柵の方は悲しい反語である

▽銀花君——「とがりゆく」「快復」と共に悲痛な句である。「生き伸びた」には幾分誇張のきらいがあるが。一流君、銀花君、皆螢ヶ池に病を養ふ人々たが、螢ヶ池の諸君の句に現はれた僞らぬ人生の姿には、肺腑を突く、眞實さがある。

▽三汀君の本號のものはいつもよりよくな

血を咯いた男へ蚊が吸ひに來る　同　島根　麗亜

母親の育てを云はれまい努力　同　鳥取　耕民

氣短かさぶつける樣に乳房出し　同　大阪　いわを

色眼鏡戀に疲れし男かな　螢ヶ池　康夫　鶴ノ荘　普天

咯血の胸が痛むよ罌粟の花　同　宮津　水郎　大阪　洋々

菖蒲湯へ鉢卷をした首が浮き　同　同　伊豫　凡平

五月雨に絶緣れた女の背が高し　螢ヶ池　照夫　鳥取　湖山

葉櫻の戀ごはなれり施療院　同　同　大阪　紅

日本髮今日は看護婦ごこへ行く　大阪　水車　嵯峨　司郎

パスガールポケツに浮いたコンパクト　同　トチホ

はらからの皮の荷を曳く馬の汗　同　同

戀すれば他人の心疑はれ　螢ヶ池　同

夕顔の花にも似たり君が顏　同　同

黑き日

体がくさつて行く幻を抱きぬ　島根　麗亜

洗ひさらされし靴下の白さよ　大阪　いわを

大師講電車の中のさわがしさ　鶴ノ荘　普天

向きあへばさて〳〵弱き心かな　大阪　洋々

減俸のニュースへ社長眼が光り　伊豫　凡平

お前等の胸にも減俸こたえたろ　鳥取　湖山

段取が變り前掛はたかれる　大阪　紅

愉快さご愉快な男を口をあけ

い「借金」の句も着想もよく云はんとする氣持はわかるが燃燒不足だと思ふ。もう一度味ふてみる事だ。「湯上り」は涼しそうといふだけ。

▽晴夫君の選に入らなかつた句の内にも中々いゝ素材のものがあるたゞ節調があまりにぎごちないので拔かなかつたわけである。「追從」は自嘲的な句、「血を咯いた」も悲しい句だ「男へ」を「男を」としては如何

▽耕民君の前詳の諸君の句と全然違つた角度にある句である。息づまるものがない。

▽廉夫君の選もれの句にも晴夫君のもつてるのと同じ練れたりなさがある。然しその生々しさがいゝところでもあるのだ。「色眼鏡」「罌粟の花」共に一つのピントを得て生かして居る

▽水郎君のも耕民君の句と同樣の感がある。「菖蒲湯」といふものゝもつ面白味、或ひは「五月雨」といふ情景に、「鉢卷」とか「きれた女」といふ點景をもつて來て句を作つて居る事を考へると、川柳の滑入りやすい安易さといふような事、そして類型的になりやすい事が思はれるではないか。

▽照夫君の「葉櫻」は「施療院」をなぜもつて來たのか、合宿所ではいけないのかといふように、理屈でなく言葉を撰擇する要がある。日本髮も「桃割れで」といふふうに云つた方がよりよくはないか。

▽水車君の「パスガール」は見たまゝの句、「はらから」は馬の皮を積んだ荷車ならんもいゝ傾向とは思へない。奇拔な着想といふ事に

植木店値切るお客へ水をやり　大阪　魚郎

孝行は貧乏してからやろときめ　高岡　加津男

繰返しても繰り返しても　ひよこの數　大阪　拓二

生命の末路下水の金魚を見　鳥取　源太夫

四疊半只寢るだけの往き歸り　大阪　三碧

支配人になつて言葉の角がとれ　尼崎　虚白

人絹の帶撚れ〳〵に春は逝き　大阪　敏坊

ノートもとり居睡りもする初夏　彦根　香緒縷

見合した時の行儀を妻忘れ　大阪　鯉友

人生の輕業めいて死線を渡る　螢ヶ池　杜洋

街路樹の折れて淋しいバーの朝　大阪　素月

米櫃の輕さを更ける手内職　螢ヶ池　石松子

末廣の團結力のある姿　大阪　兵四郎

晒される形電車に女給立ち　京都　水馬

氣持よく歩けば圓タク片手出し　大阪　秋月

それ見ろと言つた身振りで蠅は逃げ　松本　正司

口上へサクラ計りが買ふて行く　大阪　智恵子

思出はつきず嵐山暮れかゝり　羽衣　松枝

嵐山大悲閣

順々に裾を亂して鐘をつき　大阪　愛緒

似顔畫を次々廻す教授會　長崎　右聞

草に寢て初夏のリズムの明らかさ　大阪　おさむ

重きを置くべきではない。

▽トチホ君の「戀すれば」は眞實その通りだがさてその思ひ通りに述べて、これでよいかとなるとかへつてものたりないものがある。こゝがむつかしいのだ。「夕顔」の句も同樣で「顔」と迄はなくてよからう。

▽麗亟君も今月はいつもより句が見劣りする「黑き日」の句はくづれゆく氣持を表現しようとしたのであらうが「幻を抱きぬ」は説明的で、黑き日の心境に徹してゐない。

▽いわを君の「洗ひさらされし」は凡庸の見逃し得ぬところをみつけて居る。

▽普天君の「大師講」は平凡。

▽洋々君の「向きあへば」は「さて〳〵」が山ならんも　感心しない。

▽凡平君と湖山君の減俸問題の取扱ひをみると面白い。前者は減俸に共鳴して、自分の方もやらなくちやといふ考へ、後者は同じく賛成でも、それみたかと、減收に苦るしんで居る、農民、商工業者の氣持である。然しこの減俸がやがて、全サラリーマンの生活を脅威し、馘首を伴ひ、購買力の減退となり、益々不況を深刻ならしめる資本の攻勢を意味し利潤の減少を無産階級に轉嫁するものだ、といふところまで認識をすゝめてはいない。丁度減俸騒ぎの最中だつたとみえて、可成り減俸に關する句が多かつたが、いゝのはなかつた。

▽紅君の「段取」は、大阪の商家などではよく見受ける圖である。

△拓二君の「ひよこの數」はユーモアな句。

稻妻にふと本心に立ちかへり　大和　白帝子
お隣りへ來るのが家賃聞きにくる　大阪　青兒
復活祭キッス御免の鐘がなる　奉天　深太樓
いつしかに酒の力の有難や　大阪　四五磨
有難い事には親爺酒が好き　津山　呑狂
双六は休み戻つたりして上り　大阪　青米
冗談でなしにと女聲をかへ　六甲　規堂
母親の長唄も出る夏の夕　大阪　靜香
父が居て嬉しかつたが眼が覺めた　金澤　千浪
就職にもうカルモチンいらぬなり　大阪　葉光
蛙よもういゝ明日は雨だよ　富山　かずま
コーヒーが底にちよつぴり思ひごと　大阪　世紀
釦はづせば扇風機向けられる　神戸　繁堂
窓かけが搖れる夕飯親と子と　大阪　清光
信仰に生きてる母に愚痴があり　鳥取　暢山
感激も無く穿く靴の重いこと　大阪　忠彌
孝行の一つ苺の箱を提げ　三重　沃星
錢のない財布の中をかきまぜて　大阪　白瀧
おろかにもバットの空をけつてみる　神戸　靖弘
此顏に惚れる男のかぎりなく　大阪　小柳子

永源寺

慾の世に慾をはなれて山の寺　滋賀　公亮
親であり子でありそして生きてゐる　大阪　よし子

▽源太夫君の「生命の末路」はあまり誇張的すぎはせぬか。

▽杜洋君の「輕業めいて」では死線を彷徨して居る人の氣持とはとれない、息づまるような輕業師の眞劍さとあの餘裕ある自信こそ人生を語るものではあるまいか。

▽深太樓君の「復活祭」はクリスマスの夜のハルピンでもあらうか。

▽四五磨君の「いつしかに」は善良な氣の弱い人間を思はせる。

▽呑狂君の句も同じく酒を扱つて居る。作者の名からしても、よほど酒好きと思はれるが親爺さんの頑固さがよく出て居る。

▽清光君の「窓かけが」は愚陀君の句に「――茄子のつやゝけき」といふのがある。月評に出て居るから、見られると參考になる。

▽忠彌君の「感激」もは感激のないその生活、靴の重い氣持を、もつと深く感ずる事によつてよい句が生れる。

▽本號では可成り多くの選評をした。評といふより私の感じといつたものを書いてゐるつもりであり、こんなふうに句をみてくると私自身にも滿足なものは出來ないのだから、その句について賞めた點があつても他にキッがないわけではなく貶した點があつても、他にいゝところがある事は勿論である

▽然し私自身句が出來たとき、或は句をみるとき、まづ第一に感じる事を擧げて居るつもりではある。（ひろし生）

柳の絮

長野吉高

（五）

人間の「美」を慕ふ心は、時と境遇を超えての存在である。美と言つても、宇宙のありとあらゆるもの——風景でも動植物でも——には同一標準は無い澁美、苦美、麗美、甘美等、分類してゆけば果しが無いであらうが、男性が女性に感じる美は、先づ甘美位な所だらう。美に高低をつけるのは一つの概念で、對象物によつて是れは何うにでも動く。藝術の場合などになると低いものを扱つても高くなる事があるし、高いものを扱つても低級になる場合もある。

肉感を除却した女性、卽ち中性的な美は、東洋の觀世音から感得するが、然し下生者には此の美は餘りに崇高過ぎる。女性美と言ふのは固より肉體上の事であるが、之には內在的な條件が根强く有る事をも忘れてならぬ。如何に美女であつても、其れが白痴や狂人では、素直に美を美として受入れ難くなる。醜女でも、其れが聰明だつたり、貞淑だつたりすると、見る者の心に多少の變化が起る、だが、これにも亦一定の條件が有つて、道義的觀念から多く見た時と、藝術を標準にした場合とで其處に區別が生じる。

男性が女性に對する時、特に彼が彼女に求婚する場合には、以上の如き藝術型と道義型と、この二つの何れかを標準にして然も巧妙に使ひ分けるものだ。是れは、時代と人種とを越えた絕對の男性心理である。加ふるに、時として彼にはプラトーンの「ソフ井スト」箭的狡猾と粘着性を持つものだ。プラトーンは、ソフ井スチックに定義を下して、生物捕獲の中で馴畜狩をやり、其の中人間を狩る、と言つたが、これと同樣で、男性は女性を狩る事で時には夢中になつて了ふ。

ところが——此の遠い昔の、ギリシヤのソフ井スト的捕獲術を貞子さんに應用しやうとする男が現れたのだ。これには理由がある。

京都系に美女が多い、と斷ずるのは誤りで眞の美女は京都系より新潟、分けて其れよりも秋田系に多い。由來、京都系に美女を置くは、極めて俗な錯覺的認識である。若し日本美人多產地統計でも編するあらば、秋田が必ずや其の優位を位むるであらう。

秋田の女性は、概して肩が稍々いかついて頸が短いの感がある。此の原因を氣候が寒いので從つて肩を縮める習慣が、筋肉的にさうした變化を起したのだ、と觀る一部の說は先づ正しい。略々丸顏の、端麗な姿態の是等秋田の女性は、單に末梢的な科

學的扮飾美でまんまと一時を胡麻化す都會女等とは、其の本格的な美に於いて同一の論でない。

この秋田美女の公式から推すと、貞子さんも亦其の範疇に入る。肩が少し張つてゐるのが、撫で肩の不健康さから解放された感があり、少々色の黒い理智的な顔すらりと伸んだ肢は、近代味豐かな明朗を與へる。たゞ彼女が秋田系女性としての規範を破つてゐるのは、頸が長くて丸顔でない、といふ二點だ、然し此の異狀は　却つて彼女の美を一層輝かしいものとするに非常に役立つてゐる。

ペンキ職人は、大哲學者よりも良く色彩を記憶し、單なる言語學者でも、大詩人の其の師よりはギリシャ語の不定過去をよく暗記するものだ。人が或ものを記憶するは、其れに何等かの興味を見出すが爲めである。ドイツ語がBemerkenの語を以て「注意する」事となしMerkenを以て「記憶する」意となすのは、卽ち同一語源から出たもので、この事實にはある比喩が含まれてゐる。宗教家が聖書を、詩人が詩句を、其して又數學者が方程式を記憶する事が、以上の比喩の一斑である限り、貞子さんを抑獲しやうとする男も亦、彼女が秋田系の美女である事を記憶してゐるに相違ない筈だ。若し此の記憶問題を、ギリシャ語の動詞表を急速に忘れる其れと同一條件の下に置くならば、其れは大變な誤りと言はねばならぬ。事實貞子さんの場合が、其れだ。

貞子さんの良き兄、正夫君の友人のさる法學士が、貞子さんを是非に嫁にくれ、と言ふ。この法學士君、士族で、秀才で、人格者で、容貌もいゝし、父親は代議士——これなら、貞子さんの母親の悅びさうな條項が、註文したやうに揃つてゐる。で良緣とばかり母堂は乘氣になつて、貞子さんに勸めたものだ。

ところが、何が不服なのか貞子さんは、斷然不承知だと言ふ。手を替へ、品を替へて、根氣よく說き伏せやうとしても、當の貞子さんはいつかな承知しない先方からは是非にと所望する。間に挾つた母堂と正夫君は四苦八苦だ。「差上げ兼ねます」と言へば其れまで、別に問題ではないやうなものゝ、其處に言ふに言はれぬ母堂なり正夫君なりの吐息の原因がある。

大體、正夫君を×務省に就職の世話をしてくれたのが、法學士君の父親だ。工學士正夫君が、就職難知らずに、先輩を振いて　つの椅子に嚙りつけたのは、全く以て其の父親の幇助にあるつて來て、愛妻を貰ふ時には法學士君の父親が大分に骨を折つてくれてゐるのだ。斯の如き立場にある關係上、母堂としても正夫君としても、今更貞子さんに頭を横に振られると困る。此の事に就いて、到々思案餘つて雨軒居士に援兵を求めた。

——霧の樣な雨が降る其の日、朝から招かれて小石川の邸へ雨軒居士が居つた時には

「全く困りましてね。」

と、先づ母堂の嘆聲を聞かされたものだ。

「正しい意味から言へば、單なる情實とかうした大事な問題とは混同すべきではないのです。我々が思ふと同樣に　先方だつて此の理解はあるでせう。然し、此の事ばかりは理性のみでは怎うしても駄目ですからね。感情が其れに附隨しますから—。」

正夫君は元氣の無い聲でかう言ふ。高等學校時代には、この體で柔道を得意にしてゐたといふが、外見は如何にも貧弱な痩つぽちだ。

「全く、求婚してはねられると、其の理由の奈何を問はず感情が主となるからね。これは僕の經驗からのみ言ふのではないが

——恐く總べての求婚者共通心理だらう。」
雨軒居士、悠々と煙草を吸ひつゝ更に母堂に向つて
「私だつて、八重子を貰ひに上つた時、一寸はねられましたが全くあの時は——いや、お母さんの前ですが、聊か憤慨しましたからね。」
「まア、まア……。」
母堂は恐縮の態。
「尤も私の場合は、八重子の方が乘氣になつてゐましたので、私としては八分通りの强味は有りましたが——。」
「ごうも、これは——」
正夫君、すつかり當てられ氣味。
「もう昔の事ですけれど、でもあの時は、別に怎う怎ふの理由はありませんでしたよ。あなたは學問がおありだし、眞面目な方だつだし——たゞ小說家になる事が……。」
「お氣に召さなかつたのですね。」
「と、言ふ理ではありませんでしたが、とても八重などは、さうした立派な方には不釣合だし、其れに何を言つても、あんな弱い体でしたし……でも、全くの所は、やつぱり、其の何んでしたのですけれどね。」
母堂、苦しげに後を濁す。
「こりやア、ごうも——。」
雨軒居士、笑ひ出す。正夫君は、少々むつつりとした顏で横から
「兎も角、貞子の件に就て何か良いお考へはないでせうか?。」
「さア?——一体、貞さんの嫌やがる原因は?」
「當人は、閨秀作家にでもなる肚らしいんです。」
「ほう。」
「本人の希望なら、其れは立派な事ですからいゝんです。然し其れは何も獨身者に限られた事ではない、自分の心掛一つで、結婚したつて出來ない事はない筈です。求婚者は理解の有る人物ですから、貞子が好きな道を歩む事は何うにでもなる、と思ふのです。」
「成程。」
母堂が、突然に一膝進める。
「今正夫が申しましたやうな閨秀作家とやらになつて、貞子が偉くなれば其れは私だつて嬉しいには違ひありませんよ。けれど、女としてみれば、やつぱりお嫁にでも行つて、家庭を持つてくれる方が、親の身としては安心します。思想が古いの、怎う怎ふのと言ふ問題ではありません。親が悅ぶといふ事と、安心するといふ事は別でござんすからね。あの子が、何んなに偉い女になつてくれましても、其れだけでは安心出來ません。」
「や、ご尤です。」
「貞子の奴、作家にならうなんて、大体生意氣ですよ。」
正夫君は到々憤慨し出す。
「これは、あなたの感化が大分にあります、だから、あなたにも責任がありますよ。」
母堂、なか〳〵手嚴しい。雨軒居士は、とんだ所で油を絞られる。一大事と見てとつて、急に話題を外す。
「解りました、猶私からも話してみませう、貞さんは居るんですか?。」
「居ますよ。昨夜から部屋へ引込んだなりです。此處呼へびま

すから——。」
正夫君は、直ぐに座を立つて奥の間の方へ消える。
「この話が落着せぬと、ほんたうに心配でしてね。」
「左様ですとも——。」
「八重のやうに、お嫁にやつてくれと言はれたのにも困りましたが、貞子のやうに、厭やと言ふのも親泣かせでござんすよ。」
「はア……。」
雨軒居士は妙な返事をする。
やがて、正夫君の後から貞子さんが、影のやうに靜かに從いて來る。
「今日は、駒澤からわざ〳〵義兄さんに來て頂きましたからね」
母堂は、貞子さんを見るなり示威する。貞子さんは、雨軒居士に默つて頭を下げると、俯向いたまゝ、しよんぼりと母堂の前斜に座を取る。
「皆んなに心配ばかりかけて——十五や六の小娘ではないだらう。」
正夫君、鼻息が荒い。何處かに未だ學生氣分が抜け切らず、何んでも言ふ事が卒直だ。
「——實は、先刻色々話を聞いたのだがね。」
雨軒居士、ねちり〳〵と話し出す。正夫君は何か言ひかけやうとしてゐたに、雨軒居士に先を越されて、其のまゝ言葉を唇にもつらして消して了ふ。
「大体、結婚なんてものは、理想から言へば當人の意志を尊重すべきだと思ふがね。これは、僕達がさうした經路を辿つたから言ふのではないが——其の意味に於いて、僕は君の意の在る所は大いに認める。」
貞子さんは、塑像のやうに動かない。
「だが、理想結婚なんてものは、理論通りには割合面白くない妙なものだよ。こいつは現實にもつて來ると、どうもいかん。」
これは雨軒居士の實感らしい。
「——相手に不滿があつても、其れを忍んで結婚する、といふ事は少くとも英雄的行爲には違ひない。然し理想から言へば、こいつは駄目だがね。理想結婚面白くなし、不理想結婚不可となると、結局完全な愉快な結婚は無いと言ふ事になる。」
ぬらりくらりと、變な事を饒舌り出す。
「要するに、君の場合は不理想組だよ、當人にしては問題だ、熟考せねばいかん。然し君の言ふ所の口實としての作家云々を——。」
「決つして、決つして口實ではございませんわ。」
貞子さんは、靜かに應酬する。低いが凛とした聲調だ。
「其れが、母さんには氣にいらぬのです。」
母堂は、突然体を貞子さんの方ににじり寄せて
「よく考へて、ね色々の事情を——先方が思はしくない家だつたら、何んで母さんが勸めませう。良緣だと思へばこそですよ女に我儘は禁物です——。」
貞子さん、再び沈默。
「貞子さんの氣持はよく解る——尊重はするが、然し、お母さ

んにしても　仰言る所に十分なご理由があります。」
雨軒居士の旗色は、此處頗る不鮮明だ。
「求婚者が、貞子の將來を托するに不適當な人物ゝでもいふなら、其れはよし先方ゝ怎んな情實があらうゝも、僕は斷然この問題は打切ります。大事な妹には替へられませんからね。但し求婚者は立派な人物です。何等の情實の無い一箇の求婚者ゝしてゞも、貞子には勸めたいのです。良緣ですからね。」
正夫君は、なか〳〵巧妙にソフ井スケックの捕網を投げかける。
「貞子さんの、希望其のものは大變に良い。今の女性は其れ位イデオロギーが無ければいかん——。」
何を思出したか雨軒居士、突然イデオロギーを振廻す。
「ノルウエイの女流作家、ジイクリッド、ウンドセット夫人は二十五才で小說を書いて然も一九二八年度のノオベル賞を貰つてゐるが、この間約二十五年だ——其れだけ、ゝ言へば其れだけだがね。僕の持論ゝしては、文藝方面に今少しく女性の進出を見なければならぬ、ゝ言ふ事だ。之れに就いて、ヤコブ、ブルクハルトが、イタリー婦人に關して、文藝復興を論じた其の事を想起するが——要するにだね、有閑人の道樂や遊戯でない限り、文藝家ゝしての世界は、荆の道ばかりだといふ事を忘れてはならない。分けて女性の場合は深刻だよ——。」
雨軒居士の此の說には村正ゝ言はれるだけあつて流石に一見識あるゝ正夫君は今更のやうに敬服する。正夫君には、文藝なんて凡そ他山の煙だ。「お〻何んゝ言ふ化學者達の注意だらう。お〻何んゝ言ふ役に立たぬ塵の中に。」ケプレルに斯く罵倒されても、口惜がるだけで、何うにもならぬのだ。
「作家になるなんて、卵の殼に自像を描く自惚れたカリカチュリストだ——馬鹿な事ばかり考へて、全く困つた奴だ。」
正夫君、痰を飛ばすやうに言つてのける。
「兎も角、お母さんにご心配をおかけしないのが一番だよ。」
ゝ、雨軒居士
「今時の女は、少し學問が有るゝ、我儘ばかり言つて、親に苦勞さす事を何んゝも思つてゐないし……。」
母堂は遣瀨なげに溜息する。
「貞子、母さんの氣にもなつて見ろ——。」
八方攻擊に逢つて、突然顏を袂で掩ふて轉ぶやうに疊に喰入つた貞子さん。
「何んにも、解つて下さらない！あたくしは女で、一人で……違ふつて言ふのに……誰も、あたくしの言ふ事は聞いて下さらない……た、誰もよ、誰も、誰も……。」
內氣で温順なだけ、其して今迄忍從であつただけ、激情が彼女を驅立てたらしい。衝動的に激しく慟哭を始めた。
これには持て餘した三人、分けて雨軒居士は世にも悲痛な顏して腕を拱く。　（つゞく）

一路集

（募集句）

埃

蛭子省二選

掛茶屋のすだれからみる砂埃　奈緒美
自働車の埃ながめて田植する　香緒樓
プラタナス街の埃で重く成り忠　彌
特價品埃まみれの棚にあり　瓢々
ハンマ振るいのち埃を氣にかけず　清光
古端書埃をふいて讀むでるる　變人
掃出た埃ういてる金魚鉢　苦茶坊
落ぶれた實家の埃髷にあび　勝二
待たれて埃の目立つここにるる　明珠
埃なご氣にもとめない世捨人　まさる
辻へきて盲埃を知つてたち千波
旅歸り机の埃なつかしし　鴉天
腦天をうたれた刹那埃の奥　右聞
体中埃になつてバーえ來る　木偶人
白足袋の埃花見の疲なり　輝翠
恢復期埃をさけて實家にすみ　藏六
嬉しさは明日開店の繩埃　有爲郎
後部座埃にむせて歌はかれ　鯉友
來客もないに埃を苦にしてる　青兒
獨り者埃の中に朝寢する　憲坊
俄雨埃まみれの傘も出し　素萠
メーデーの威力埃につゝまれて　增田
菓子盆に一つ殘つて埃つく　寬柳
其みかん埃をふいて並べられ　素月
病人は埃にむせて痩せがみえ　巧笑
團体旗埃にまみれ歸つて來　水車
埃ない家に淋しく夫婦すみ　奇可愛
埃まみれに夫婦は信じあひ　巖石
埃舞ふ中に雄々しく聯隊旗　松枝
人ごみの埃をさけて廻道　鶴峰
針山の埃子供は殖てるる　薫
手のひらで埃ふいてる荒物屋　沙門
病室の埃へ落陽の物悲し　水畔
手の形がついて額縁はずされる　六華
資本家は埃の外に生きてるる　義郎
卓上の埃ふいてる支配人　竹治
叱られた埃へのの字すねてみせ　鐘生
大阪の埃の中で儲らず　無鬼

續川柳家の戸籍調

◎　係　山雨樓

（一）姓名（二）雅號及別號（三）出生地（四）現住所（五）生年月日（六）職業又は勤務先（七）好きな句（八）自信の句（九）川柳以外の趣味（一〇）配偶者及子供の有無（一一）きらひなもの（一二）川柳に手を染めた年月

（272）　齋藤松窓

（一）齋藤萬七（二）松窓、蕉雨莊、曾て星野町人山茶花なご別號として用ひたることあるも近來は奔流生（三）京都市（四）京都市上京區紫野大德寺町十七ノ一（五）明治十八年三月廿四日（六）大正七年呉服問屋を廢業以來失業（七）酒のめば少し淋しくなるものぞ、日車、きれし日の書の暗さな忘れかね同（柳珍帋）、茶屋の物干で大阪の廣さ見る、路郎。なごの句にして小生の主張する平淡趣味の句（八）柳めて多く日々月々の句自分にては自信あるつもりなりその中にて、兒の爲の朝顔が紫ばかりで。伯母さんが洋服くれる秋さ中掛ものゝ山蒼々こ佛の日。毛絲の玉のころ〳〵こ秋晴るゝ。足袋を履く時にみだらな二十四五。等々（九）時に短歌を試みる事あり、讀書、少量の酒を嗜む（一〇）五年前妻こ死別して、三人の子こ共に住む（一一）嫌ひなものなし（一二）明治三十七年の春新聞「日本」の柳壇に投句したるを初めこす、川柳界にては隨分オッサンなるを思ふ。

生活に疲れた妻へ砂埃　民郎
日めくりの埃に觸れる旅歸　白雨
馬車馬は喘ぎ埃の中をゆく　おさむ
作業服埃にまみれ今日も無事　秋月
砂埃浴びて競馬は儲からず　哲郎
街道は夕陽に赤い砂埃　山茶花
お花見の埃へ姉さんかぶりなり　黒天子
倦怠の埃たらけの部屋に居り　千里
空腹へ街の埃をたんと吸ひ　天來
疊替家のゆがみにある埃　四五磨
立關で拂ふ埃へ犬がじやれ　魚郎
扇風機埃がついて秋になり　普天
退けちかくデスクの埃ほつこれ　機見女
街埃西陽がさして易者居る　靈壺
仕事場の埃になれた高鼾　神谷
綿打に埃の多い陽があたり　英賀夫
道具屋は埃のままで値ぶみする　竹水
朝からの埃が浮ぶ金魚鉢　没食子
内職は埃の中で飯にする　繁堂
街道は今日も埃で店じまひ　六眠
須彌壇の埃尊いものにされ　一正
氣にとめぬ埃の中に世帶染み　美都路
砂埃パラソル邪魔なやうにもち　今雨

飛石

家賃持つて行けば飛石並んでる　裸人
飛石が邪魔になるもロケーション　白柳子
飛石へ今朝も椿が落ちて居る　桂枝
飛石へ危なけに來る小さい下默　白帝子

鏡臺は埃にまみれ妻はやみ　葉光
埃丈け隔て先生二人くる水馬　土埃たてて自働車笑ひ聲相界
埃の中に三十三間堂の佛達　紅
妻病むで一輪挿にみる埃　柳次
歸る疲れに目立つ靴の埃　晃卓
夜業しての埃ない街を歸る　木公
見切品埃拂つてツリを出し　鬼石
そのあたり埃してゐる文ン字燒　光哉
貸ボート中の島からくる埃　白柳子
亡き妻を偲ぶ埃の主婦の友　泉流
十字路で埃にまみれ笛をふき　利生
柄の埃なでて蛇の目を貸してくれ　白帝子
退院も近し眼につく戸の埃　同
看病は捨る埃をつまんでる　山月
靴音を待ちつゝ埃はき捨る　同
電燈の笠の埃に腹をたて　菊路
壁穴を漏るゝ日肋にうく埃　同
煙草盆さけて掃除のあひをにげ　桂枝
夜櫻も人も埃で都の灯　同
諦めた埃の中の勞働生活　言絃堂
足の埃にしみ〴〵と失業苦　同

橋本綠雨選

飛石へ垣根越の鳥が泣く　青嵐
没落が近く飛石埋れがち　綠之助
飛石へいきなり卓上電話鳴り　笹舟
飛石のうねりに庭の廣さなり　水車

---

(273)　丹羽紫朝

(一)丹羽由治郎(二)紫朝、紫洞、(三)大阪市(四)大阪市北區富田町三〇近く轉居(五)明治三十五年一月十八日(六)仕立屋(七)入阪に住むうれしさの繪看板水府、一せいに模型の全市灯がともり水府(八)五六人土のはこびを見てる橋。烟番の心安さは減らして居(九)芝居、畫茶(一〇)妻あり、尋一女兒一人(一一)青唐がらし氣取る人。女の無愛嬌。(一二)大正十四年八月頃

(274)　福田鶴峰

(一)福田覺市(二)鶴峰(三)島根縣安濃郡川合村(四)大阪天王寺北河堀町六二(五)明治三十三年五月三日(六)大阪市電氣局運轉監督　七　鐘紡の煙の下で咲くバラよ雅幽。足あとの凹みに蟻は重傷だ、鮎美まだ〳〵澤山ありますが(八)「自信でもないが」田を植へる如く世間が運べたら(九)芝居と旅行。其のくせ餘り行けないけれど(一〇)妻有り子供は近く生まれる筈(一一)半氣で嘘を吐く人(一二)昭和二年秋頃綠雨(其頃二柳子)さんに川柳を聞いたのが病みつき。

(275)　姫田夕鐘

(一)姫田要(二)夕鐘(三)德島市(四)大阪港區高尾町一ノ三五(五)明治卅五年五月廿七日(六)化粧品製造輸出商(七)夫婦爆笑愛は無限の緣となり(路郎)春の海マッチをすれば消ゆるなり(かほる)電線が劇しく街の息を吸ふ(町二)(八)食の細さを母は案じてかゝるなり(九)芝居見物殊に

飛石の奥にゆかしさ見せて居り　鐘生
飛石があつて近所と親しめず　奇可愛
飛石にいつもの泥靴叱られる　盛白
飛石へ金魚屋は呼びこまれ　繁堂
飛石の上で晝顔咲いてゐる　没食子
飛石に今日も近づけぬ人ばかり　鶴郎
飛石を手を引き合つて許婚　雅幽
飛石を踏み外した酒氣嫌　輝翠
飛石へ金持ちらしい身で動き　白花子
飛石に立てば麗人ふさわしく　拓二
飛石に落ちた紅葉が目立つこと　一正
飛石を期待の持つた足でふみ　竹水
飛石へ素足を觸れて夏を吸ひ　靈壺
飛石を心得て行く御用聞　英賀夫
飛石の向ふを見てる物思ひ　今雨
飛石へ岐阜提灯のうつる庭　機見女
飛石の奥に老母の置炬燵　普天
飛石をまたぐショールに風が　靖弘
飛石を置くに庭の狹過ぎる　青兒
別莊番飛石へ來て用をきく　紅
飛石へ切り花提げた御隱居　山月
飛石をうつかり先の人の足　相界
飛石へはつきり靴の趾がつき　美都路
飛石に女言ひ憎い金の事　愛緒
コッポリの飛石渡る園遊會　右聞
飛石へ一鉢別に眺められ　水馬
飛石へ毛虫が這うて暑い日　瓢々
飛石に行商はちと氣がおくれ　掉二
飛石のつゞく向に社あり　榮壽坊
飛石をほめて茶屋の客となり　泉流
飛石か動きフェルト笑はれる　紫白
飛石に寢卷姿の脂ぎり　光哉
洋館の裏飛石と云ふ庭　いわを
飛石をつゝひ稻荷に灯を照し　鬼石
飛石に梅雨が降り續くなり　清光
飛石に一つも同じ型はなく　艸樂
人ごとでなく飛石へ思案づき　民郎
飛石にうつかり下駄の緒を切る　湖山
飛石とずつとはなれて二人居る　白雨
飛石を渡り終つて待つて居り　秋月
植込の蔭へ飛石まだつゞき　和笑
飛石へ降りるはだしの子を叱り　憲坊
飛石を廻り朝餉をのぞきに來　司郎
運動に只飛石を歩くだけ　忠彌
飛石に並ぶ團扇は戀らしく　變人
飛石へむざんに落ちた蝸牛　苦茶坊
やつとこさ飛石へ來て息をつぎ　千帆
飛石の外は雜草長う延び　三代吉
飛石の白く浮き出た星あかり　三碧
飛石へラヂオ体操おいてゆき　千里
飛石へはだしで逃げた姉が負け　勝二
飛石の續いた部屋に琴の音　耕民
飛石へ蟇が來てゐる雨の朝　素萠
飛石へシガーを置いて草むしり　鯉友
飛石へくる代表は腹がたち　有爲郎
飛石へからりと晴れた朝の空　杜洋
飛石を傳つて可愛い聲で來る　狂兒
飛石のあづまやまでのたごりや　藏六

歌舞伎劇(一〇)なし(一一)べんちやらを言ふ人(一二)昭和三年正月鮎美氏より指導さる。

(276)　長谷川可村

(一)長谷常吉(二)可村(三)兵庫縣赤穗郡鹽屋村鹽屋(四)神戸市楠町一丁目二六五(五)昭和三年九月十日(六)食料品製造販賣(七)南無女房乳を飲ましに化けて來い返すべき言葉に女泣いて見せ。芝居から女房いとしい氣で戻り(八)風流のもやす落葉は煙りすぎ。寢てゐれば寢てゐて家族つきまとひ。淡路島とても屑かぬ石を投げ。(九)繪畫、謠曲。盆栽。骨薫等(十)妻子あり十一)男の男らしからざる女の女らしからざる(十二)昭和四年春。

杭全町
OMEM
雨　綠

▼路郎主幹は六月卅日午後から赤目四十八瀑へ出かけられ對泉閣に一泊され翌日歸阪されました。
▼岩垣奇可愛君は今回社友として入社されました今後の活躍を祈ります。
▼西田艸樂君は七月二日近江阪本から便りをよせられました。
▼高橋かほる君は七月二日で明石の人丸

飛石へ父は老いてるなと思ひ　加津男
飛石は何と贅澤なもの斗り　義郎
飛石をみんな濡らして涼しそう　鴉天
飛石へ宴會は今盛りなり　山茶花
飛石の上で密談蚊を拂ひ　同
飛石へ飛行機からのビラが落ち　素月
飛石を褒めて冷い茶をすゝり　同
石へしやがんで一人寫される　魚郎
飛石へ素足で下りる尻からげ　同
飛石は三代前を其まんま　四五磨
飛石を物靜かに歩く樣　同
飛石へ叔父は何かと指圖をし　菊路
飛石に蜻蛉來てるるいゝ日和　同
飛石の上に植木屋かしこまり　利生
飛石へ子供の股が小さすぎ　同
飛石を往つたり來たりする思案　無鬼
飛石の上で盆栽枯れてるる　同
飛石を傳へば枝か出張つてるる　哲郎
飛石へ要心深い紋をつき　同
(佳)飛石のごつを向いて花ざかり　六華
(佳)飛石令孃も涼む椅子を出し　桂枝
(佳)飛石を踏んで芝生に見る青さ　白柳子
(佳)燈籠のここで飛石別れて居　方眠
(佳)飛石が何か歴史を語りそう　壽惠子
(人)
飛石へお供は固くけつまづき　言絃堂
(地)
飛石を靜かに通る未亡人　裸人
(天)
飛石で世間知らずが駄々をいひ　明珠

都會

◇　雨迷選

薄情な男へ都の灯はこもり　英賀夫
都を慕ひにぶる瞰先　白雨
土產もの物觸せんの街を扳け　新水
片意地もあつて都會のこと離れ　奇可愛
夜逃けして行く隅つこがある都會　勝二
田舍驛都會からてふ顏で降り　無鬼
電燈と都會の空はこけてるる　晃卓
華美な灯に更けて都會の夜の雨　水畔
戀のあるうれしさ水の都の夜　哲郎
雜音へ今日の都會の灯がこもり　紫白
不景氣な顏をするなと都の灯　利生
雀の黑さわいは大阪　言絃堂
暗の夜の都會に惡の手の白さ　司郎
都會から氣兼ねな客が不意に來る　山月
塲末から都の理想裏切られ　暢山
尋六が濟めば都へ來いといふ　桂枝
どん底の生活もあつて都會といふ　壽惠子
巡業も終えて都會の隅に着く　白帝子
ビルの風都會の裾に渦を卷く　水馬
正直な心都會へ奮はれる　明珠
澄切つた村から濁する都會　黑天子

山本雨迷
增位汀柳　共選

神社への月參りが滿九年間になるそうです。そして一番入吉のおみくじを得たのは今度がはじめてなので喜んでるられます。

▼本社の御池橋支部では近く一周年紀念句會の計畫をされてるられます。

▼野村松水君は五月下旬信州上田へ商用で行かれ花崗百樹、金子呑風の諸君と會はれたそうです。

▼熊谷紅君は七月十五日靜岡方面へ旅行されました。

▼七月七日夜鐵道クラブ内で八月詩輯號の編輯會議を開きました出席者は路郎先生琴人、ひろし、山雨樓の諸君と私

▼近々大々的に川柳講演會を催すことになつてるます。これは「番傘川柳社あたりと共同戰線でやらうといふことになつてるます何れ次號で詳しく發表致します

▼福田鶴峰君は母堂の病氣で歸里島根縣へ歸へられましたが良くなられたのですぐ歸阪されました。

▼吉川啞人君の祖母は、六月下旬九十歳の高齡で永眠されました。哀悼の意を表します。

▼吉田六好君の追悼句會を七月九日夜七時京都寺町永養寺で催されました。

▼魚崎長太郎君は本社の永年の讀者でありましたが六月五日永眠されました。哀悼の意を表します。

▼同人藤里好古君は（北區河内町二丁目一へ）社友山本丹路君は（住吉區住吉町九五二ノ一へ）何れも轉居されました。

▼本號の編輯は路郎先生、町二、山雨樓

十　客

騒音の中に都會は黄昏るゝ　かずま
都會へ出れば何かありそうだ　加津男
大都會煤とエロとの溜息さ　あやみ
妖しくも都會は夜を化粧する　白花
拾ひ屋へ都會つれなく暮れかゝり　鐘生
プラチナをはめて都會のつゝぶなし　明珠
空想が都會の驛を吐き出され　卯三
村を出てこのかた都會めまぐるし　水馬
うよ〳〵と都大路をうごめくよ　湖山
都から女になつて去ぬ女　白柳子

（人）

シャンペンに醉ふて都會のたわむれさ　杜洋
（地）
喰つめて都會の風の吹くまゝに　竹水
（天）
誘惑の甘さ都會の唇に　民郎
（軸）
寄添ふて都會の夜は震ひるる　雨迷

◇　汀柳選

電燈で都會の空はこげてゐる　晃卓
稅金もゐらぬ都會の裏住ひ　青兒
都會から母には派手な柄が來る　耕民
ジャズに慣れ戀に慣れ夜の底にゐる　白帝子
妖しくも都會は夜の化粧する　白花子
ワイシャツにはゐる都會に夏が來た　司郎
藥屋が並んでゐるも都會相　奇可愛
大阪の第一信は煙のこと　柳次
ロケーション都會的なる姿なり　新水
煤煙の都會でなぜ棲む雀等よ　艸樂
都會から地獄の煙が舞ひ上り　湖山
都會の灯長い袂がおよいでる　千里
口紅のあせて都會の夜がふける　奈緒美
彩りは水都を飾るダムの橋　桂枝
罪の子を造る都會の夜の色　山茶花
歩一歩都會であつてめまぐるし　狂兒
心臓へ惱へ火華散る都會　水畔
路次中で小さく遊ぶ都會の子　忠彌
特急車都會の外は目もくれず　憲坊
あくせくと墓穴をほる都會かな　義郎
戀のある嬉しさ水の都の夜　哲郎
貧乏と別に都會といふ空氣　紫白
夜はまた夜で都會のグロテスク　おさむ
あの邊が都の空だ赤々と　白雨
夜逃して行く隅つこがある都會　勝二
四方からレール集めて都會なり　利生
田園の夢に都會の灯は眞赤　杜洋
雜音の巷教會堂の鐘　水畔
一匹の蛙が金になる都會　卯三
繪葉書へひたすら都戀してる　白雨
都會人笊の泥鰌の如く生き　吉三絃堂
呪はれの都を遠くまるい夢　民郎
田を埋めて此所も都會の續きなり　紅
大都會胸に描いて踏重し　有爲郎

ひろし、亂耽、愚陀の諸氏と私とで事務所で致しました。

正誤

四三頁（天）縫ひなから聞けば糸屑なと拾ひ　春秋。

町名が改正されました
暑中御伺
橋本綠雨
舊　二柳子
大阪市住吉區平野西之町八三
電話天王寺一一六七番

新誌友

（六年七月十七日まで）

「川柳雜誌」前金半年分金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致します。何卒新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には川柳雜誌の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（綠雨）

今泉忠彌、内山聞綠郎、加藤星光、新井白石
伊藤三碧、北野木星、小林雅純、西いわを、
鈴木哲三、永井保彦、永井千里、村松夢裡、
千種千成、和田碧郎、宮岡白峰（關本雅幽）、
山本佐一郎、河野夜王、小河末太郎、上田光胤、福井進一郎、一柳憲之助、中出木公、南喜三郎、後川七郎、山田烏莊、今村吉郎、内田好夫、大野撫翠、須山重ゞ子、荒井英賀夫
草薙金四郎、伊藤喜一郎、加藤きよし、石井竹馬、神谷正司、正木琴舟、鈴木九葉、西村山月、太田隆彦、熊谷寛柳、鹽田素崩（本社事務所）括弧内は紹介者

火華

○

線香花火はあたりの暗い程鮮やかだ。だが消えたあとの闇をいよ〳〵濃くする。熱鐵を鍛へる火花は、潑溂として見事に散る。だが鐵は次第に冷却してゆく。炎天下の荷馬の蹄が、或は行軍の兵隊の靴が、砂利にふれて發する鈍い火花こそ、憂鬱だが暗示的だ。

○

「番傘」は急テンポで、その獨特の匂ひと色とを自ら捨てゝゆく。番傘のもつ油つぽい匂ひと渋い色こそ柳誌「番傘」の性格ではなかつたか。蛇の目となり繪日傘となり、とう〳〵蝙蝠傘になつてしまつた。最近勇敢にも掲げられた社則と稱する廿五ヶ條の號令がそのいゝ例の一つである。

○

塊人の筆、各柳誌に達者な所を見せる。その直情的なテキパキした性格的文章には、憎めない皮肉と辛辣さと、微笑むべき色氣と茶氣がある。そして一脈の情熱が、その聰明な理智によつて巧みにかはされつゝも、尙湧き洩れる正体不明の不滿と化して漂ふ。この不滿こそ明日の塊人を約束する。まことに塊人は本人の望むと望まぬとに拘らず番傘からはみ出てゐる。

○

水府の蜜柑の辯、肝心の句が大したものでないので、可惜唇が風邪をひく。だが人を喰つた氣で頷りにいゝ氣持の「むさしの」の何とか氏（頭の悪い小生は彼氏の名をよう覺えぬ）の辯舌は、時々天へ向つて唾してるから、見物してゐて愉快でもあり、可憐でもある。

○

湯川白庵といふ男、葭乃女史の句について、隅の方で何やら書いてゐる。世の中は廣大無邊なのだから、こんな頭腦の存在も澤山あるといふ事情には驚かぬが、神樣でも返答に困るやうな計り知れない程間抜けな言葉といふものは、云はれてあんまり氣持のいゝものぢやない。白庵の頭腦の如きをシユウルアホー的存在といふ。

○

手近から拔いた見本二つ「電車ひとりぢや動き出すめえ、朝つばら軌道はガランとして停留所には人の黑山だ」「岬ニ吼エル樹々ノ姿勢、カン骨ノ搖曳ヲ、偏奇スル瓦斯ヲ、氷海ノ封鎖ヲ」一はプロレタリア短歌、一はシユウル短歌だ。歌壇に比べたら（俳壇に比べても）柳壇は凡そ泰平だ。と云つてこれらの短歌の傾向を學べといふ譯ぢやない。たゞ川柳もも少し懷疑されていゝ筈だ。

○

「陽へ病む」作者は忘れたが、井泉水派の俳人の句だ。たつた四音字だ。短いことに於て「元日—暮る」も及ばず。詩としての價値は、どつちもどつち、悉しくは尙考へても解るまい。

○

漁火とかむゐとの第二義的論戰は一段落を告げた。この審判は讀者に任せておいて、兩誌よ最後の勝利を句陣によつて決せよ。

○

「ふあうすと」七月號の鈴木九葉の「川柳家らしくない話」は近頃でのいゝものである。如何にも眞實性のある筆で、おとなしく而もしつかりと所信を語つてゐる。だが書くものに比べて、歌ふものは大分劣る。同誌卷頭の同人吟をみてもわかる通り、「裸の言葉」を追求洞見する熟意からは距りがある。餘り早くから納つてしまつては駄目だ。だが此の人は伸びる（以上柳並木）

○

盜んだ句の自分のものでないことは誰でも知つてゐるが、拾つた句も自分のものでない、こと迄咎める良心を喚起したい。只路傍に轉がつてゐるに過ぎないスケツチの切れ端や、活辯の稽古のやうな雜音は、云はゞ拾つた句と五十歩百歩だ、掛取のやうに句を拾ひ集めに廻ることはこの夏を期して清算することだ。（句勞人）

各地柳壇

いのちあるあれ創を句れ

本社七月例會

七月五日夕　於端の坊

初夏の夕、浴衣がけのくつろいだ句會であつた。路郎先生は兼題「匙」披講の後、謂ふ所の新しきもの必ずしも新しからず、古きもの必ずしも古からず、形式、素材の如何を問はず、眞に新しきものとは、生命力を有する句をさすので、たとへば萬葉は常に新しい諸君は諸君自らの句を夫々の個を以て歌ひ出でて、常にこの生命力を孕ませて頂きたい、との意味の講話があり、大きな感銘を一同に與へられた。因に當夜、山雨樓氏は最近の川柳雜誌の題吟中から、三才に拔けた句のみを九十句拔萃して、川柳天地人と題した印刷物を、參會者一同へ研究資料として配布せられた。近頃の意義ある企てゞあつた。(町二記)

(參會者) 路郎先生、綠雨、春秋、卯三、水車、おさむ、葉平、三碧、鮎美、卜居、觀月公二、沐天、豊稻、愛緒、變人、秋月、夕鐘柳甫、世紀、柳馬、夢裡、みつる、八歩、柳次、泰郎、艸樂、かほる、明暗子、山茶花、白柳子、孝人、新水、素人、義太郎、梅風、雞牛子、一杉、孝風、柳仙、双車、柳影、亂耽、愚陀、青蹄、北人、靈壺、毒仙、山雨樓町二

兼題　匙　　路郎選

其の匙に博士の二字が賴母しく　秋月
結ひ立の情婦は匙の音をさせ　かほる
スプーンをば女は輕くもてあそび　柳甫
怖しい役割を匙引うける　亂耽
箸でたべ匙で食べ子はれてしまひ　變人
博愛と云ふのを匙に教へられ　卯三
一匙をふたりでのみし日もありし　葉平
待たされて居るのに匙は廻される　三碧
戀人の匙の巾だけ口を開け　山茶花
ちともりすぎて匙を右左　綠雨
匙から箸へ退院近し　豊稻
一ト匙の水藥となる瓶を振り　新水
狂的に匙をもて行く暑さなり　義太郎
藥劑師患者と別な匙を持ち　みつる
珍客へ氷の匙がさびてゐる　靖弘
蜜豆へ二本の匙の影うれし　卜居
匙をもつ手もプロでないレストラン　柳影
もつてゐるらしい意識に銀の匙　同
御馳走の匙が冷たい秋の庭　鮎美
毒藥の一匙我と夜の壁　同
匙の音思案はつゞくばかりなり　觀月
父と子の匙に夕刊投げこまれ　同
(人)匙堰る子へ片栗がまださめず　山茶花
亡き妹へ
(地)一ト匙の藥を強いた愚かさよ　水車
(天)一つづゝ匙を貫つて子は默り　變人
(軸)まつさきに夫の方が匙をなげ　路郎
(同)氣をとられながら一ト匙入れてゐる　同

兼題　裾　　路郎選

そうしても居られず裾をからげたり　路郎
ほのかなやみに裾をなほしたゐたん　愚陀
階だんの裾くらうとらしいのぼりやう　泰郎
裾を氣にして雨傘をさげてゐる　柳甫
裾からげお山を下る妓と出會ひ　新水
裾あはせて〳〵花嫁座につき　柳仙
睡むたさを呼ばれて女裾をふみ　山茶花
裾曳いて出るに及ばぬ使が來　艸樂

裾からの風を女は押へつけ　双車
裾からげ之から二人だけの道　世紀
まだ裾に若さをみせて月參り　山雨樓
大厨に云ふて子の裾からげさせ　同
襖の音に女の裾が呑まれたり　亂耽
浮世繪の裾は三角形に開け　同
いつか裾まくつてゐれば蚊にくはれ　琴人
はし折つた裾へ勝氣の素足見せ　同
赤い蹴出しを毛唐は解せず　葉平
病みあがり赤い蹴出しをたまに見し　同
うちかけの裾は上手に向き直り　觀月
裾持てば白の猿又はいてゐる　同
もどかしい裾をまくつて誘ひに來　一杉
裾長ふ着ては淋しい氣を換へる　同

席題　代表　琴人選

代表に委しておけぬ口を出し　山雨樓
應接間代表素茶のまんま待ち　卯三
内氣雄々しき代表の聲を聞き　柳馬
代表者一人が起訴となり　葉平
代表者社長の眉へいひつゞけ　春秋
代表へ代表が出てまとまらず　北人
代表の下駄に燒印おしてあり　青踏
代表は急所を突てマッチ擦り　素人
代表が檢束された朝の記事　水車
代表の顏三角に見えるなり　路耶
みづからを信じ代表椅子につく　同
代表の煙草はとうに消えてゐる　雞牛子
代表に地主はいんま起きたとこ　同
(佳)油畫の部屋に代表待たされる　柳次
(佳)先頭に立つて代表ベルを押し　卯三
(佳)社長の鼻へ代表の汗くさく　柳仙
(佳)官邸へ今日又別な國まり　三碧
(佳)讓歩した代表聲を呑んで立ち　同
(軸)不誠意を擧げれ代表肉迫し　琴人

席題　砂埃り　素人選

就職をあきらめた靴の砂埃り　琴人
青訓が走つたあとの砂ぼこり　梅風
畸菓子屋のガラスの上の砂埃り　おさむ
競馬場こゝからえらい砂埃り　夕鐘
砂埃り知つた女給が乘つて行き　柳次
指揮刀へ歩調のあつた砂埃り　公二
砂埃り露店かまはずしゃべり立て　水車
押賣りを去なしたあゝ砂埃り　鮎美
盜蟲がセーフであつた砂埃り　艸樂
見つからぬ貸家に今日の砂埃り　新水
砂埃り分隊長の服を襲ひ　壽仙
電報がついてゐらしい砂埃り　かほる
砂埃り朝鮮飴が荷を卸し　世紀
冷しあめよく賣れてゐる砂埃り　山茶花
軍艦へ遠く煤都の砂埃り　三碧
後押しの禮を云うてる砂埃り　柳甫
後向きに子が抱かれてる砂埃り　同
(人)砂ぼこりこゝは職業紹介所　路耶
(地)砂ぼこり賣れない品を裏返す　同
(天)砂埃り牛は朝出た順で挽き　山雨樓
(軸)砂埃り立てゝ二哩五十錢　素人

席題　神燈　互選

神燈のそばに女はすつと立ち　世紀
御神燈男の下駄はそろへられ　かほる
かくれんぼう神燈の蔭に見付けた　秋月
景氣よくならんだ茶屋の御神燈　みつる
神燈へ朝までゐたい風があり　一杉
御神燈一千年の苦に座し　柳次
消えかゝる神燈へ奥の笑ひ聲　卯三
御神燈お祭佐七生きてゐる　葉平
神燈へ浴衣姿のふつと出る　義太郎
神燈にざこばの文字の變りなし　新水
降り出した宵神燈の輕くゆれ　三碧
もう子供神燈吊れば祭の氣　沐天
神燈を吊つてその日を若くゐる　同
神燈の事で女將の氣にさはり　白柳子
留守預つて神燈へ氣がとがめ　同
打水のあと神燈に風があり　觀月
神燈の横は涼しき松林　同
神燈の硝子は破れたまゝ灯り　同
三度目の水を打つてる御神燈　路耶
神燈に失意の人の顏が見え　同
神燈の下で桂馬がなつたとこ　同
甚平もよし神燈のゆらぐ街　同

席題　人前　互選

人前でこんな嘘まで云ひにくる　夕鐘
人前をはゞかつて居る若さなり　世紀
人前もあつたものかと妬いてゐる　素人
醉うてゐる惚氣人前はゞからず　公二
人前をくすぐつたくもお叩頭をし　山茶花
人前の不覺しぴれの儘を立ち　一杉
人前は十圓札でつりをとり　柳仙
人前は家賃位と云うて置き　路耶
人前を拔けて勝氣な子は涙　柳馬
人前は如何あらうとも金を貯め　柳次
人前は佛のやうな夫ぢやが　秋月
人前があるとて足袋を出してくれ　卜居
人前で姑に云はれ素直なり　義太郎

人前へ初めましてと花嫁出　同
人前はおもしろさうな男なり　觀月
人前は下駄を揃へてくれるなり　同
人前になるとしびれが切れてくる　同

川柳雜誌社鶴町支部

鶴町川柳行脚句會　大阪

六月十四日　關本雅幽報

二十餘名と言ふ盛況で然も行脚同志ばかりの集ひである。

兼題　噴水　雅幽選

噴水で口をすゝいで神の前　白峯
噴水にしつぽり鷺は濡れて居る　稔枝
噴水のそばへ來てから話し出し　千成
噴水の鯉の餌を手に病みあがり　孤山
噴水のしぶきに小さい虹が立ち　榮坊
夕涼み噴水ばかりに人がより　正路
ルンペンは今日も噴水眺めて居　小柳子
噴水が勵ますやうに噴きあげる　秋月
噴水のしぶき涼しく鷺は立ち　山月
噴水を避けてをし鳥戀をする　巖石
(佳)噴水に濡れても見たい浴衣かな　稔枝
(佳)噴水に緋鯉は鼻を叩かれる　碧郎
(佳)噴水も寫して甘きラブシーン　寛柳
(佳)噴水で冷したラムネ呑んでゐる　白峯
(佳)噴水が折れそうになる風があり　秋月
(人)電飾で噴水花火あげたやう　榮坊
(地)噴水の波に小魚はなれてゐる　變人
(天)噴水の下で蛙は涼しさう　たかを
(軸)噴水で今日も一組見合あり　雅幽
(同)噴水を根據に夏の不良團　同

席題　眞似　變人選

眞似だけも出來ぬと頭かいて居り　榮坊
劍劇の眞似も上手に遊んでる　寛柳
眞似て見る頭ばかりは似合はない　稔枝
はげたパパ眞似する子等へ笑つてる　巖石
眞似をした店が割引きしてるなり　小柳子
藝廻し仕舞ひに犬を眞似て居る　碧郎
子の眞似る事で母親恥をかき　同
(佳)眞似をして飛んで頭をかゝえて居　榮坊
(佳)マヽ遊び夫婦喧嘩の眞似もする　秋月
(佳)千両の眞似にほんとに泣かされる　一龍
(佳)眞似したとよつてたかつて一年生　小柳子
(佳)眞似られて意見も出來ぬ年になる　稔枝
(人)母親はあの子を眞似て見よと言ふ　千成
(地)馬の眞似坊やを乘せて日曜日　秋月
天)口眞似が上手になつて丈夫なり　雅幽
(軸)眞似られて頭撫でたいインコ鳥　變人

席題　鼻唄　秋月選

鼻唄の夜道にまるい月が出て　雅幽
朝風呂に親父鼻唄うたつて居　正風
錢湯のながし鼻唄聞かされる　一龍
鼻唄が女給の前に終電車　碧郎
失戀の此の頃鼻唄君戀し　寛柳
鼻唄の聲に娘は落ちつかず　孤山
暗を行く一人鼻唄歌ふて居　小柳子
鼻唄を歌ふ氣になる仲のよさ　變人
鼻唄で流行の柄縫ひ上がり　稔枝
獨り者鼻唄ひゝく天井裏　巖石
鼻唄を聞いて姑は奥へ行き　白峯
煎餅屋鼻唄で燒く加減よし　千成
(佳)鼻唄の一つも出して病み上がり　變人
(佳)振られたと見えず鼻唄威勢よし　碧郎
(佳)なげた腹鼻唄氣分になつて居る　變人
(軸)鼻唄で今日も叩いた牛の尻　秋月

席題　裸　互選

獨身の室に裸体の額かゝり　榮坊
額ぶち屋裸体畫ばかり馬鹿に賣れ　正路
大膽な女給裸になる氣なり　小柳子
負けぢくち裸となつて火鉢抱き　孤山
夕餉に向ふ裸の親子　巖石
榮坊
秋月
俄雨物干臺は裸なり　變人
腕相撲裸になつて又まける　同
歸るなり裸になつて呑むと決め　同
隅つこの方に瘠せてる裸が居　雅幽
物干で裸四五人呑んで居る　同

席題　涼み　互選

仲の良い夫婦は今日も涼みに出　小柳子
サーベルの音に飛び込む夕涼み　稔枝
夕涼み離れて歩む若夫婦　榮坊
夕涼み世間話で長くなり　たかを
涼み人軒のヒヨータンほめてゆき　千成
夕涼み娘一人で歸つて來　一龍
涼み舟難波橋から砂が落ち　碧郎
涼み臺拔ける息子にあてがあり　同
夕涼みみんないゝのを連れて居り　變人
涼みから歸り金魚をさげてくる　同

川柳雜誌社御池橋支部

六月例會　（大阪）

六月一日　村松壺裡報

兼題　朗　か　靈　壺選

旅客機を楊子喰へたまんま見る　宏朗
朗かな朝カナリヤで目を覺まし　木星

朗かな顔がビールの泡を吹く　白石
朗かになつて口笛吹くのなり　譲治
朗讀へ一つ咳をば交へけり　いわを
朗かな顔が三越前で降り　三碧
朗かに唄ひのけてる女の子　忠彌
朗かさ郵便局が遠いなり　緑雨
（軸）うどん粉を練り〜マダム唄ひ　かほる

席題　ガール種々　靈壺選

バスガール借りて來たよな聲を出し　木星
キャンプガール山のいかりにおびれ　三碧
遲れたと見へてガールは走るなり　かほる

兼題　アイスクリーム　かほる　選

脊の子のアイスクリーム溶けて落ち　雅純
失業がアイスクリーム賣つて居る　白石
梅雨晴れにクリーム機械の音高し　青兒
クリームを食べたらだけのランデブウ　宏朗
クリームよ戀のほてりはさますまじ　三碧
クリーム屋今日も同じ場所に立ち　忠彌
クリーム屋趣味の將棋に足を止め　同
つゝましくアイスクリームの御令孃　夢裡
晝寢起きアイスクリームの味をほめ　同
クリームとそれからあたに暇が要り　鶴峯
盛り立てゝアイスクリーム屋食つち　靈壺
母のみやげにアイスクリームをまち　緑雨

希題　雨續き　かほる　選

雨漏りを大家に見せて降り續き　夢裡
今朝も亦きのうのまゝの傘で出る　鶴峯
雨續きポスター半分とれてゐる　宏朗
天主閣骨のまんまへ降り續き　三碧

兼題　靴　緑雨　選

ほゝえみて見送る彼女に靴輕く　木星
プラットに響靴の音もの悲し　譲治
降ると照うとだゞ一足の靴にして　宏朗
ステージ靴片足をぬげたきり　いわを
潔癖の課長の靴がよく光り　青兒
惱ましい日もたまにあり靴磨き　白石
履き過ぎた事を靴屋に注意され　忠彌
ハッキリト個性を見せる靴の音　同
（佳）道ブラにネカン明るし靴の先　宏朗
（同）責任を感じて結ぶ靴の紐　かほる
（同）心ブラへもつれてとけ靴の紐　夢裡
（同）あいびきの此處から先は重い靴　三碧
（同）憂鬱は靴の重味を意識して　同
（軸）靴音を妻に待たした午前二時　緑雨

席題　置替へ　緑雨　選

置替へて見ても矢張り狹い居間　青兒
置替へた所を子供知つて居る　三碧
置替へてみても同んなじ簞司にて　夢裡
置き替へて五六歩後へさがつて見　鶴峯
置き替へに孫の手をかる樂隱居　よし一
置き替へて左程でも無き四疊半　いわを
置き替へて見たが矢張り氣にかゝ　忠彌
（佳）置替へばかりやつてる暇な店　青兒
（同）病人の言ふがまんまに置き替へ　宏朗
（同）置き替へた机に氣分ちと替り　三碧
（同）置替へてからの賣行考へる　鶴峯
（同）都々逸になつて盃洗置きかへる　かほる

席題　眞劍　鶴峯　選

眞劍になればなるほどかたくなり　よし一
眞劍な眸にあつてたじろぎぬ　譲治
眞劍になれば相手の冷かさ　宏朗
眞劍のたしかに聲がふるへて居　夢裡
眞劍だつたのかと涙をふいてやり　三碧
眞劍が無駄であつた事が知れ　緑雨

川柳雜誌社神戸支部　**臨時鄙友句會**（神戸）
六月十三日夜　於春秋居　西村明珠報

席題　頂上　華水　選

うれしさの頂上明日を考へず　芙城
頂上で吹く口笛のかるいこと　鬼笑太
頂上に立てば理想も小さ過ぎ　明珠
（人）頂上に畫の月ある握り飯　春秋
（地）頂上で蝿一匹がつきまとひ　靖弘
（天）頂上で祭るのは岩に足をかけ　春秋
（軸）頂上に來て水筒のつめを明け　華水

席題　光　弘　選

失業の憂ひへ朝の星光り　華水
氣短かな男の目玉よく光り　明珠
光りもの子供飛び込む母の胸　竹風
光つてる指に電車の目が動き　華水
（人）夜の濱キラ〜光るものがあり　春秋
（地）野心を抱いた男の目が光り　明珠
（天）肝腎の母の指輪が光らない　同
（軸）靴を光らす彼のほそり　靖弘

席題　興奮　竹風　選

興奮は後の事をも考へず　芙城
興奮を母知つてゐて默つてゐ　華水
興奮をふつつりやめた不意な金　明珠
（人）興奮をおさへきれない女と居　鬼笑太
（地）興奮にちぐはぐな事いふてまい　明珠
（天）興醒へ女房うろ〜するばかり　春秋
（軸）興奮へカツプがいたづつ音を立て　竹風

席題　鍛冶屋　　鬼笑太　選

夏といふ姿で冬の鍛冶屋が居　華水
仕事着に變へた鍛冶屋に朝の靄　竹風
鍛冶屋から船成金になつて死に　春秋
(人)一年生鍛冶屋の汗を見て歸る　靖弘
(地)大仕事今日の鍛冶屋は音を立て　華水
(天)鍛冶屋もう四月の汗に黑ふなり　竹風

席題　石　　春秋　選

ねころんで石のありかのよくわかり　鬼笑太
(人)石二つ重ねて子供機嫌よし　華水
(地)石の様に變人煙草とぬ　竹風
(天)蹉いた石を蹴る氣にならぬ夜　鬼笑太

席題　姿　　互選

夏服は姿のまゝに風をうけ　華水
棧橋へ一人立つてるいゝ姿　靖弘
何もかも後姿で讀めてゐる　明珠
急がしい妻の姿に感謝の目　竹風
珍客へこんな姿をしてゐます　春秋

席題　勝　　相撲　吟

勝つ事にきめてバットに火をつける　明珠
勝ちぬいて見れば淋みしい咳が出る　鬼笑太
病み母に勝氣な娘いぢらしく　竹風
機綱が少し動いて勝になり　華水
勝ち續け見物水を打つた様　笑城
玄關へ勝つた勝つたと男の子　靖弘

席題　連想吟

伯父さんが反對をした悲劇なり　春秋
水底に二人の愛が生きてゐる　靖弘
待つてゐた事も口説の中に入れ　明珠
馴れた耳うつろの様に聞いてゐる　笑城
耳掃除二三度呼んだ聲に立ち　鬼笑太

川柳雜誌社鶴町支部寫眞説明（前列）向つて右より山月、千成、のぶを、人變、雨絲、月秋、石巖、をかた、美重、枝稔、峰白、子柳小（列三）るげし、柳寛、路正、坊一、山孤、坊榮、幽雅（列二）碧郎

川柳雜誌社鶴町支部

延長句會（大阪）

六月十九日畫　　關本雅幽報

支部設置の産婆役たる絲雨氏を自助會クラブに迎へ記念撮影す。會するもの絲雨、山月、正風、稔枝、茂草、正路、巖石、榮坊、碧郎、白峰、小柳子、寛柳、孤山、千成、のぶを、金太、たかを、しげる、秋月、變人、雅幽、一坊

題　約　東　　絲雨　選

約束の後の五分は待ち遠し　正風
約束に道が違へて逢へぬなり　稔枝
約束の時間に揃ふよい氣持ち　茂草
約束の時間が迫りバスで來る　巖石
約束の場所で時間は見直され　榮坊
約束を守つて貧乏してるなり　碧郎
約束の上に擔保を取つて置き　白峰
約束のやうに二人は死んでゆき　寛柳
約束へ首までやると笑はせる　山月
誘はれた方が約束念を押し　千成
約束の時間があつて道遠し　同
約束に夫婦の二字が嬉しくて　秋月
約束はしたが工面のまだつかず　同
(佳)約束をしたのに空が曇つて來　小柳子
(同)約束の物足りなさを書いて居り　變人
(同)約束がポプラの下にくたびれ　同
(同)約束をチト氣がゝりな二日醉　のぶを
(同)約束の一人が見えぬ橋の上　寛柳
(人)約束にキレイな土を掘つて居る　變人
(地)約束が濟むとにつこり笑ひ合ひ　同
(天)約束にキレイな虹を見て歸り　雅幽

題　シャツ　　山月　選

一人者公休朝からシャツ洗ひしげる　小柳子
君と僕シャツ一枚で呑みかける　孤山
俄雨シャツ一枚で走つて居　稔枝
上衣脱ぎシャツ一枚の勝負拳　碧郎
シャツだけで近くの夜店ブラつく　千成
この夏をシャツ一枚で伸びてゆき　白峰
虫干しに見る冬シャツはこわくなり　寛柳
毛のシャツを父に着せたい雪が降る　一坊
外出も寢巻もシャツが一ツだけ　のぶを
新のシャツいつか夜行の客となる　雅幽
別荘のあんなところへシャツを干し　同
眞白なシャツに夏痞せ目立つなり　同
新妻はシャツも洗つて時間見る　巖石
シャツも洗つてあげると言ふ娘　同
クレープのシャツを赤字で買つてくる　秋月
ワイシャツを着る程運が向いて來た　同
(佳)伸びてゆく子のシャツが細くなる　金太
(同)シャツ空で汚れて電車の隅に立ち　榮坊
(同)ワイシャツを脱ぐ暇もなく子澤山　孤山
(同)シャツ乾して畫寢なしテント村　雅幽
(同)夏シャツを脱ぐのに汗を添へる　碧郎
(人)古シャツを父の野良着に送る　秋月
(地)汚してくるシャツに子供の太り　變人
(天)にじみ出る尊き汗をシャツが吸ひ　同

川柳雜誌社
梅田支部

小集句會（大阪）

六月十三日カナメ喫茶店　里十九報

兼題　機械　綠雨　選

サイレンに人も機械もひと休み　坊茄子
十二時になつて機械の音が止み　公二
エンヂンのどこかに妙な音がする　觀月
簡單な機械のように云はれて居　鮎美
餘念ない機械へ背を向けたまま　新水
機械場の隅に不平の分子ゐる　琴人
機械場の方からおころときの聲　里十九
(佳)機械場は只六獨の光りにて　同
(同)機械室和服で來れば狹いなり　夕鐘
(同)押入れの隅の機械はさびつく　鮎美
(同)機械又いつもの唄で廻ひ初め　かほる

兼題　埋立地　琴人選

埋立地かん高い聲恥もなし　坊茄子
埋立地こんなとこから水が湧き　觀月
埋立地その棧橋のなつかしく　里十九
市役所の土管が並ぶ埋立地　裸人
雨の日の車がなやむ埋立地　公二
夕涼み寄り添ふことに埋立地　新水
埋立地キヤッチボールに陽がくれる　卜居
埋立地蜻蛉を取つた池だつた　まさる
埋立地黑い顏してとんぼ釣り　四五磨
(客)埋立地都會に遠く灯がゆらぎ　沐天
(同)埋立地迎へきれない風呂が出來　かほる
(同)埋立地鮮人小屋に雨さびし　鮎美
(同)太陽の直射埋立地の埃　同
(同)犬の死を見つけた朝の埋立地　同
(人)埋立地夜店の端は蚊に喰はれ　同
(地)埋立地土の匂へ日が暮れる　かほる
(天)明星が出てゐる宵の埋立地　觀月
(軸)埋立地堀れば石炭殼が出る　琴人

兼題　竹馬　かほる選

竹馬の子がもたれてる高架線　新水
竹馬は歸省の兄を見つけたり　卜居
咽喉突いた事を例へて叱るなり　公二
竹馬で雪の積りてこけて見る　四五磨
竹馬に乘つてやらこいとこへ行き　裸人
竹馬へ今先生の歸りなり　觀月
竹馬の下駄が知れないまゝ戻り　鮎美
雪降れば降るで竹馬乘つて見せ　里十九
竹馬に乘つて小屋根に用があり　同
(人)むこ向いた儘で竹馬返事する　新水
(地)竹馬はその溝板を踏んでゆき　觀月
(天)竹馬の子が叱られる雨上り　鮎美
(軸)竹馬に乘つて大人に付いてゆき　かほる

兼題　紙箱　新水選

紙箱の底から昔の本が出る　里十九
鏡臺の紙箱油じみてゐる　公二
紙箱の一とつ〳〵へ妻のもの　四五磨
揚げ底にした紙箱と知らず買ひ　鶴峯
紙箱のほこりを口で吹いている　かほる
洋菓子の箱爛熟と中味なし　琴人
紙箱の中を調べる青疊　觀月
(佳)紙箱に京人役がしまわれる　卜居
(同)紙箱へ色紙はたんと母なき兒　夕鐘
(同)母の氣の此の紙箱はしまつた　沐天
(同)紙箱をはる姉妹の氣がそろひ　鮎美
(軸)レッテルをはれば紙箱生きてくる　新水

席題　喫茶店　鮎美選

喫茶店何も笑つて好い景氣　四五磨
喫茶店亭主の氣前ほれられる　鶴峯
ほころびをなほして貰ふ喫茶店　かほる
喫茶店心やすさに奥に入り　卜居
日曜へケーキが足らぬ喫茶店　新水
喫茶店女給をおいて揉めて居る　同
(佳)入口を横に這入るも喫茶店　夕鐘

(同)密談を打ち切つてる喫茶店　緑雨
(同)喫茶店出る口笛のセレナーデ　公二
(同)喫茶店女將はたしか二號らし　同
(同)掛取が來てゐる喫茶店のひる　観月
(同)喫茶店まろきひるの溜息よ　同
(人)思ひきや喫茶店にもエロがあり　公二
(地)喫茶店雨に築地のぴらが來る　かほる
(天)外交に疲れてはいる喫茶店　緑雨
(軸)淡海の身振りがうまく禿ている　鮎美

席題　滯在　互選

此の景色が滯在させました　夕鐘
滯在の女はすれてる樣に見え　里十九
滯在へ半年振りの母に逢ひ　新水
滯在の南京虫に嚙まれて居　鮎美
滯在のカミソリ借りて風呂へ行き　裸人
言傳て滯在客を去なすなり　公二
滯在の座敷の隅にあるカバン　四五磨
滯在に雨は豫定に入れてなし　鶴峰

川柳雑誌社

螢ケ池支部報（大阪）

茨木奈緒美報

七月五日

海　町　二選

一日を都會離れて碧い海　舟路
沖釣りに連れて貰つてブル氣取　かず子
漁船が歸る海邊のやかましさ　紅蔦
此の邊に暮して見たい海水着　六華
海の子だと云はんばかりの色で來る　紫涙
妹の大人になつた海水着　沙門
夏が來たパットに海の話など可　章
出養生ぼんやり沖を見て暮し　一流
船一つ沈めて海のだゝ青し　銀花
頂上で賞める眞下を帆が走り　石松子
泳がない妹を妹寂しがり　伊勢子
鬱憤を海の廣さへ捨てに行く　思芳
値のたかい理由は海が荒れてます　巌六
關門を出たなと氣づく涙がしら　同
海に浮くゴミにも集團性をみる　禮二
商船の廣告の繪はいつも凪　同
太腿がつかつた所から泳ぎ出し　公平
鬪爭も苦腦も忘れ海を見る　同
どこまでが海かと思ふ親不知　百萬石
海水着なんと云つても泳げさう　同
海へ來て矢鱈に煙草喫ふ男　康夫
廢港の海に浮いてる藥壜　同
淋しき心に海のたゞ光りゐる　奈緒美
空想をやぶりし波のしぶきかな　同
(人)海一ぱい發動汽船の音に暮れ　思芳
(地)ひとりで來れば涙がものいふ　水馬
(天)腕くみて海の荒るゝに點したり　奈緒美

夕立　愚陀選

夕立が來そうな雲へ急ぐ足　伊勢子
夕立にぬれたい氣持一人居る　奈緒美
夕立がそこへ來ました空の色　紅蔦
夕立に取り殘された撒水車　思芳
夕立を褒めて槇客は座りこみ　六華
夕立へうたれに出たい男の子　藏六
夕立が敷居跨ぐたとこへくる　沙門
土砂降りの最中御飯がふいてゐる　一流
硝子戸の夕立涙のやうに濡れ　梨風
夕立にたゝかれてゐる金魚鉢　康夫
夕立へ子供そのまゝ泣かしとき　百萬石
夕立に向ひのお山消えてゐる　石森

席題　朝　互選

日曜の朝はゆつくり子と眠むり　公平
朝寢する顏一面に陽があたり　伊勢子
おゝ搾られる朝が又來たよ　紫涙
蚊帳はづす音から病舍朝になり　思芳
今日も又朝ツパチから叱られる　飛車
登山服日の出へ靴の紐をしめ　一流
しらゞ〳〵しい嘘をまじへた朝歸り　舟路
絶景の朝へ思はず深呼吸　百萬石
朝の膳に向へばトマトのつてゐる　康夫
朗から朝み昨日のまゝの服　晴夫
朝顏の咲き揃うたへ子がしやがみ　奈緒美
病室は朝の空氣へあけられる　石松子
宿醉の寢床に宵を手繰り出し　水馬
今日も又社長がにらむ朝となり　樂風
今少し眠むらせるといてと母の朝　愚寵
今少し眠むらせるといてと母の朝　康夫
ぬシーツインドへ朝の陽よ　晴夫
齒磨粉朝の空氣の中で散り　六美
旅の朝夢から覺めたやうな街　愚寵

席題　蚊帳　互選

枕蚊帳覗けば可愛い汗をかき　水馬
蚊帳の外西瓜を食べるらしい音　康夫
碁の客を蚊帳の中まで知らせに來　六美
よろこびを語るに蚊帳がちいさくて　愚寵
蚊帳越しに煙草すうてる火が見る　舟路
初めての蚊帳へ子供はめづらしく　伊勢子
電燈は暗し五人の雜魚寢蚊帳　晴夫
施療院蚊帳の音して夜が白らみ　樂風
蚊帳吊つて母在りし日のこと想ふ　一流
蚊帳の中一匹の蚊に惱やまされ　石松子

川柳雑誌社 神戸支部

部友句會（神戸）

七月一日　於華水居　西村明珠報

兼題　太陽　明珠選

太陽にそむいて夢を見續ける　竹風
クレツプの汗太陽へ感謝する　靖弘
(人)太陽の熱に負けじと胸を打ち　竹風
(地)太陽の眞下働らくものゝ汗　春秋
(天)太陽に疲れきつてる背を向け　鬼笑太
(軸)陽が西に落ちて故郷を思ふ　明珠

席題　アスファルト　春秋選

軒店のすしへアスファルトが乾き　靖弘
アスファルト昔のまゝの家があり　鬼笑太
鮮人へ反射がきついアスファルト　明珠
(人)バス、輕くゆれて朝のアスファルト　鬼笑太
(地)アスファルトへツドライトが雨に延び　華水
(天)アスファルト一錢銅貨落ちてゐる　同
(軸)喫茶店出で大股にアスファルト　春秋

席題　渡る　華水選

勞働歌橋を渡つてどこへ行く　靖弘
子にそつと渡すものあり女親　春秋
世渡りの上手な叔父に任せて來　竹風
(人)世渡りを敎へる母の眞面目なる　明珠
(地)橋の月渡つてからの物思ひ　鬼笑太
(天)橋渡りきるまで母の手はかたし　明珠

席題　音　互選

白痴乍ら得心をした雨の音　春秋
靴音は高し榮轉醉ふてゐる　華水
肌ぬぎへ柱鏡が動く音　明珠
天井へ二階の音を叱るなり　春秋
水音に登山靴は立ち止まり　華水

午前二時鉛筆削る音がする　靖弘
悲しさに聞きしは風の音ばかり　明珠

兼題　夢　互選

正夢か一週間は無事に過ぎ　鬼笑太
どう〳〵と瀧の音あり夏の夢　春秋
新妻の夢に夫はうはきもの　靖弘
何處迄が夢か樂しい日が續く　竹風

川柳雑誌 鶴町支部

鶴町川柳行脚（大阪）

關本雅幽報

題　色　木馬選

濱行けばぬりかへられたボートあり　錦石
床上げにまだ顏色を案じられ　紅
不景氣に色街通るふところ手　天柳
座蒲團の色も侘しき二階借　寛柳
夕闇へ壁の白さもとけて居る　雅幽
色紙へ母忙がしい手を取られ　岩石
色合を云へば店員年を聞き　山月
里歸り番茶の色も懷かしみ　碧耶
(客)藥罐の今日は磨いた色で有り　紅
(同)戎橋ネオンの色に染められる　碧耶
(同)色々と並び盡せり玩具店　茂草
(同)顏色をかへても父はさとすやう　白峰
(同)顏色を見てする惡さ叱られず　岩石
(人)頓もしさ決死の色が見へてゐる　秋月
(同)甲上のインクの色の懷かしさ　紅
(地)色々の色に汚れる塗工職　碧耶
(天)水の色見つめて神に近きわれ　變人
(軸)蛇の目の色に染まるお白粉

題　靜　秋月、錦石、小柳子選

屋上で見る大阪市靜かなり　木馬
黑板に靜かにさせるむちをあて　同
竹籔の靜けさ破るホーホケキョ　靖弘
居るのかいと言つて書齋の障子開け　寛柳
スタートを靜かに切つたつばめ號　白峰
奉迎の靜かな中へすべるやう　山月
靜かなる壁になやみの黑い影　のぶを
鐘の音靜かに暮れる子守唄　一枝
靜かなるうちに高砂唄われて　榮坊
戀知つた娘靜かなとこをゆき　岩石
靜かなる朝に産聲高く上げ　幾江
靜かなり炭燒小屋に立つけむり　茂草
折り紙に心とられて動かぬ子　音吉
落椿留守居の我を驚かしぬ　同
うたゝ寢に靜かに妻の掛け布團　稔枝
病人の寢息靜かにたしかめる　天柳
靜かなる雪の夜道を踏んでゆき　千成
分讓地靜かな所と書いてあり　紅
減給へある一組は靜なり　同
日曜日役所の上を鳶が舞ひ　變人
靜まつた咳に殘りの箸を取り　同
ゆるしてる戀は靜かに笑ぶのみ　同
二階借り靜かに降りる事になれ　碧耶
獨り者靜かな書を喰つて居る　雅幽
植え終えて村は靜かに眠つて居　同
(軸)一年生靜かな書を走つて來　小柳子
(同)ひつそりとなつて怪談お茶を呑み　錦石
(同)もう戀を知つて動作の靜かなり　秋月

川柳雑誌社

加古川支部川柳の夕（兵庫）

六月廿日　水田光穗報

辻々に宣傳ビラを貼りつけて　同好の士を

又初心者の飛び入りを待望したが新來者たつた二人しかし毎月一回宛この催しを繼續したいと思つてゐます。

席題　母の喜び

プラットをへだてゝ母の笑ひ顔　泰山
桃割れが似合ふと母はにこ〳〵し　同
初孫はそれ男の子男の子　水蝶子
就職に母壇へ灯をともし　高野
よろこびが淋しい母にしてしまい　篤男
輿入れの其夜のぼせた母の顔　同
瘠がけ汗も嬉しい母に見え　光穂
家出した子が髭つけて歸つて來　魚城
顔見せただけで喜ぶ里の母　美也光
童貞を喜ぶ母をちと怨み　福本

席題　嘘

嘘だとは知りつゝ母は出してやり　美也光
でたらめを並べて香具師は儲けてる　同
小膳者嘘ついたあとひからびぬ　福本
白粉の襟に嘘がはげてゐる　水蝶子
くどい程嘘を語つて得意顔　魚城
醫者かへり嘘を涙で言ふ辛さ　泰寢
胡麻化ししたが何だか寢つかれず　同
嘘にして女給てんから受けつけず　篤男
嘘一つ通夜のみんなを笑はせる　同
自叙傳に嘘もよつぴり混ぜて書き　光穂
嘘と嘘どう違つたか世帶持ち　同

川柳雜誌社簸川支部

川柳大地吟社創立句會（島根）

七月四日夜　於澄田麗亜居伊藤綠之助報

兼題　大地　綠之助　選

大地の愛に鋤が輝く春歩　美登利草
舟乘りになつて大地を戀ひつゝけ　柳光子
荒鷲の大地を蹴つて飛び去んぬ　鴉天
地を割つて出て來た蟬が鳴いてます　紫光
大地の廣さへ夕陽が沈む　幽明
（人）大地にニヨツキと筍の　和彦
（地）颱風は大地を我が物にして走る　華村
（天）夢は大地をまようルンペンよ　麗亜
（軸）欠伸にも大地の朝のほの〴〵と　綠之助

兼題　裸　綠之助　選

金魚鉢圍む裸の子供連　華村
行水のしばし裸で月を賞め　紫光
男性美誇り裸の涼み臺　春歩
裸体にもなれず令嬢汗を拭き　柳光子
幻想の乳房のあたり抱くモデル　麗亜
（秀）裸体の父は餘りに痛せたる　幽明
（秀）裸に遠く花火の消ゆるなり　麗亜
（軸）裸に慣れ切り潮騷の夕餉なる　綠之助

席題　水　麗亜　選

水よ螢の生命を奪ふまい　春歩
谷間の水月を碎つて流れてる　紫光
御神水波を許さず澄んでゐる　綠之助
水に垂れし糸にひた〳〵水來る　和彦
心配をさせた友達京に居る　柳光子
何か言ひたげな友の吸殼をさし　華村
友の死のしきりなり夏の夜を祈る　麗亜
（人）懺悔する友へ熱した燗が出來　綠之助
（地）友情をはつきりと知る夜の涙　同
（天）悲戀の友の朗かに打ち消し　同
同　團扇　紫光　選

團扇持つ靜かな夜の物想ひ　美登利草
今宵うれい團扇の速度　春歩
何や待つ團扇のかげの横顔よ　麗亜
團扇ゥル〳〵星ばかり見て　綠之助
未亡人春は歸らじ絹團扇　同

同　詩人　麗亜　選

詩人の心は耐えず秋風吹いてゐる　幽明
詩の生涯餘りに戀の多かりき　春歩
一生を嘆き詩人は死んでゆき　紫光
詩の友のあれば廻り路する　柳光子
（秀）エーとグロその交錯に詩をひつ　綠之助
（秀）たつた一口詩人の戀よ　同
（秀）ちつとも泳げず詩人　同

川柳雜誌社

小松支部句會（石川）

於春秋洞　上野錦水報

青田を渡る涼風に浸りながら、存分の句作氣分を味はつた後、各自大いに胸襟を披いてエロ、グロ、ナンセンスの發散振り、蓋し北陸川柳のカン、パレードではある。

兼題　古帽子　柳塢　選

赤帽の古びた頃に首に成り　太魚
古帽子掛けたまゝなる佗住居　松水
身の上を語るに帽子の古いこと　逸紅
色褪せた帽子へ夏の明るすぎ　加賀子
古帽が似合ふ兄貴をふびんがり　思芥耶
儲けてるとは思はれぬ古い帽　富久雄
（客）明るみへ來て古帽子氣が引ける　柳淳
（同）門附けへあはれを增す古帽子　柳村
（同）蓼わらの赤が目立つ初夏の午　太魚
（同）新任の署長へ帽子チト古い　柳村

(同)校絞がまだ光つてゐる古い帽　富久雄
(人)古帽子今日も冷めたい朝を出る　青嵐地
(地)古帽が轉つてゐる土工部屋　思芥郎
(天)緊縮の型を大臣古い帽　富久雄

兼題　夏の夜　錦水選

蚊を叩きたゝき怪談ひとしきり　加賀子
夏の夜を誘ふ氣もなく友に逢ひ　太魚
其儘で來いと招れた夏の夜　富久雄
薄化粧あだつぽく見る夏の夜　青嵐
流星に一層涼み臺の更け　井々樓
夏の夜覓の音の柔かさ　柳村
無意識に團扇の動く蚊帳の月　柳塢
生ビール蹴を洩るゝ灯が涼し　松水
二三里は月を友にして夏の旅　柳塢
箱庭の芦に風あり夏の月　同
(秀)八ツ手の葉繁みへ夏の灯が屬き　松水

席題　飲料水　富久雄選

女連れどちらもイチゴ水をとり　松水
水飲んでから一段と聲がはり　柳淳
氷水齒にしみ込んだ三杯目　加賀子
サービスに馴れた女給のソーダ水　思芥郎
挨拶を抜きに肩脱ぐソーダ水　柳塢
乾盃へサイダーもまじる二三人　錦水
(佳)サイダーの栓が抜けない娘同志　思芥郎
(同)サイダーに女給はそばへ近よる　青嵐
(同)帳茶屋馬にも水を味はせ　柳塢

席題　灰　皿　思芥郎選

灰皿へ紙屑も入れて一人者　加賀子
灰皿になつた茶碗へ下女こぼし　太魚
灰皿の煙草が煙ぶる物思ひ　松水
灰皿に金口おしく投げ込まれ　富久雄
流し目に灰皿を見るいゝ女　松水
灰皿をかこむ話しへ割つて入り　柳村
灰皿を見つめ課長の前に掛け　柳淳
灰皿をいじくつてゐる待呆け　富久雄

席題　朝　寢　太魚選

朝寢した丁稚に忙はし段梯子　錦水
當然のものと朝寢の三代目　柳塢
社が引いてからは朝寢の父となり　柳淳
朝寢したことが嬉しい女同志　思芥郎
起される迄と朝寢は又もぐり　錦水
病院の朝を起れば陽が高い　松水
隣から朝寢の門の水を打ち　柳塢

席題　口　柳々子選

口笛の遠く冴へてるいゝ月夜　松水
口紅もうすく涼しい夏姿　萬魚
口數も少ない妻の束ね髪　萬魚
東京へ行く口癖が氣にかゝり　萬魚
(佳)口輕るう出る女房の洗髪　松水
(同)甘い口とは知り乍ら又迷ひ　錦水
(同)もとらぬ口が近所で愛される　兎月
(同)惡口が洩れる障子の外へ立ち　松水

席題　遠　方　井々樓選

吉報を遠く葉書に乘せてくる　兎月
遠方にいなづまを見るむしあつさ　萬魚
(客)團扇からそれて螢の火が遠い　柳々子
(同)石碑たゝ遠い昔を苔に見せ　同
(同)遠い夢旅の泊りの夜明け前　兎月
(同)遠火事へ噂のまんま寢るとす　松水
(同)遠方へ出す荷へ縄のもう一度　萬魚

席題　見晴し　兎　月選

見晴のあんな所にうねる川　柳々子
見晴へ誰か驛辨すてゝあり　同
見晴に落付いてゐる飲仲間　松水
落ちる陽をくすして海は靜かなり　萬魚
生きのびてゐる郊外のいゝ見晴　錦水
絶景に車夫その汗を拭いたゞけ　井々樓
見晴しへつい消えていた煙草の火　萬魚

綠雨居小集（大阪）

橋本綠雨報

七月三日夜　當夜金澤の久流美氏、別府の晃卓氏からも兼題を送つて來られました。

孝行　山雨樓選

孝行者世間へ少しうといなり　晃卓
孝行へ軒の雀が囀りて　觀月
孝行に母子二人のすごやかさ　綠雨
孝行と言はれる迄の藥草履　薪水
孝行の下供はさきに死んで行き　小柳子
孝行の心母に物言はず　久流美
白髮を染めて孝行を說き　同
絹夜具へ父こつぽり寢かすなり　夕鐘
孝行はしたし都會へ來てくれず　同
孝行の素足に他所の灯がともり　雅幽
ペン〳〵草孝行者が住んでゐる　同
夏痩をして孝行に變りなし　鮎美
孝行へ小切手を書く伯父があり　同
せんべ蒲團に母とあたゝむ　卜居
孝行の鍬は朝陽を浴びてゐる　同
孝行は自制の雨にぬれて去に　同
(人)孝行が持てば銅貨の汗ばみて　觀月
(地)孝行に母の背なかの二日炙　鮎美
(天)孝行へ田植の唄の揃ふなり　卜居
(軸)孝行へ浴衣の糊がきいてゐる　山雨樓

乳房　鮎美　選

ふくらんだ乳房娘になりきつて　夕鐘
よつぼどのれむさも乳房ふくませる　薪水
うす着して乳房氣にする年になり　吾水
泣てゐる子供に母は乳房見せ　小柳子
乳房まで塗つてる涼み子をつれて　雅幽
(佳)乳房のふくらみに子をだきかる　卜居
(同)乳首を夫に見せると笑ふのみ　緑雨
(同)兒を抱いた世間話は乳房を見せ　山雨楼
(同)夏痩の乳房おさへて思ふこと　同
(同)心配の重なつて行く乳房なり　同
(人)豊満な乳房も夏のものとなり　夕鐘
(地)だれきつた乳房となりし子澤山　同
(天)兒の熱へ二つの乳が張つてくる　山雨楼
(軸)アトリエの乳房に繪の具塗つて　鮎美

出養生　雅幽　選

出養生へもう牛乳屋問ひに來る　薪水
出養生草は生々してるなり　小柳子
出養生最後の別れとは知らず　緑雨
出養生風の吹く家のこと　夕鐘
出養生歸りともなき戀ができ　同
出養生小鯛の箸をさびしがり　鮎美
陽のあたりのいゝ岩にゐる出養生　同
出養生靜かな波が寄せてゐる　山雨楼
出養生戀は仲々はかどらず　同
出養生ふと眼がさめて波の音　同
出養生白帆が朝の眼に一つ　卜居
(佳)出養生がへちまの棚をねげ行く　山雨楼
(同)汐風の吹かれて痛い出養生　鮎美
(佳)名月の宵にさびしき出養生　緑雨
(佳)出養生二等に乘れば淋しがり　同
(佳)小遣は後から送る出養生　同

ハンモック　緑雨　選

五時迄は熟睡出來るハンモック　薪水
ハンモックゆつて母親編んでゐる　卜居
ハンモック子守歌にゆれてゐる　夕鐘
ハンモック父も一杯氣嫌なり　雅幽
ハンモックばゝさんの名を呼びつけ　鮎美
ハンモック乘る子おりる子よく動き　同
ハンモック綠の風にゆさぶられ　山雨楼
ハンモック疊へ屆く梨の皮　同
(佳)ハンモック寢付く所へJOB　吾水
(同)ハンモックそのかたへ母は立ち　薪水
(同)ハンモック片手は本を乘せたゝ　同
(同)ハンモック母は譯のまで來る　山雨楼
(同)父親がゆ搖でゐるハンモック　同

須磨、明石　淡路岩屋吟行

六月九日　於人丸社茶店　朝田新水報

席題　島田　互　選

三日目に店先へ出た高島田　啞聲
桃割に島田は潤む事が出來　かほる
今年こそ嫁に行きます高島田　新水
前垂の赤さに似合ふ高島田　同
母親は島田に結へと云ふて出る　里十九
高島田少し身巾が狹ふなり　同

席題　途中雜觀　於岩居繪島館

大阪の客へ淡路の蟹が逃げ　啞聲
大阪の土にも觸れて蛸は死に　新水
近づいて來た淡路島人が居る　啞聲
髮結ふて淡路へ歸る娘となりし　新水
勅題に日の出の繪島思はれて　同
ほろ醉ふて淡路藝者の三味もよし　啞聲
氣がれない埃拂ふて飲む氣なり　新水
ほろ醉ひへ巡航船の搖れ心地　啞聲
味氣なく明石に着いた灯がともり　新水

川柳雜誌社　螢ヶ池支部

同人座談會句報（大阪）

六月拾三日　茨木奈緒美報

席題　浴衣　互　選

暗闇へ浴衣なまめかしく過ぎる　晴夫
思ひきり派手な浴衣に赤い帶　紅蔦
噴水の飛沫に濡れる借浴衣　石松子
看板を見てゐるだけの浴衣がけ　百萬石
夕顔の咲いた椽先浴衣がけ　十千代
橋の上僕とおなじな浴衣來る　愚龍
夏痩せを見せぬ女將の派手な柄　奈緒美
浴衣着て痩せてることを淋しみぬ　一流
着るあてもない浴衣をば送つて來　かつ美
一日の暑さ浴衣で忘れられ　伊勢子

觀月居小集（大阪）

六月二十日夜　川村觀月報

題　原稿紙　互　選

生花の影があかるき原稿紙　卜居
原稿紙幻想ばかりのびてゆく　觀月
原稿紙ここにも赤い線をひき　同
かき餅の匂ひ原稿紙の匂ひ　同
原稿を提げて無心に來るのなり　夕鐘
我かことながら原稿のはかどらず　同
原稿紙主義者の兄は死んでゐる　鮎美
原稿紙虫一匹は押へられ　同
世を嗤ふプロレタリアの原稿紙　同

題　優しきもの　互　選

亡くなつた母がのこした京人形　卜居

牛の眼のうるみに子供なれてゐる　同
青空の下にみんなで手をつなぎ　観月
先生に手を洗はせて幼稚園　夕鐘
やさしさは母の手をとり朝詣り　同
張板へ嫁と姑の仲がよし　鮎美
花嫁の聲はやさしくあらたまり　同
剃刀をあわして母は剃つてやり　同

題　金魚　互選

藻の中に搖れる金魚の二年越し　ト居
末の子のとゞかぬとこに金魚鉢　同
戀すれば金魚の浮くも面白し　同
晝寢からさめると金魚浮いてゐる　観月
電報がとゞいた朝の金魚の死　同
やんわりと搖れて金魚は賣られゆく　夕鐘
手の染まるやうな金魚の水をかへ　同
肩越しに首をのばして見る金魚　柳染
夏痩せの眼にも金魚はひるがへり　鮎美
お師匠の椽に金魚の美しく　同

題　初産　観月選

初産へ田苅の父へ晴れてゐる　ト居
初産へ舅もきつう氣をくばり　夕鐘
(人)初産のもう起きてゐる健かさ　鮎美
(地)名前まで決めてお産を待つ　夕鐘
(天)初産へほうかんむりの戻り　ト居
(軸)初産へれずみの音もおもしゝ　観月

柳路居小集（奉天）

岩崎柳路報

六月十三日

六月十三日登美坊君來訪　兩三日前から入梅の樣な雨の降り方鬱陶しい事甚だし、滿洲は內地の入梅より一ヶ月餘り遲れる由、尤も時間にせよ朝鮮に渡れば內地より三十分の相違あり滿洲に入れば更らに三十分都合一時間の相違だから入梅時期も內地と差の有るは無理からぬ事かも知れない。

談たま〳〵川柳座談？漫談？になる。

（題）姑娘（支那娘）

姑娘かと問えば第五夫人なり　深太樓
姑娘の豚呼ぶ聲に黃昏れる　同
姑娘の戀はかなくも隊まで　松代
人目には早い姑娘頰の紅　同
カマボコの馬車姑娘の沓が見え　登美坊
守備兵の眼は姑娘へ皆な向き　同
姑娘の腕輪に銀の持つ重み　同
盛り場の姑娘馴れた厚化粧　柳路
賣られ行く姑娘に淋しい耳飾り　同
戎克から姑娘を呼ぶ麗かさ　同

第五回關西土地川柳句會（大阪）

廣瀨無鬼報

題　眼鏡、下駄、安心、藥　松盛琴人選

めがねすり上げて算盤おき直し　無鬼
重役の眼鏡冷たく光つてゐ　同
袖口で眼鏡を拭いて讀み直し　一久
金燦の眼鏡儲けてゐる話　素月
印鑑へ代書のメガネ濁つて居　同
エナメルの先をぎつちり踏んだ下駄　無鬼
片方をぬいで將棋へ力入れ　一久
コツポリをはいて舞妓の春も過ぎ　同
聲のする奥の氣になる女下駄　鐘生
子供下駄ひつくり返へつて陽氣なり　素月
碁敵の又來るらしい下駄の音　同
幼稚園無事に歸つた靴の音　無鬼
產ぶ聲をきいて家中ほつとする　一久
安心しきつた顏のよく眠り　鐘生
うつかりと藥忘れる程癒り　無鬼
藥瓶朝ちか過ぎる日の光り　鐘生
藥瓶通す光りの輕よりなき　素月

途青柳壇六月例會（大阪）

六月十九日　於塗料青年團事務所

熊谷紅報

題　雷　光路選

雷が忘れたやうに又鳴つた　寬柳
雷が露店の儲取つて行き　千成
雷にしかられて居る蚊張の中　廣崖
雷が二人の仲に急轉步　博水
雷へ屈せず煙を吐いてゐる　木馬
雷に追はれて走る田蒲道　櫻崖
梅雨あけの雷だけは親しまれ　ひかる
避雷針安心と云ふ高さなり　紅
雷に二階揃ふて下りて來る　變人
雷の事も禮言ふ迎ひ傘　錦石
雷は蚊張の中でも見える也　綠雨
雷に晴れて青々庭の苔　琴人
雷へ少し緩んだ米相場　主稅
雷ないゝ事にして縫りつき　同
雷は夫婦喧嘩を落ちつかせ　山雨樓
雷はこれでも足らぬかと光り　同

題　毒婦　主稅選

澤山なファンを湧す毒婦振り　廣崖
毒婦今日勝を崩して醉ふてゐる　琴人
良い女黑黑黑で毒婦めき　博水
毒婦とは知りつゝ深い仲となり　ひかる

摂卷の毒婦染みたる四十後家　錦石
前身を問へば毒婦は笑ふのみ　變人
法廷の美人毒婦のやうに見え　紅
腹痛と見せて毒婦の手段なり　秋月
電車では毒婦に見えぬ顔でゐる　木馬
九州から東京へ毒婦飛ぶ早さ　秋月
(客)繼母に繼子元毒婦言ふて泣き　錦水
(同)立膝の毒婦煙管で指圖する　山月
(同)容疑者を新聞毒婦にしてしまひ　櫻崖
(同)毒婦にはラヂかきらいな物はなし　木馬
(同)毒婦にはまだ思案がつかず灯を見つめ　山雨樓
(人)毒婦から旅館の朝の晴れ渡り　同
(地)立膝が似合ふ毒婦の長煙管　緑雨
(天)且那とり母は毒婦になつてゐる　同
(軸)搾るだけ搾つて毒婦支那へ逃げ　主税

題小供　山雨樓選

夕闇にうちの子おらぬかと探し　緑雨
客があり子供中々寢つかれず　主税
子供居る前で話して行き詰まり　秋月
半分に切れば子供は氣に入らず　光路
藥賣先づ子供等の氣嫌とり　櫻崖
(客)子供もう家の不如意を知つて居り　紅
(同)通信簿子供を呼んで判を捺し　主税
(同)迷いつぜと四五人の子に取まれ　緑雨
(同)ふと子供を差上見てる貧世帶　錦石
(同)新緑へかはるゞ〜に兒を抱かり　琴人
(人)子供等の聲ばかりの夜となり　木馬
(地)足を踏まれて背延する子供　秀忠
(天)姉は姉らしく五ツで遊ばせる　變人
(軸)灯がついてから子供等に狹い家　山雨樓

題借り　緑雨選

借りて屋る本に子供叱られる　變人
借り着した袴が長い焼香場　主税
不景氣と損で借り手を封じ込み　櫻崖
大阪なところ狹くも借り歩き　光路
借金の苦勞もあつた年の暮　多計志
借りに行く氣を強ふする灯がともり　木馬
借りの事言へばいゝよと里の母　琴人
借りは借り世間は廣い呑みあるき　光路
(佳)借りに來てつい雑談に夜は更ける　博水
(同)借りたは知らずに友は飲み續け　紅
(同)借りを返しておちつかぬ飯を喰ひ　琴人
(同)忘れてた借りにも笑ふ久し振り　變人
(同)借衣裳今日突っ張った顔で來る　山雨樓

題菖蒲湯　琴人選

菖蒲湯を上り夜店の金魚へ來　櫻崖
菖蒲湯の香りにりれ忘れて居　淡海
ぐさ〜になつて菖蒲も仕舞風呂　光路
錢湯の菖蒲ほどけて零時なり　錦石
おそ風呂に疲れた菖蒲浮いてゐる　多計志
因緣も知らず菖蒲湯炊いて無事　博水
菖蒲湯へ親子揃ひの浴衣着て　ひかる
菖蒲湯の中で梅雨の事ばかり　緑雨
菖蒲湯上つてゆつくり呑むと夾め　秋月
菖蒲湯一家五人が入りに來る　みつ夫
菖蒲湯へ商買敵やつて來る　山雨樓
菖蒲湯の香ざなつかしく五十年　錦石
菖蒲湯の中は子供の聲ばかり　とん坊
煎藥の香もして　ゐる菖蒲湯　秋月
(佳)午後の陽を受けて菖蒲湯祖父一人　紅
(同)菖蒲風呂今日は小作も貰ひに來　同
(同)菖蒲湯背に青草づいて來る　天柳
(同)菖蒲湯へ朝から浸たる公休日　秋月
(軸)菖蒲湯へ且那少し早く起き　琴人

奉天川柳會六月例會（滿洲）

岩崎柳路報

於奉日町東庵　本月の幹事　柳路、深太樓

氣遣はれた天候は、遂に夕方から本降りになり當番幹事として氣をもんだが、其れも杞憂案外の盛會一同八時參集福來氏より俳人硯海書の軸物五幅寄贈あり、入選點數により其れ〜配布、此度は餘興福引川柳の催あり、トツカピン、ハート美人等奇想天外の景品には正しく臍茶の光景。盛會裡に○時半散會一同（洋車）人力車を連られて歸宅す。なんだか贅澤の樣に聞こえるが其の實市内五錢均一と來て居るから市場の買物も錢湯へ行くにも滿洲の妻君連は皆（洋車）人力車に乘りまし、雨の日等は通學生徒が人力車で通る位はザラにあり、推して贅澤ならざるを知るべしであります。

席題　ビール　白洋選

鬚の泡氣付かぬほどに伯父が醉ひ　四六十
格別とビールに醉ふて世辭を云ひ　柳坊
齒自慢の樣にビールの栓を拔き　筑水
激論の果をビールの泡を呑み　としかず
中元のビール店から名刺と來　深太樓
酒も佳しビールも佳しと二日醉　柳路
ビール呑む郊外へ蟻燒けてゐる　思水
發車待つビールへ更ける稻光り　新朗
返杯のビールへ息のありつたけ　笑鬼
(秀)失戀がビールの味を覺えさせ　松代
(同)一口のビールに母の苦い顔　同

(同)野遊會ビールの割れた音もきゝ　筑水
(同)とも角もビールつき出し申げつ　柳如
(同)肌ぬいでビールに貧けたのが嬉てゝ　登美坊
(人)一本のビールに醉つて氣が揃ひ　笑鬼
(地)ビールでは逆ふ駄目よ妻の愚痴　連樂
(天)ビールでは出ぬ都々逸を酒にかへ　保月
(軸)チビ〳〵と隅のビールの長い尻

浴衣　連樂選

赤い紐平氣で結ぶ借り浴衣　筑水
時間外代診浴衣で飛で來る　松代
駈落は浴衣のまんま引つぱられ　同
浴衣にもアルとプロとの柄を分け　としかづ
浴衣でも形見ときいて下女はほめ　柳坊
浴衣着の毛唐やつぱり靴を穿き　柳如
御行儀を妻は浴衣で追ひ廻し　深太樓
髷連れて浴衣が提げる植木鉢　登美坊
此の浴衣セリ市で買つたとも言へず　柳路
二十一浴衣の柄へ念を入れ　思水
浴衣ではもうかくされぬ腹になり　保月
逢つてゐる浴衣の裾を蚊が齧ひ　新朗
兄さんの浴衣を借りる久し振り　笑鬼
(佳)流行の浴衣女優の名で賣れる　白洋
同)子澤山浴衣買ふにも一思案　思水
(同)ルンペンの汚れ浴衣へ夏は暮れ　登美坊
(同)炎天の竿に浴衣はしゃちこばり　四六十
(同)よく見れば手もある闇の浮浴衣　筑水
(人)事務服も浴衣になると女らし　思水
(地)失戀の浴衣へ冷へた午前二時　松代
(天)見合とも知らず浴衣でついて行き　松代
(軸)ウインドに歷毛を見せる貸浴衣

丸髷　福來選

姉妹が皆丸髷で里へ集り　松代
母よりも丸髷だけは高く見え　柳坊
髷結つて夫に後ろ向いて見せ　柳如
追ひ越して見れば丸髷知つた顏　深太郎
丸髷に差された針の糸がたれ　登美坊
珊瑚珠も幸福らしい髷の艶　同
里歸り母丸髷の出來を賞め　柳路
豆腐屋へ髷の歪んだ目をこすり　連樂
丸髷の無理が通つた夜の市　思水
一度だけ髷に結ふ氣の洗ひ髷　笑鬼
花嫁の髷を見詰める女親　白洋
(佳)つゝましく髷ゆれて居る夜の汽車　登美坊
(同)發車して藝者の髷は連へ寄り　連樂
(同)丸髷の嬉しい里へ女房じみ　思水
(人)丸髷にまだ鬼灯の辯が出る　筑水
(地)丸髷で永い三日を湯に過し　としかづ
(天)丸髷は海水浴を見て歸り　深太樓
(軸)遠出から歸れば元の投島田
(同)丸髷の大い方が第二夫人

席題　惡友　笑鬼選

惡友とよばれる顏のなま白く　深太樓
友からの電話に三味の音も混り　福來
惡友の電話暗號で待ち合せ　保月
誘はれた方が意外にもてゝ居る　福來
一本の煙草惡友分けて吳れ　新朗
朝歸りまた友達の名をさゝれ　筑水
弱點へ今日も惡友無心に來　柳路
(佳)惡友が質屋へ行けと腕時計　深太樓
(同)惡友で通る會社の獨身者　保月
(同)惡友から來た文面を父はほめ　新朗
(人)惡友と一本飲んだ別れ際　登美坊
(地)惡友の取り持つ縁が結ばれる　同
(天)惡友の或日さびしい戀語り　同
(軸)惡友に親父をだます智惠を借り　同

席題　座敷　登美坊選

戀しさがもれる座敷の國訛り　笑鬼
盜電の灯に夏座敷明る過ぎ　同
一人だけ殘る座敷へ高いびき　保月
御座敷を替へて和解のまずい酒　福來
座敷もうしらけた後の二人きり　保月
仲人に見られて座敷氣にかゝり　筑水

社告

町名と番地の改正

大阪市住吉區平野
西之町八三

(舊)住吉區杭全町六〇三

川柳雜誌社事務所

廣い座敷に退職後の淋しさ　柳路
床柱ほめて座敷の上につき　白洋
(秀)お座敷の客が不服な臺所　笑鬼
(同)新妻の髷が涼しい夏座敷　新朗
(同)狗ころを座敷に上げて夫婦喧嘩　深太樓
(軸)お座敷を戻つて裾へ扇風器

示豊川柳會詠草

よい度胸などとあにいはおだてられ　曲豆
蕩兒はじめて借りる度胸出し　陶水
度胸試しなどと女給はおだてあげ　登久
人仲であなたやなどゝ好い度胸　同

川柳雑誌社
神戸支部 **七月例會**（神戸）

七月十一日　於八宮神社　西村明珠報

兼題　海水着　明珠選

海水着磯の香りのまゝ歸へり　南耕
海水着立てる所にうきを持ち　繁堂
水着着てマネキン少し汗をかき　笹舟
お互に妹がゐる海水着　主税
海水着母の乳房がしなべてる　靖弘
寫つされたことに氣附がぬ海水着　睡花
腹這えば砂が崩れる海水着　桃水
泳がない浴衣と話す海水着　春秋
（人）觀樂を追ふブルの娘の海水着　亂耽
（地）海水着親子と見えて淺いとこ　睡花
（天）海水着パン屋を連れて元の塲所　同

席題　ソーダ水　伽藍洞選

ソーダ水明日のプランが成立し　竹風
嬉しさはソーダ水に泡を立て　笹舟
カフエーに來てソーダ水チト高い　籬
ソーダ水すゝめてはづす金釦　睡花
ソーダ水乾き切つてる口にあて　繁堂
ソーダ水母のコップがまだ減らず　明珠
ソーダ水ストローだけが殘される　華水
（佳）ソーダ水まだ相談がまとまらず　南耕
（同）上役の髭がおかしいソーダ水　卯生
（同）ソーダ水だけと惡友誘ふなり　主税
（同）ストローが子の手に折れソーダ水　同
（同）ソーダ水あれがマダムと教へる　春秋
（同）ソーダ水廣いホールの隅にゐる　同
（人）ソーダ水相手の男戚られ　明珠
（地）バラソルが膝すべるソーダ水　桃水
（天）先輩の秘密を知つたソーダ水　亂耽
（軸）ソーダ水だですまさぬ友と來る　伽藍洞

席題　特徴　亂耽選

特徴を互に話す婦人會　笹舟
特徴と知られ相手にされず醉ひ　柳馬
特徴へ刑事のペンが走るなり　主税
特徴があるかと巡査書いてゐる　南耕
特徴を隠そうとする手が淋びし　睡花
特徴もなくて會社は馘になり　明珠
白粉を落せばわかる頬の疵　伽藍洞
特徴を社長はうまく利用する　同
（軸）特徴を持たぬ夫婦へ低い屋根　亂耽

席題　寸法　春秋選

つり服ないち〳〵身に合はせてみ　柳馬
ダンサーの足に觸つた靴屋の手　亂耽
洋服屋少しあはてる客があり　桃水
足袋を買ふ娘寸法二度訊かれ　主税
寸法がどうであらうと男なり　繁堂
何處迄のびるよ寸法又かはり　竹風
寸法を取る間も外交愛想よし　笹舟
寸法が合ふて値が見直さされ　華水
門を出て合格の足重くなり　睡花
寸法が合ふて靴屋の庭に立ち　紋太
計つたようにレデーメードの寸が合ひ　伽藍洞
のつぽの娘丈を問はれて淋びしい　同
寸法へ小さい頭いためてゐる　靖弘
寸法へ娘はやせた顔をよせ　同
（人）テキハキと寸法を見る女店員　桃水
（地）エロの寸法を測つた洋服屋　亂耽
（天）寸法も取れて月賦の服が出來　柳馬
（軸）まゝ母の寸法通り家出する　春秋

席題　波　紋太選

厭いてゐる波の音にも病にも　桃水
父と氣が合はず日暮れの海を好き　睡花
遊覽船波にゆられて歸つて來　柳馬
波を見て埒の明かない切れ話　籬
遠足へうれしく波がよせて來る　靖弘
（秀）午前二時齒いたへ波が光かる　同

席題　妹　互選

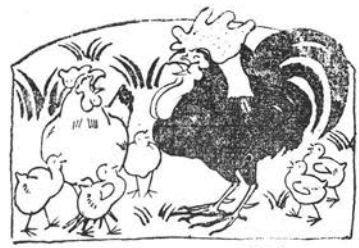
妹の欠伸へ母は笑らはない　靖弘
相談をして妹に見縊られ　伽藍洞
妹もう女らしうに湯へ浸り　南耕
妹の話で母の氣がせける　明珠
妹を借られればならぬはやり風邪　春秋
妹の理想が見える室の色　桃水
幸福な妹今日も拗れてゐる　同
郊外車妹すました顔でゐる　華水
喫茶店妹先に出て了ひる　同
油繪の裸女に似て來る妹よ　同
痩せた妹日記を書いてゐる　亂耽
世の中を知らぬ妹の口にまけ　紋太
妹は順調にゆき子が生れ　紋太

川柳雑誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價格でお頒ち致します。此用箋を御使用を願ひます。

五〇枚綴二冊價　金拾二錢（送料共）

◇御申込は本社事務所宛（切手代用可）



編輯の窓

路郎生

▼特輯號には自分も何か書くつもりで割當を貰つてゐたが、さていよ〳〵編輯にかかつて見ると、原稿が机上に山積してゐるので僕は手を引いた。その戀り編輯後記がてら、勝手なことを書かして貰ふことにした。

▼生きるための直接の仕事でさへ、うまく運ばないで、弱つてゐる今日、「川柳雜誌」が、一回の蹟きもなしに刊行が續けられるのは一つに愛讀者諸君や後援者諸賢の賜だと思ふ。主宰者としては感涙なき能はずである。

表紙と内容とは多少の脈絡を必要とするので、隨分苦心してゐる。今度は槍ヶ岳の雪景にした。點景人物の向つて右は松本市の石曾根民郎君である。この表紙を見て一番驚くのは同君であらう。

▼カットも大分あらためた、山雨樓君からカット製版費の寄附があつたからだ。まだ未發表のが出來てゐる。

▼長野吉高氏の「柳の絮」はだん〳〵面白くなつてゆくので評判がいゝ。根氣よく續稿を寄せられるので喜んでゐる。

▼山茶花君が海士のことについて一寸意見を述べたので研究熱の旺盛な花菱、省二兩氏から海士に關する寄稿があつた。合はせ讀まれたら大いに參考になるだらう。

▼本誌へ絶えずたてついて來た牛文錢氏から難解史句に對する私解が届いた。この原稿は他社へ送つてハネられたものだそうだが、兎に角誌面を割愛することにした。別に敵に鹽を送つた上杉謙信の故智にならつた譯ではない。

▼町二君は「振幅」を山雨樓君は「湧くユーモア」を閑生君は「よい句」を書いた。

▼本號の輕い讀物として編輯局總出で「夜の大阪」を書いた。受持場所の選定で綠雨君を飛田にしたところなどはなか〳〵振つてゐる。まだ振つてゐるのはその後、綠雨君にあてゝ、一通の手紙が届いて、寫眞の一番端の×模樣が妾ですが、あの寫眞を雜誌に載せられると大變ですから着物の柄を削るか妾だけ抜いて頂けないでせうかといふ文意で×カフェーの△子と、はつきり姓名を名乘つてゐるが、綠雨君とんと心あたりがない。

そのうち琴人君から「夜の大阪」の原稿と二葉の寫眞が届いた。その中の一葉の中になるほど△子さんがあきらかに寫つてゐる。コレで讀めたと綠雨君が漸く安堵の胸をなでおろした。

手紙はこまゝとしたためられてゐたが△子さんは、ある事情から晝は女事務、夜はカフェートレスとして身体のつゞく限り働いてゐるんだそうだが、晝の店の人達が川柳家であるので、若し寫眞が掲載されようものなら直ちに失職の憂目を見るからとのことだつた。事情が、どうあらうとも晝も夜も働く一女性のために琴人君の藝術をことはりもなく葬り去ることにした。そして琴人君の原稿中伏字を用ひたのもこの意味に外ならないのであるから諒とされたい。

▼川柳水無月祓を刊行した藤里好古君は八月十二日から一ヶ月太宰府神社の古文書整理に出かけるので、それまでに「川柳月

待さ日待」を本誌に書くと云つてゐる。

▼長崎博士、笠原博士、丸島氏等の肝煎で、天神祭の夕、四時過ぎから大阪帝國大學の記念館樓上で教授連、事務官等によつて組織された阪大川柳會が產聲をあげた。兼題「父」の句評並に作句に就て四時間餘り駄辯を弄した。多年の懸案が實現されたので非常な盛會だつた。散會後大學病院のバルコニーで天神祭の渡御を拜觀した。

▼夏には廿日も休暇があるんだと聞いてゐたので休暇を利用して、何處かへ川柳行脚でもやるつもりをしてゐたが、實際夏が來て見ると三日しか休めないのだと云ふことがわかつた。死にたい〳〵と云ひながらいつまで生きるのか見當のつかないほど生きてゐる人と、よもや死なうとは思はぬ人が、ひよこりと死ぬことを思へば廿日が三日に縮まる位の狂ひは大した狂ひではあるまい。ひよつこり死ぬと云へば今夜の夕刊で見ると北村兼子女史が盲腸炎で亡くなつてゐる。美しい女は廿八位で死ぬのがいゝかも知れぬ。樋口一葉女史はたしか二十五だつたと思ふ無始無終の世界から見れば廿八も百も問題にはならない。しかし作品の生命については深思しなければならない。

▼「川柳雜誌」では「阪大川柳會」が醫者「神豊川柳會」が醫者「御旅支部が齒科醫「川柳草々會」が藥劑師コレはウカ〳〵死ねぬ。

▼御旅支部の七月例會が松の座旅館で開かれた。舊松の座を改築したものであの部屋が呂昇さんのゐられたとこだそうです。妾は知りませんがと女中が話してゐた。なるほどそう聞けば松の座の面影が何處かに殘つてゐる、二十年餘り前に呂昇を聞きに、よく松の座へ出かけたものだ。東廣なども一緒に出てゐたのを思ひ出す。明治末葉の話となると全く隔世の感がある。

▼八月二日は青明忌（神戸支部主催）八日は本社主催の川柳動物句會が天王寺公園の動物園で開催されることになつてゐる。涼みがてら多數の參會者のあることを期待してゐる。

暑中御伺

麻生路郎

麻生葭乃

太つた人には夏痩といふことがありますが私などは四季痩の方ですから、太つた人ほど、暑さがこたへません。蚊を追ひながら筆を執らねばならない方が、よほど苦しいです。蚊と來たら一疋の蚊でもきらいなんです。蚊と云へば、蝙蝠のことを思ひ出しますが、近ごろは、とんと蝙蝠を見なくなりました。蝙蝠の世界にも食糧問題による移住が行はれるでせう皆樣の御健康を祈ります。

不朽洞にて

編輯の夜

山雨樓

▼本號編輯の相談會を七日の晩湊町クラブの一室で開いた。六時頃用意萬端整うたのでそこらの食堂に行つてゐると、その間に路郎師は風の如くに逸早く顔を見せられた。僕はよもやまだお見えにはならぬと思つてゐたので吃驚して口をあけたまゝ叩頭した。しかしそれ迄に僕が心血を絞つて書き上げだ、十七箇條の進言（と云つても思ひ出したまゝを書き連られたものだが）を先生の前に展開したときには流石に先生も「仰山あるなあ」と吃驚してゐられたやうに感じた。

▼ところがその晩首を長くして待つてゐた町二氏が見えられなかつた。翌日氏から、會場變更の通知が着く前に家を出たのだが、どうしてもわからなかつたので空しく歸つたとのハガキ、僕は大變恐縮して詫び狀を出すと、又氏からハガキが來て、あなたの通知の出し方が遲いのではない、郵便の配達が遲れたのだとお叱りもなし。僕益々恐縮の態たらく。

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各別必ず題住所氏名雅號を明記する事。

▼「第一線」への投稿は社友、同人及推薦作家に限る。

▼春秋點及近作柳樽は一般作家へ第一線の推薦作家を除く）の欄とす。但し同一人にて兩欄へ投句は遠慮されたし。

▼光耀抄は女性作家に限る。

▼春秋點、近作柳樽及光耀抄の作家中より優秀作家を第一線欄へ推薦するものとす。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第八卷第十號課題

八月五日締切（各題十句以內）

▼近作柳樽　松丘町二選

▼眞畫　岩本素人選

▼魅力　安西杏三選

第八卷第十一號課題

九月五日締切（各題十句以內）

▼近作柳樽　安井ひろし選

▼屏風　大島濤明選

▼白狀　水谷鮎美　楊井二南　共選

每號募集

▼第一線　麻生路郎選（十句以內）

▼春秋點　麻生路郎選（五句以內）

▼光耀抄　麻生葭乃選（無制限）

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも眞ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和六年七月廿五日印刷　第八卷第八號

昭和六年八月一日發行　（每月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替大阪三一五一四番　電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　川柳雜誌社　振替大阪七五〇五〇番　電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）

（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（兩館）

石塚（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

創作奬勵懸賞川柳

第三回募集の言葉

川柳の社會化運動を徹底させるため、本社は曩に創作奬勵の名に於て弘く社會より、より良き作家の、より良き作品の募集したところが五月號發表の如く多數の秀句佳吟を蒐め得たので更にその第三回を募集することにした。奮つて應募せられんことを切望する。

課題　「顔」

選者　橋本綠雨

賞
一等　金五圓
二等　目覺時計　一名
三等　川柳雜誌（六ヶ月）　二名
佳作　若干名　記念品贈呈　三名

句數　「一枚五句以内（但一人にて幾枚投ずるも可）」

用紙　「川柳雜誌」六月號より毎號刷込みの投句用紙に限る

締切　昭和六年八月五日限

發表　昭和六年九月號（九月一日發行）誌上

投句所　川柳雜誌社内　創作奬勵懸賞川柳係宛

大阪市住吉區平野西之町八三

（切取線）

（切取線）

（句數五句以内）

川柳雜誌（第三回）懸賞川柳投句用紙

住所

氏名

（規定違反は没）

本社基金醵金者御芳名

醵金を拜受しました方々の御芳名を錄し御厚志の程を深謝致します。（受付順）

金五圓也　今村　荒男殿
金參圓也　石崎　洗塵殿
金貳拾圓也　長谷川一徹殿
金參圓也　西尾　双山殿
金五圓也　西脇　弘道殿
金參圓也　尾崎　明晴殿
金拾圓也　笠原　道夫殿
金參圓也　谷口　膳二殿
金貳拾圓也　谷内與一郎殿
金五圓也　中川　知一殿
金拾圓也　内藤業太郎殿
金參圓也　中野　滿隆殿
金參拾圓也　長崎　柳秀殿
金參圓也　向井　一殿
金參圓也　上島　勳殿
金五圓也　黑田　顯尙殿
金五圓也　布施　信良殿
金五圓也　湖崎　銀水殿
金參圓也　清原　徹一殿
金五圓也　關根　道夫殿
金五圓也　大島　濤明殿
金五圓也　示豐川柳社殿
小計百五拾七圓也
累計參百參圓拾錢也

社告

本社基金募集

【川柳雜誌】が柳壇の力强い存在として創刊以來八星霜に亘り獨立自營、孜々として其標榜たる川柳の社會進出、質的向上、量的發展の大施を揭げつゝカ一ぱいに奮鬪して來ましたことは諸君の夙に御承知の事と存じます。これと申しますのも、わが社の主義主張に贊同され、直接間接　大なる御聲援と御助勢を頂きました皆樣御愛護の賜と深く感謝してゐる次第であります。今や多幸なるべき辛未柳壇を迎へ、つら〳〵過去現在の實績を顧み、更に將來を深思しますときに、本誌の使命の益々重大なる事を自覺する次第であります。しかしながら如何に絶大なる熱に燃えつゝあるとは云ひましても物質上に惠まるゝことの薄い同人社友の意氣だけでは到底充分なる躍進的効果を擧げることは容易ならぬことゝ存じますごうしても川柳に熱を持たれ【川柳雜誌】を愛して下さる諸君の御力添へを仰いで時勢のテンポに副ふべく現在の狀態よりも、より以上に積極的な畫策の實現に努めなければならぬことを痛感するのであります。

就きましては去る一月十四日の社友同人會の席上充分審議を重ねました結果、左記規定に依りまして各位に淨財の御喜捨を願ふことゝ致しました。何卒本社の微意のあるところを諒ぜられ本社關係の方々は勿論、大方の各位に於かれましては本計畫の爲め奮つて御申込あらんことを祈ります。

昭和六年二月

川柳雜誌社

規

○一口一圓以上とし幾口にても御申込願ひたく、一口以上であれば端數がついても結構です。この意味は全くの淨財の喜捨を仰ぎたいからです。

○御送金は大阪市住吉區杭全町六〇三、川柳雜誌社事務所内、基金募集係宛になるべく振替（大阪七五〇五〇）が爲替でお願ひ致します。

○〆切期日は別段定めませぬがなるべく本年中に一先づ打切りたいと思ひます。

○御芳名は誌上に錄し領收の證と致します。

○基金として拜受いたしました分を誌代に振替へ又は誌代を基金に振替へる等のことは御用捨願ひます。

○御喜捨は現在の社の經常費に充つるものではありません。將來への堅實さを保證せしむるためのものでありますから、その點御含み願ひます。

川柳雜誌社關係の人々

（順はろい）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清一　淺田一　末弘嚴太郎

客員

伊藤彦造　大島濤明　岡田三面子

社友

川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　吉岡一平　岡本清　田村孝介　窪田銀波　川久流美　前田雀郎　柴谷柴舟　篠原春雨　蛭子省二　相森東魚　元紋太　伊藤綠之助　岩垣奇可愛　茨木奈緒美

生田翠夢　池田雪峰　石川双葉子　西村明珠　田中樂山　川村觀月　淵貴山　友田鶴峰　片桐靈亜　立井登美坊　永田里十九　中川めかく子　中野柳陽　中野裸人　辻左馬越　中澤濁水　見光路　村松夢裡　上野錦水　岡崎桂枝　三輪夏曉

桑原京郎　多田水谷　本丹路　白井梅里　須崎豆秋　増位汀柳　日野華水　平井蒼太　竹内多聞　高橋かほる　北山春秋　木村晃卓　喜多龜井花童子　田中鐵洲　水田光穂　中島鐵洲

三好計加　酒井駒人　朝田新水　關本雅幽　主幹　住田亂耽　麻生路郎

同人

藤里好古　鮎美　井梅里　圓角　櫻井　阿部閑生　形一杉　久水　越田　馬左　楊井二南　柳川洲馬　桐村靈亜　片山久流美　安井ひろし　杉谷專路　橋本綠雨　岩本素人　崎柳路　伊藤愚陀　長谷川一徹　太田朝陽　安西杏三　福田山雨樓　松丘町二　盛琴人　麻生葭乃

編輯局（同人）

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田朝陽
神戸支部（神戸市）幹事日野華水
山口支部（山口縣）幹事柳川洲馬
函館支部（函館市）幹事龜井花童子
高知支部（高知市）幹事中澤濁水
梅田支部（大阪市）幹事川村觀月
螢ヶ池支部（大阪府）幹事茨木奈緒美

金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻左馬
篠川支部（島根縣）幹事伊藤綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田光穂
京都支部（京都市）幹事桑原京郎
鶴町支部（大阪市）幹事關本雅幽
小松支部（石川縣）幹事上野錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松夢裡

堺支部（堺市）幹事友淵貴山
松山支部（松山市）幹事三好計加
守口支部（大阪府）幹事朝田新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎豆秋
京都支部（京都市）幹事桑原京郎
島取支部（鳥取市）幹事中島鐵洲
別府支部（別府市）幹事木村晃卓

南海電車

昭和至誠團學藝部

暑中御伺

川柳同人

半田悌次　柳天全　松島格子樓　後藤竹石
池澤樂居　柳天郎　新井游水
山田久太郎　内村樹光　水本無人
大塚堅坊　紀平凉哉　津田將吉郎
吉田一稻　川戸一壺　三輪夏曉
森本黑天子　土井萬年青　阿形一杉
友淵貴山　谷口海耳　竹内多聞
山田烏莊　上田籬下

暑中御見舞

川柳雑誌社螢ケ池支部

茨木奈緒美　赤城晴夫
硲一流　相川百萬石
畑中康夫　佐々本五百吉
西野藏六　坂口喜久兒
富田水畔　宮崎禮二
龜井愚寵　三谷梨風
河本鬼子　森生六華
武川舟路　杉村銀花
田中水馬
（女子部）
松井悅二　濵渦紅蔦
藤本可章　烏谷伊勢子
藤田杜洋　加藤あざみ
（いろは順）

暑中御見舞

川柳雑誌鶴町支部

港區九條南通一ノ七四二　和田碧郎
港區鶴町三丁目百拾番地　岩橋巌石
港區鶴町一丁目市電公舍　三石孤山
港區鶴町二丁目五十七　兼田一坊
港區鶴町一丁目拾七　石村正路
港區鶴町二丁目五十八　小出榮坊
港區鶴町二丁目五十七　千種千成
港區鶴町一丁目市電公舍　永川秋月
港區鶴町四丁目百六十四　妹尾變人
港區鶴町三丁目百二十六　井上稔枝
港區鶴町三丁目百拾　關本雅幽
港區鶴町三丁目一九八　西村山月
港區鶴町三丁目一一二　古谷愚圖坊
港區鶴町一丁目十七　青山一龍
港區鶴町一丁目二十四　角田のぶを
港區三軒家西二丁目六　松下小柳子
港區三軒家市場通二丁目四十六　林しげる
港區鶴町二丁目七十四　宮岡白峯
港區鶴町一丁目二十四　田中たかを
港區鶴町一丁目市電寄宿舍　照屋寛柳
港區鶴町一丁目二一公舍　福元主美

暑中御伺

川柳雑誌社神戸支部

西村明珠　神戸市三川口町三丁目一九〇

小原鬼笑太　神戸市平野馬場町一二三

谷内靖弘　神戸市中山手通一丁目三六三

喜多春秋　神戸市三川口町三丁目一〇八

首藤竹風　神戸市長樂町七丁目四六（小寺直藏方）

日野華水　神戸市中山手通七丁目一六ノ七

暑中御伺

カ　ナ　メ　喫　茶　店

夏の心プラにお出での節は是非お立寄を緊縮時代に最も適合した

カナメ喫茶店へ

柳人は特に歡迎いたします。

南區周防町疊屋町東入南側

カナメ喫茶店

柳人

永田里十九經營

暑中御見舞

川柳雑誌社　梅田支部同人

水谷鮎美　大阪市此花區龜甲町二丁目七九

小寺鳴玉　兵庫縣武庫郡大庄村字西蛯池四九五

天野卜居　大阪市住吉區喜連町二一九六

川村觀月　大阪市西淀川區姫島町一七二四

姫田夕鐘　大阪市港區高尾町一ノ三七（仁昇堂方）

上久保まさる　大阪市西淀川區浦江町上二丁目五八

都藤古木　大阪市此花區上福島北三丁目一二

永田里十九　大阪市南區疊屋町六

横田方眠　大阪市西淀川區姫島町五二一

暑中御伺

大阪帝國大學醫學部
長崎仙太郎
柳秀

暑中御伺

南海電車
池澤樂居
大阪府下高師ノ濱

暑中御伺

阿部閑生
大阪市外豐中千歳通二丁目

暑中御伺

中澤濁水
高知市與力町

暑中御伺

山本丹路
大阪市住吉區住吉町九九二ノ一
電話戎三九二番

暑中御伺

川柳雜誌社小松支部
上野錦水
石川縣小松町本折町

暑中御伺

阿形一杉
三輪夏曉
南海鐵道難波案内所

時下、酷熱諸賢之健闘を祈る

川柳雜誌社
御池橋支部
大阪市西區四ツ橋南日本樂器會社大阪支店内電新町一〇七三

水沸く炎天・排日に悲憤やせるなき滿洲より柳友諸兄の御健在を祈ります。

同人 岩崎柳路
社友 立井登美坊
誌友 堀深太樓

暑中御伺	前田五健 松山市眞砂町二一	暑中御伺	三好計加 愛媛縣道後湯之町	暑中御伺	金泉萬樂 尼崎市西本町北通二丁目五八
暑中御伺	高見柳骨 神戸市外山田村鈴蘭臺住宅地	暑中御伺	片桐靈壺 大阪府中河内郡玉川村岩田五一八	暑中御伺	川柳雜誌社籔川支部 伊藤綠之助 島根縣今市町塚根尼方
暑中御伺	吉田水車 大阪市東成區片江町四五三	暑中御伺	酒井啞聲 明石市材木町一九	暑中御伺	中西おさむ 大阪市南區長堀橋筋一丁目一七 河合映畫配給彌生商會內
暑中御伺	月刊誌「あけぼの」金十錢 久田狂水 福島縣石城郡磐崎村	暑中御伺	名越不然 神戸市大石一五ノ九	暑中御伺	橫山勝二 奈良縣吉野郡下北山村池原
暑中御伺	池田雪峰 三重縣飯南郡櫛田村豊原	暑中御伺	川柳雜誌社別府支部 木村晃卓 別府市下野口	暑中御伺	双車改 河野夜王 大阪市東成區鳴野町三〇〇ノ五〇三
暑中御伺	高田茶撫朗 石川縣大聖寺町魚町	暑中御伺	橋本牙羊 石川縣石川郡安原村字打木	暑中御伺	俣田華峰 石川縣金石町港町

南海電車

暑中御伺　竹内多聞　大阪市住吉區住の江

暑中御伺　竹田芦穂　大阪市港區八條通二丁目

暑中御伺　西田艸樂　大阪市東區岡山町三七四　電話二二八二番

暑中御伺　一柳憲坊　大阪市東區下味原町交叉點

暑中御伺　松盛琴人　大阪市此花區上福島南三丁目六六

暑中御伺　高橋かほる　大阪市南區北炭屋町二〇一　電話南五九六番

暑中御伺　富士野鞍馬　東京王子堀ノ内一三四

暑中御伺　福田山雨樓　大阪市浪速區湊町保線事務所　戎一〇〇三

暑中御伺　山本靜香　大阪市南區上本町二丁目一六

暑中御伺　岡崎桂枝　大阪市北區澤上江町二丁目十五番地

暑中御伺　岡崎房子　大阪市北區澤上江町二丁目十五番地

暑中御伺　水田光穂　兵庫縣加古川町大川町

暑中御伺　松丘町二　大阪市東成區別所町五〇二

暑中御伺　安西杏三　大阪市東成區北清水町八九一

暑中御伺　岩本素人　岩本武子　大阪市外守口町大枝二〇二

暑中御伺　住田亂耽　兵庫縣武庫郡魚崎町五九二八ノ二

暑中御伺　伊藤愚陀　大阪市東區仁右衛門町五〇八ノ上

暑中御伺

庄万よし

大阪市道頓堀新戎橋

川柳雑誌を毎號手にする人は是非、**川柳たまむし**誌の眞面目な雰圍氣に親しむ事をお奬めいたします。そこには皆樣の渇望やまない生命の躍動と生活の歡喜が展開してゐます。

川柳界必讀の柳誌

月刊 **川柳たまむし** 一部 拾錢

（見本進呈五厘封入）

發行所

大阪市東淀川區中津濱通一ノ一〇二

川柳たまむし吟社

暑中御伺

色紙、短册の御用は

大阪市東區安土町堺筋西

書畫用品
風流雅品商

和正堂

電話本町二一六番
振替大阪九一七五番

探偵部
相談部

結婚調査、家出人捜査、素行動靜調査、資産信用
特許侵害僞造探査等探偵調査ノ依頼ニ應ズ
家出人ノ捜査、子女ノ教護等ニ關シ無料相談ニ應ズ

赤埴探偵社

本社 大阪市東區北濱一（電長本局二三七一）
連絡社 東京、廣島、德島、京城、上海、大連
（營業年中無休・秘密嚴守）

暑中御伺

大阪塗青柳壇會

會員一同

暑中御伺

熊谷紅

大阪市西區新町南通五丁目二〇

暑中御伺

岩垣奇可愛

大阪市北區天神橋七丁目一三

北山悟郎

大阪市天神橋筋七丁目電路

暑中御伺

川柳雜誌社守口支部

朝田新水

大阪市外守口町車庫裏

暑中御見舞申上候

八月盛夏

大阪市東區今橋二丁目

關西土地句會

大橋素月

竹原一久

八田鐘生

廣瀨無鬼

暑中御伺

今村吉朗

尼崎市西大物町六〇

阪崎串二

尼崎市中大物町五一

清水虚白

尼崎市西大物町五一

暑中御伺

川柳雜誌社

天王寺支部同人

尾崎左文兒

府下豐能郡豐中町橋通龍野方

釜本柳村

天王寺區大道四ノ一八

高木敏坊

府下泉南郡春木町二五〇

中野裸人

浪速區惠美須町二ノ三二

久保田柳民

天王寺區大道四ノ三七

福田鶴峯

天王寺區北河堀町六二

須崎豆秋

天王寺區大道三丁目內藤製作所

暑中御伺

柳川雜誌社 御旅支部

東區農人橋二櫻井方（電東五三一二）

大阪市東區紛川町一六　生田翠夢

同　生田方　江戸みつる

大阪市東區淡路町三丁目　梅村路烏

大阪市東區島町二丁目　福田香雨

大阪市東區和泉町二丁目　松田多郎

大阪市港區三條通四丁目　增田靈芝

大阪市東區農人橋二丁目　櫻井圓角

大阪市東區內久寶寺町三五十次特許方　北川斐美

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

化粧品
頭飾品
鼈甲類
袋物
小間物

スミレヤ 染井商店

本店 天王寺區大道二丁目 電話天王寺一二〇九番

支店 天王寺南門公設市場 電話天王寺二二二番

支店 田邊公設市場 電話天王寺三八五番

支店 田邊公設市場玩具部 電話天王寺三八五番

支店 木川公設市場 電話北五四七〇番

弊社の工場

暑中御伺

設備

輪轉機と數臺の印刷機械、活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豊富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり

營業種目

新聞雜誌印刷、圖書出版引受、紙型鉛版活字製造販賣
各種製版印刷、其他附隨事業一切

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番七七〇番
振替大阪八二八四番

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を强ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘 嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和六年七月廿五日再認可　昭和六年八月一日發行

にきびとり
美顔水

心ある家庭には是非常備せられたき皮膚衛生藥

(一)ニキビ、吹出物 ＝ 婦人は固より男子方でも、ニキビや吹出物の多いのは見よいもので御座いませんが、この藥は頑固なニキビや吹出物にも確かな効能がありますので、信用を博して居ります。

(二)蚤、蚊、南京虫 ＝ その他毒のある虫にさゝれた時、この藥を附けますと、不愉快な痛さや痒さが止まり、さゝれた跡が腫物などになる事が御座いません。蚤や蚊で夜お子方のムヅかる時など、この上ない重寶な事がおわかりになります。

(三)皮膚を美しくす ＝ 斯ういふ藥ですから、常用すれはニキビ吹出物を防ぐは勿論、皮膚は次第に磨きこんだ樣に綺麗になり、顏の美しさを增しますので、心ある御家庭に常備せられて居ります。

發賣元
東京・大阪
桃谷順天館

川柳雜誌　（第九十一號）　定價　金三拾錢